

令和5年度子ども・子育て支援等推進調査研究事業

こども・子育て支援の今後に関する先進的な取組
事例の収集・検討に関する調査研究
報告書

令和6年3月

株式会社 日本総合研究所

目次

第1章 本取組の背景と目的.....	3
1. はじめに	3
第2章 検討の流れ及び第1回研究会の概要.....	5
1. 第1回研究会.....	5
(1) 議事次第等.....	5
(2) 議事内容	6
(3) 協議事項のまとめ.....	8
第3章 先駆的な取組抽出	9
1. ロングリストの評価及びショートリストへの絞り込み.....	9
2. ショートリスト対象先への予備ヒアリング.....	10
3. 研究会でのヒアリング対象の抽出	10
第4章 研究会の実施.....	13
1. 第2回研究会	13
(1) 議事次第等.....	13
(2) 先駆的取組実施者プレゼン1 (基山モール商店街組合 (ちびはる保育園基山園))	14
(3) 先駆的取組実施者プレゼン2 (株式会社 CNC 地球まるごと子育て縁)	21
(4) 第2回研究会 振り返りと気づき ～ディスカッション～	32
2. 第3回研究会	34
(1) 議事次第等.....	34
(2) 先駆的取組実施者プレゼン1 (社会福祉法人ハレルヤ福祉会ハレルヤこども園)	35
(3) 先駆的取組実施者プレゼン2 (NPO 法人もあなキッズ自然楽校/大磯・もあなこびとのこや)	55
(4) 第3回研究会の振り返りと気づき ～ディスカッション～	63
3. 第4回研究会	65
(1) 議事次第等.....	65
(2) 先駆的取組実施者プレゼン1 (社会福祉法人愛川舜寿会カミヤト凸凹保育園)	66
(3) 先駆的取組実施者プレゼン2 (社会福祉法人清朗会 せせらぎ保育園/子育て支援café FOYER)	81
(4) 第4回研究会 振り返りと気づき ～ディスカッション～	105
4. 第5回研究会	107

(1) 議事次第等.....	107
(2) 第5回研究会 ディスカッション	107
第5章 事例集及びシナジー整理資料の作成	110
1. 事例集	110
2. シナジー整理資料	131
(1) 第2回研究会の議論を踏まえたシナジー	131
(2) 第3回研究会の議論を踏まえたシナジー	132
(3) 第4回研究会の議論を踏まえたシナジー	134
第6章 研究会における示唆のまとめ	136
1. 子育て支援の在り方/ビジョン	137
2. こども/子育て分野における取組の方向性への提案	138
3. 今後の地域における検討や社会全体への期待	141

第1章 本取組の背景と目的

1. はじめに

子ども・子育て支援法が平成27年に施行されてから8年が経過する。令和元年10月からは幼児教育・保育の無償化が始まり、3歳以上であれば保護者の経済的負担を要することなく幼児教育・保育を受けることができることとなった。また、ほぼすべての4・5歳の子どもが幼稚園・保育所等に入園・入所しており、待機児童数も、調査開始以来初の2,680人と減少してきている（令和5年4月調査）。これまで大きな課題とされていたいわゆる「保育の受け皿の確保」については、一定程度目標が達成されたといえる。

今後は保育の受け皿の確保に留まらず、将来的に発生し得る課題に対応することが可能な、子ども・子育て支援のあるべき姿を追求することが求められる。その一つの手がかりとして、幼稚園・保育所等に留まらず、様々な関係機関と連携しながら子育てに当たっていくことが挙げられる。

令和3年には子ども・子育て支援法及び児童手当法の一部を改正する法律（令和3年法律第50号）により子ども・子育て支援法（平成24年法律第65号）が改正され、市町村子ども・子育て支援事業計画の記載事項として、「地域子ども・子育て支援事業を行う市町村その他の当該市町村において子ども・子育て支援の提供を行う関係機関相互の連携の推進に関する事項」を追加する規定が盛り込まれた。これにより、関係機関の連携がいつそう進むことが期待されている。

制度面の改正と併せて、先進的な取組事例の収集も必要である。様々な関係機関と連携して子育てに当たっている先進的な取組を通して、将来的な課題に対し、どのように対応すべきかについて、検討することが必要とし、昨年度の検討では、包括的な理念・ビジョンに関する検討とともにいわゆる「園」や地域による子ども子育て支援に関して求められるものを議論してきた。他方、理念・ビジョンには働き方や親と子の時間の捉えなおし、困難な状況にある子どもへの支援など他分野と連携して検討を深める要素も挙げられたが、そういった観点の深掘を今後進める必要がある。これらの議論を通して地域・コミュニティを一つの軸とした子ども・子育ての機能の在り方や具体的に求められるものについての議論を深めていくことが重要である。

以上の背景を踏まえ、本調査研究では、先駆的な取組の実践者・学識経験者等により構成される「10年後の子ども・子育て支援の在り方を考える研究会」を開催し、10年後の子ども・子育て支援の在り方について検討した。本報告書は、当該検討内容について取りまとめたものである。

2. 検討方針及び検討

本調査研究では、事務局にて基礎的なデータ収集を実施したうえで、5回の「10年後の子ども・子育て支援の在り方を考える研究会」を実施し、その協議結果を取りまとめる。な

お、研究会の参加の委員は下図の通りである。

委員一覧

No.	お名前	ご所属
1	池本 美香	株式会社日本総合研究所
2	奥山 千鶴子	認定NPO法人びーのびーの 理事長
3	柿沼 平太郎	学校法人柿沼学園理事長
4	後藤 真一郎	全国社会福祉協議会・出版部
5	柴田 悠	京都大学総合人間学部准教授
6	鈴木 眞廣	社会福祉法人わこう村 理事長
7	野澤 祥子	東京大学 Cedep 准教授
8	松本 理寿輝	ナチュラルスマイルジャパン株式会社 代表
9	【座長】 吉田 正幸	株式会社保育システム研究所 代表

第2章 検討の流れ及び第1回研究会の概要

1. 第1回研究会

「10年後の子ども・子育て支援の在り方を考える研究会」の第1回研究会概要は以下の通り。

(1) 議事次第等

○ 開催日時：

令和5年9月19日（火） 10:00～12:00

○ 開催場所：ワークスタイリング「霞が関ビルディング」カンファレンスルーム
（東京都千代田区霞が関3-2-5 霞が関ビルディング 36階）

○ 研究会委員プロフィールと出席状況：

No.	委員名	所属	出席状況
1	池本 美香	株式会社日本総合研究所	出席
2	奥山 千鶴子	認定NPO法人びーのびーの 理事長	出席
3	柿沼 平太郎	学校法人柿沼学園 理事長	出席
4	柴田 悠	京都大学総合人間学部 准教授	出席（オンライン）
5	鈴木 眞廣	社会福祉法人わこう村 理事長	出席
6	野澤 祥子	東京大学 Cedep 准教授	出席（オンライン）
7	松本 理寿輝	まちの保育園・こども園 代表	出席（オンライン）
8	吉田 正幸【座長】	株式会社保育システム研究所 代表	出席
9	後藤 真一郎【オブザーバー】	全国社会福祉協議会・出版部	出席

○ 議事次第：

1. 開会

2. 議事

（1）ご挨拶及び趣旨説明

（2）研究会の概要説明

（3）今年度の取り組みに関する意見交換

（4）吉田座長ご挨拶

3. 閉会

(2) 議事内容

事務局から研究会の概要説明をした。

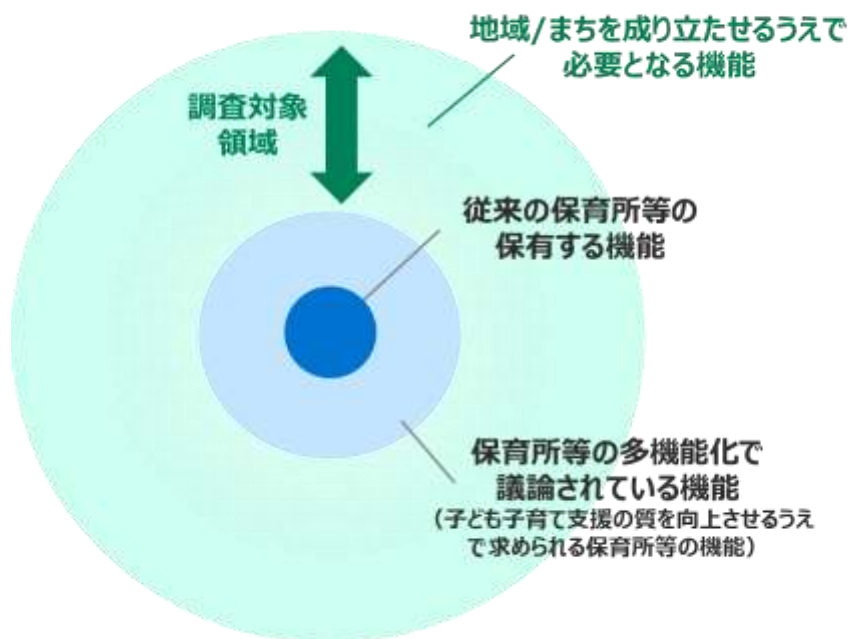
前年度からの流れ

昨年度の検討では、包括的な理念・ビジョンに関する検討とともにいわゆる「園」や地域によるこども子育て支援に関して求められるものを議論してきた。他方、理念・ビジョンには働き方や親と子の時間の捉えなおし、困難な状況にあるこどもへの支援など他分野と連携して検討を深める要素も挙げられたが、そういった観点の深堀を今後進める必要がある。また、それらの議論を通して地域・コミュニティを一つの軸としたこども・子育ての機能の在り方や具体的に求められるものについての議論を深めていくことが重要と考えている。



地域・コミュニティを軸としたこども・子育ての機能とは

以下のように従来の保育所等の多機能化等の検討が「こども子育て支援の質を向上させるうえうえで求められる保育所等の機能」によりフォーカスした機能整理になっている認識である。本検討における地域・コミュニティを軸とした検討とは、さらに広い範囲で「**地域/まちを成り立たせるうえで必要となる機能**」として保育所等がどういった役割を果たしていくべきかについて先行事例を踏まえ議論いただきたい旨を伝えた。



(3) 協議事項のまとめ

第1回研究会における委員の協議事項のまとめは以下のとおり。

- 事例集に関して、社会課題に対してやっていくべきではないか。取り上げるものは新しいものになりがちだが、保育施設としては社会課題に対応する、そもそもの保育の質が高いことが重要。
- 事例集選考は各委員の専門性から見た着眼点から評価、また、昨年度の議論を踏まえて、推薦して欲しい。(事務局がグルーピングした中で保育施設のかかわりの程度の差、という観点でのバリエーションを確保をする。)
- 対象となる領域がわかりやすい事を前提としつつ、従来の保育所の機能と、待ちとして成り立たせるための機能をどのように考えるかという事も忘れないようにしたい。
- ヒアリングは事務局が実施ではあるが、日程を調整した上で、オンラインの場合は参加。ヒアリングには全体共通設問のほか、事例に応じたヒアポイントを委員から出す。時間が許せばこの場で報告してもらい、その際にはここを深堀して聞く。追加ヒア、現地視察&ヒアに同行いただくという事も視野に入れたい。
- 戦後の成長、競争社会が現在の状況を生み出している。そのなんとかしなければならぬ課題の一つがコミュニティの再生。あれもこれも保育園で担いなさいと言われるのは大変。既に疲弊しているので。我々だけで担っていくという発想ではなく、だれと一緒に担ってくれるかを見つけていきたい。専門家が担ってしまうと地域が育たない。地域を育てるという視点も必要。かかわることが楽しいという気付きをみんなに持ってほしい。
- こども子育てに優しい街づくり、子供がたのしいまちづくり、が重要だと感じている。こどもにやさしい街は高齢者にも障害者にも優しい。私的資源、共の資源、という言葉があるが、共有資源であるコミュニティを子育てとどうかわらせるか。コミュニティは防犯、防災なども広く含む。法令、制度、財政的な壁が見えてくることもあろうと感じる。その制約がなくなるとさらに取り組みが飛躍する可能性があるのであれば、まとめの中では言及してもよいのではと感じる。良い報告書をまとめて市町村のやる気を煽るようなものにしたい。すべての基礎自治体に配布するなど、活用の視点も検討していきたい。

第3章 先駆的な取組抽出

事務局作成のロングリストに委員推薦事例を追記のうえ、ロングリスト（44 件）に対して各委員に評価いただき、その結果を踏まえショートリストを作成した（13 件）。ショートリスト先にウェブ会議でヒアリングを実施し、そのヒアリング結果をもって企画合意をはかった。具体的な進め方は以下である。

1. ロングリストの評価及びショートリストへの絞り込み

1. 推薦候補の選出

- ・第 1 回研究会議論の内容を踏まえた、調査候補先の推薦を委員に依頼した。

2. 推薦候補の再整理

- ・事務局リサーチによる候補先リストに委員推薦先を加え、再整理を行った。
- ・ロングリストは 44 件となった。以下のようなロングリストを作成した。

■抽出・推薦の事例一覧（ロングリスト）						
No.	自治体名	事業者名	(保費所名)	保費 所・こ ども課 福祉科	内容区分	内容
1	宮城県	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	子育て支援	「子育て再助」のまもづくりをスローガンとして掲げ、後援団体や地元企業を 中心に子育て支援事業を展開している。育児休業の取得率向上や育児休業の 取得後の就業支援、子育て支援センターの運営など、子育て支援の取り組み を推進している。
2	宮城県	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	子育て支援	子育て支援センターの運営など、子育て支援の取り組みを推進している。
3	宮城県	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	子育て支援	子育て支援センターの運営など、子育て支援の取り組みを推進している。
4	宮城県	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	子育て支援	子育て支援センターの運営など、子育て支援の取り組みを推進している。
5	宮城県	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	子育て支援	子育て支援センターの運営など、子育て支援の取り組みを推進している。
6	宮城県	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	子育て支援	子育て支援センターの運営など、子育て支援の取り組みを推進している。
7	宮城県	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	子育て支援	子育て支援センターの運営など、子育て支援の取り組みを推進している。
8	宮城県	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	子育て支援	子育て支援センターの運営など、子育て支援の取り組みを推進している。
9	宮城県	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	子育て支援	子育て支援センターの運営など、子育て支援の取り組みを推進している。
10	宮城県	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	子育て支援	子育て支援センターの運営など、子育て支援の取り組みを推進している。

...

3. 委員が事例の評価を行い、ショートリストを作成した（13 件）

- ・委員がロングリストから推薦事例を選定。
- ・平行して委員にヒアリング項目案を提示、意見をもらい反映した。

2. ショートリスト対象先への予備ヒアリング

以下ヒアリング項目を作成し、項目に沿ってショートリスト先の園にヒアリングを実施した。

	ヒアリング項目	想定内容
1	取り組みの背景	・取り組みに至った問題意識 ・どのように取り組みを進展・拡大していったか 等
2	取り組み内容 ・保育について ・地域の子育て支援について ・地域との取り組みについて 等	・事業に取り組む際の理念や創設（誕生）の理念（保育所であれば、園としての保育理念、保育の特色、保育の質の担保（定員充足状況、配置基準以上の職員配置をしているか 等）） ・取組体制、人材確保方法 ・有償スタッフの賃金、およびその財源の確保方法 ・地域の子育て支援、親の学び、孤立防止、障がい児支援等（実施事業名があれば事業名も） ・地域との取り組み（多世代交流、地域づくり、コミュニティづくり、地域の企業等との連携 等） ・園等の保護者のかかわりについて（園等の保護者と地域との関係）
3	地域づくりへの貢献	上記取り組みが地域づくりにどう貢献しているか、持続可能性担保のための工夫
4	取組の効果、こども子育て家庭への好影響	上記取り組みが、保育にどのような好影響・シナジーをもたらすか
5	取組において苦労した点、課題、その解決方法	（人、場所、お金などの問題の把握のため）
6	今後の展望	今後取り組みたい・強化したい点 等
基礎情報	・所在地、市町村の基本情報（人口、出生数）、地域の特徴 ・運営主体（法人形態）、運営施設数、施設形態、規模（定員数）	ヒアリング時もしくは別途、基本情報として取得

3. 研究会でのヒアリング対象の抽出

ヒアリング結果を園ごとにとりまとめたものを委員に提示し評価いただき、委員の評価を取りまとめ、ヒアリング対象6園を決定した。

取りまとめ表のイメージ図

法人名	施設名	所在地	A 委員	B 委員	C 委員	D 委員	E 委員	F 委員	G 委員	H 委員	I 委員	合計
(プレヒアリング先の施設の情報)			○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
			○					○			○	3
						○		○				2
			○	○	○	○	○		○	○		7

ヒアリング対象 6 園の選定理由は以下のとおりである。6 園に対し、事務局より第 2 回～第 4 回研究会にてプレゼンを依頼した。

法人名	園名・取組名	選定理由
基山モール商店街協同組合、ちびはる保育園	基山モール商店街、ちびはる保育園	商店街との日ごろからの交流は特徴的であり、商店街の活性化に保育所が寄与している。また、その取り組みへの地域や自治体からの協力もあり、商店街等の地域を園庭としてとらえる環境づくりが行われている点が調査研究の趣旨に合う。
株式会社 CNC	地域まるごと子育て“縁”	保育機能としては経験も浅く恐らく弱い部分があると想定されるものの、地域の繋がりを構築するコミュニティナースという新規性の高い考え方を元とし、地域づくりや地域での子育て支援体制の構築を仕掛け・実際に構築できている実績を複数有している。また、地方型や都市型のコミュニティナースモデルもあり汎用性も高く、さらには地域による自立を目指していることも評価できる。
社会福祉法人 ハレルヤ福祉会	ハレルヤこども園	こどもにとっての育ちを意識しており、「ほんもの」を重視。農園のほか、子育て支援センターや放課後児童クラブを併設する児童福祉センターを運営。地域づくりの視点に立ち、地域に必要と思うものを制度に先だって拡充してきた実績を有する。
NPO 法人もあなキッズ自然楽校	もあな・こびとのこや	遊休資産（大磯郵便局）を地元の資材等を用いリノベーション、コワーキングスペースとの連携、地域交流の輪をいかし地域ぐるみでの子育て支援が実現している。人材確保も成功。また、これらの背景として地域づくり視点でのあるべき姿を法人が描き自治体と共有したうえで取り組みを進めている点は評価できる。
社会福祉法人 愛川舜寿会	カミヤト凸凹保育園	園舎内に障害児通所支援事業があり、すべてのこどもがともに活動する。共生型。こども達や保育者の主体性を尊重し、主体性からくる取り組みを実践する。また、園の成り立ちとして「過疎化が進む地域にこそ、こどもの存在が必要ではないか」との考えから一番高齢化が高い地域での取り組みを進められている点も本検討の趣旨に合った内容となる。
社会福祉法人 清朗会	せせらぎ保育園	学生や妊娠中の人から卒園後の子まで「気軽に来て、いられる」場づくりを目指す保育所併設のフリースペ

		ース/カフェがある。この施設をきっかけとした入園希望者も多く、保育本業とのシナジーが強い。また、この併設施設参加者が身近な課題解決に向けた議論や実際の取組を行っており、将来的な地域づくりへの取り組み可能性を有する。
--	--	--

第4章 研究会の実施

1. 第2回研究会

「10年後の子ども・子育て支援の在り方を考える研究会」の第2回研究会概要は以下の通り。

(1) 議事次第等

○ 開催日時：

令和6年1月23日（火） 10:00～12:00

○ 開催場所：こども家庭庁支援局第一会議室

（東京都千代田区霞が関3-2-5 霞が関ビルディング 20階）

○ 研究会委員プロフィールと出席状況：

No.	委員名	所属	出席状況
1	池本 美香	株式会社日本総合研究所	出席
2	奥山 千鶴子	認定NPO法人びーのびーの 理事長	出席
3	柿沼 平太郎	学校法人柿沼学園 理事長	出席
4	柴田 悠	京都大学総合人間学部 准教授	欠席
5	鈴木 眞廣	社会福祉法人わこう村 理事長	出席
6	野澤 祥子	東京大学 Cedep 准教授	欠席
7	松本 理寿輝	まちの保育園・こども園 代表	欠席
8	後藤 真一郎	全国社会福祉協議会・出版部	出席
9	吉田 正幸【座長】	株式会社保育システム研究所 代表	出席

○ 議事次第：

1. 開会

2. 議事

(1) 第2回研究会での議論の振り返り

(2) 先駆的取組実施者プレゼン

(3) ディスカッション

(4) その他

3. 閉会

（２）先駆的取組実施者プレゼン１（基山モール商店街組合（ちびはる保育園基山園））

基山モール商店街組合（ちびはる保育園基山園）より、資料に沿ってプレゼンテーションをご実施いただいた。プレゼンテーションの実施内容は以下のとおり。

<商店街の概要>

- 商店街の中にある保育園。エリアとして保育機能を担うことにより様々なシナジーを創出。商店街側の「持続可能なまちづくり」構想と、町側の商店街の空き店舗を活用し保育園を設置する構想から、商店街の中に保育園が移転してきた。
 - 基山モール商店街は、家族のような温かさを持った駅前商店街として長年親しまれており、飲食店、美容室など 20 店舗が活躍中。駅から 1 分の好立地ということで、若手の参入も新しくできているということが特徴。
 - 再開発によって、昭和 57 年に整備された商店街。ほかの商店街と一緒にシャッター商店街というものになりまして、2015 年、2016 年ぐらいに危機感を覚えて、大型ショッピングセンターにはやっぱりかなわない、何もしなくても人が集まる仕組みをつくろうということで、「補助金に頼らない、持続可能なまちづくり」ということを題材にして考え始めた時期だった。そういった中で、ちびはる保育園が開園する 1 年ほど前、交流の場となる街中公民館というものをつくった。商店街の中に設置して、サークル活動とか無料の休憩所とか、小学校の絵画とか地域住民の写真展とか、設置するような街中公民館をつくり始めた。
- そういうときに、町のこども課というものが中心となって、商店街の空き店舗を活用して保育園を設置しようじゃないかという構想が生まれた。もともとほかの場所にあったちびはる保育園が移転してきた。そういったところで保育園と商店街の共同の取組が始まった。

<保育園の概要>

- 20 年ぐらい前にこの基山町でただの認可外保育園を開園していたが、認可外だけではなかなか運営が厳しいところに、平成 27 年頃に子ども・子育て支援法案が始まりまして、0・1・2（歳児）の小規模保育施設をつくらないかという動きがあった。当時の副町長、現在の町長から声をかけていただいて、商店街の活性化ということで小規模保育施設として入ってもらって、商店街をにぎわわせてくれないかというご提案をいただいた。保育園をつくる時の補助金とはまた別の経済産業省の補助金で商店街の中に小規模保育施設をつくらせてもらった。町長の思惑と私のつくりたいという思惑とが合致して、つくることになった。
- 保育園をつくる時に一番気にしなければいけないことは、近隣住民からのクレームで、そこをすごく気にしていたが、基山モール商店街の中につくる時には、商店街の皆さんがとてもウェルカムで迎えていただいた。

<地域づくりへの貢献>

- ちびはる保育園限定の商店街のお得マップというものを作成したり、ちびはる特製のカレンダー、こどもたちがクレヨンでかわいらしい絵を描いた絵がプリントされている特製のカレンダーを商店街の各店舗に配布したり、保育園からの積極的な活動を基山モール商店街にした。そのお返しに商店街からは買い物特典のカードをプレゼントするとか、そういったものでちびはる保育園さんを拠点として、モール商店街で積極的なお互いの交流が行われている。
- 町の中心市街地活性化事業で、商店街の歩行者専用道路（グリーンロード）をつくった。交流の場となっている。

<取組による変化>

- 商店街の歩行者天国「グリーンロード」の一部が、こどもたちの遊ぶ場所として利用されている。こどもたちを商店街の人々が見守り、支えるとともに商店街と保護者との新たな交流も生まれている。商店街に活気が出て、商店街の空き店舗減少にもつながっている。こどもたちを商店街の人たちが見守ったり支えたりするとともに、商店街とこどもたちの保護者との交流も生まれてきており、商店街にとっても精神的な面でプラスになっている
- 夏祭りにはこども用の山車（だし）をちびはる保育園の園児に担いでもらったりすることで、数十年続いている地域の祭り、文化、そういったものの体験をしていただいて、継承につなげていくとか、地域のおじいちゃん、おばあちゃんとかとの交流も図っている。夏祭りの山車の参加人数を見てみると、基山モール商店街の参加数が群を抜いて多くなっており、こういった活動がこどもたちと商店街の取組の成果ということを感じている。

なお、プレゼンテーションの際にご説明いただいた資料は以下のとおり（一部抜粋）。

基山モール商店街

基山モール商店街について

基山モール商店街は、駅のような温かさを持った駅前商店街として長年親しまれています。飲食店、美容室などが現在20店舗が活躍中です。JR九州鹿児島本線「基山駅」から徒歩1分の好立地。着手の参入で新しい風も吹いています！

組合概要

組合名：基山モール商店街協同組合
代表者：理事長 松尾 道
設 立：昭和56年3月6日

基山町イメージキャラクター「きやまん」「きやまる」

基山町のイメージアップと、基山町の魅力を町内外へ発信するキャラクター「きやまん」と「きやまる」。
基山町の豊かな自然と基山町を守る防人をイメージしており、基山・秋光川がデザインされ、また町の花つじがあしらわれた虎をかぶっています。
基山モール商店街でもPR活動などで大活躍中です。きやまん茶をはじめ、グッズも発売中です！皆さんもきやまんと仲良くして下さいね！
もっと詳しく「きやまん」「きやまる」を知りたい方はこちら。

基山モール商店街HPより抜粋

活動情報

いいことデー

売り出し

毎月第1土曜日と第3土曜日各店舗がポイント2倍や売り出し企画を行っています。

きのくに祭り

7月には基山町観光協会、基山町商工会等主催のきのくに祭りに、毎年遠う山車を作って参加しています。開催日は毎年違うので基山町役場、商工会のホームページでご確認いただければ幸いです。

クリスマスイルミネーション

11月中旬頃よりクリスマスのイルミネーションを飾って、夜の商店街を輝かせています。

是非お越し下さい

大型店舗はない、商店街ながらのきめ細やかなサービスを各店舗がいたしておりますので一度覗いて見て下さい。

商店街には、商店街協同組合の事務所がありますので、何かございましたらお気軽にお尋ねください。
(平日10:00～15:00まで。土・日・祝日休み。)

基山モール商店街HPより抜粋

店舖一覽



基山モール商店街HPより抜粋



佐賀県基山町発口ーカルメディアーおおあざきやまー より

7月下旬に開催される「きのくに祭り」は、20年を超える歴史がある盛大な夏祭り。JR基山駅前通り・基山モール商店街一帯に露店が並び、町内のさまざまなグループによるパレードや、つなひき大会、町民総踊り（盆踊り）など、一日中盛り上がります。



ちびはる保育園（基山園）の基本情報

- ・定員：51名（在園児42名）※小規模保育事業の定員は19名
- ・保育士数：9名
- ・開園：平成15年9月
- ・住所：基山町大字宮浦186-23
- ・連絡先：0942-92-8081
- ・公式ホームページ

・基山モール商店街の並びの真ん中にある、ちびはる保育園。もともと町内の別の場所で開園していましたが、小規模保育施設への移行を考える過程で、基山町がモール商店街の空き店舗を移転先として紹介、2016年に現在地に引っ越して来ました。

・保護者向けの駐車場は、園の周辺にある駐車場をいくつか借りているそう。保護者による送迎は商店街裏手の入り口で行われていますが、週に1回は商店街の表玄関を利用して、近隣との交流もはかられています。



佐賀県基山町発ローカルメディア〜おおあきやま〜 2017特集記事より抜粋

教室

園内は、大きく2つのエリアに分けられています。小規模保育事業のエリアと、認可外保育園のエリアです。



3歳以上の子どもたちのスペースも広々！



2歳児までのスペース

佐賀県基山町発ローカルメディア〜おおあざきやま〜 2017特集記事より抜粋



グリーンロードは2013年2月の復興事業の一環として「子どもで、商店街に明るさ」をテーマに

- ・商店街にある保育園ということで、「園庭」はありません。しかし商店街の歩行者天国「グリーンロード」の一部が、子どもたちの遊ぶ場所として利用されています。園から歩いてすぐの公園で遊んだりすることもあるようです。

佐賀県基山町発ローカルメディア〜おおあざきやま〜 2017特集記事より抜粋



昭和57年にオープンし、当初は人をかきわけないとい歩けないほどにぎわっていた基山モール商店街。しかし、年々人通りが少なくなり、シャッターが閉じたままの店舗も増えてきました。そんな空き店舗に、一昨年、保育園が移転。そこから、商店街の雰囲気が変わりはじめました。

「子どもは、地域の宝。保育園が移転してくるという話を聞いたとき、『商店街が明るくなるぞ!』と思いました。」と話すのは、基山モール商店街協同組合理事長の松尾さん。移転は、基山町役場が呼びかけ、今では、商店街に子どもたちの楽しげな声が響きわたっています。

『ちびはる保育園』の園長・杉原さんは、「保育園は騒がしいと、地域の人とトラブルになることがあります。しかし、この商店街のみなさんは本当にあたたかく迎えてくれて、感謝の気持ちでいっぱいです。」と笑顔。保護者の方が商店街のお店に立ち寄られるようにと保育園でマップを作ったところ、園児たち



ちびはる保育園 園長 杉原 伸介 さん
基山モール商店街 理事長 松尾 滋 さん

の送り迎えの際、商店街のケーキ屋などに足を運ぶ方も増えてきました。また、商店街の店主のみなさんと園児が一緒になって、すぐ近くの神社に畑をつくり、園児たちは楽しくブロッコリーや白菜などを栽培しています。基山町役場の働きかけでつながった商店街と保育園の出会いには、お互いにとって良い縁となりました。

また、園児たちにとっても、商店街は格好の遊び場。松尾さんが商店街の歩行者専用道路『グリーンロード』に水で消えるチョークを使い、『けんけんぱ』を書いて見せたところ、園児たちは緑の道にのびのびと絵を描き始めました。毎年7月に開催される『きのくに祭り』では、商店街のみなさんと一緒に園児が山車をひいています。「子どもたちが大人になったときに、商店街の人と遊んでもらったという記憶が少しでも残っているとうれしいですね。」と杉原さん。

商店街には、保育園の他にもデイサービスや就労支援施設なども移転し、商業の場から人が集うサービスの場へと変化しています。「子どもたちに手をふったり、声をかけたり。商店街のみなさんがやさしい気持ちになれます。保育園のみなさんには心からありがとうございます。保育園の移転がきっかけとなり、たくさん笑顔が生まれている基山モール商店街。街の通りに活気が生まれただけでなく、『子どもを地域で見守る』というあたたかな気持ちと新しい商店街のカタチが生まれています。」

基山モール商店街 ☎0942(92)0025

(3) 先駆的取組実施者プレゼン2 (株式会社 CNC 地球まると子育て縁)

株式会社 CNC 地球まると子育て縁より、資料に沿ってプレゼンテーションをご実施いただいた。プレゼンテーションの実施内容は以下のとおり。

<企業概要>

- 2017 年から島根県雲南市に本社を構えて、事業に取り組んでいる会社。コミュニティナースというものの社会実装に取り組んでいる。住民さんの生活の動線上にナーシングのようなかわり方、目の前の人の健康を気遣うような声かけだったり、おせっかいができる人だったり、その行為のことをコミュニティナース、コミュニティナーシングと呼んでいます。そういうコミュニティナーシングなかわりができる人をふやすということや、そういうかわりがこれからもずっと続いていくように持続可能なモデルを開発するという事業開発だったり、このことについて取り組んでいる。
- 取り組む社会課題としては、孤立・孤独・分断の解消。孤立・孤独・分断を解消していくことによって、皆さんの健康寿命が延びていたり、誰もが生き生きと過ごしていけるということだったり、そういう社会を実現することにつながると考えて、ここに取り組んでいる。行政の制度に頼らずとも、サービスに頼らずとも、住民さん自身でみんなで一緒に幸せになっていく、健康になっていくということが実現していける。そう考えて、コミュニティナースをふやすことで相互扶助の社会をつくり出すというところに取り組んでいる。

<地域まると子育て縁の概要>

- 子育て世代を対象に何か事業モデルとして構築できないかということで、地域まると子育て縁というものが始まっている。
- 「えん」とついているので保育園かと思われがちだが、保育園ではない。こどもが親と離れて遊びに来ることもあるので、認可外保育の設置届け出はしているんですけども、たてつけとしては多世代の地域交流の拠点。なので、公民館のような位置づけでこの建物は運営している。
- 雲南市の中に食の杜という複合施設があり、農ある暮らしを発信する拠点として、自然とともに生きることを大切にしているような事業者さんたちがみんなで集まって、こういう敷地を運営している。その中の、かわらぶきの家の、こどもの拠点というところにある。

<事業の視点>

- 目指したいビジョンとしては、現状の子育ての在り方は制約がふえるところがあると思うが、そういう制約から解放されて、こどもがいるから私はこういう新しい世界にも出会っていけるんだという、開いていくようなことができるといいなと考えている。新しい

親さんとのコミュニティができたとか、地域のいろいろな人と出会っていったとか、新しい趣味ができたとか、そういう人生における選択の幅が広がるみたいな、そういうものに子育てを進化させていきたい。

- この事業での提供価値は、やはり地域みんなで子育てをしていくという、支え合う共助のネットワーク（コミュニティ）の創出。自分たちの会社が提供できる価値は、人をつないで、その人が本当に願っていることを実現していく、そういう共助ネットワークにいろいろな人を引き入れていくということだと思っているので、そういうことを子育て世代に対してもやっていけたらと考えている。
- こどもが1人で遊びに来るという、いわゆる一般的な一時預かりみたいなこともしているし、親子で遊びに来ることができるようなイベントの企画・運営もしたりしている。
- 事業の現場スタッフにはモンテッソーリ教育の国際資格を持っているメンバーもいますので、その教育を受けられるように、預かりだったり、イベントの内容を設計していたり、周囲には豊かな自然があるので、そこで思いっきり遊ぶみたいなこともやっている。

<地域とのつながり>

- 上記のような取り組みをする中で、地域の人が、自分が持っている子育てのノウハウを誰かに生かしたいという方だったり、こどもと遊ぶことが自分の生きがいのから、一緒に過ごせるのが楽しいよと言っていたり。そういう皆さんとこども、親子がかかわっていただくことで、こども自身には社交性を身につけていただいたり、親さんにはいざとなったときに頼れる先として、私たち以外にも地域にいろいろな人たち、頼り先がいるという状態をつくっている。
- 食の杜の中の事業者さんに職場体験に行ったり、自分たちで土をさわってみる経験をしたり、その地域に根差す伝統芸能に触れるイベントをやったり、こどもも楽しめるし、親さんも楽しめるみたいなところを大事に、こういう地域多世代交流事業みたいなことをしている。食の杜の事業者さんとこどもたちが定期的にかかわれるような機会を、子育て縁では意図的につくっている。
- 我々が「話しかけな」とか、地域の方に「積極的にかかわってください」みたいなアレンジは一切していなくて、接点さえ設けてあげると、お互いに気になる存在でもあるのでコミュニケーションがふえてくるというのが、我々としてもこの2年ぐらいの事業の中で見えてきている。
- 休眠預金等活用事業の助成金を使って事業の立ち上げに取り組んできたが今年度でそれが終了するため、事業の運転資金の確保に今取り組んでいるところ。こどもさんが1人で来るみたいなところでは預かりという形で利用費、利用料を取らせていただいていますし、親子参加の場合は、親さんが見てくださるのでスタッフのリソースが減るという考え方から、もうちょっと減額して利用料をいただいている。
- 雲南市は今、待機児童がゼロなので、保育園に入れなくて困っている人が多いとい

うよりは、平日は保育園に行けているんだけど、土日に遊びに行く先がないとか、土日はいつも親子でショッピングセンターに行くみたいな過ごし方しか選択肢がないみたいなことだったり、そういうことが多いので、毎週金土日に拠点を開放して、親子参加のプログラムを中心に実施している。

なお、プレゼンテーションの際にご説明いただいた資料は以下のとおり（一部抜粋）
※令和6年1月23日時点。

地域まるごと子育て縁 事業説明資料

総山 萌

株式会社CNC 出雲雲南エリアマネージャー

2024.1.23

団体プロフィール

会社名	株式会社CNC
設立	2017年3月
所在地	〒699-1311 鳥根県雲南市木次町里方 422番地
従業員数	32名(業務委託、パート社員含む)
代表者	矢田 明子
事業内容	- コミュニティナースの育成に関する支援 - コミュニティナースの普及に関する支援 - 医師、看護師、療法士、介護士、その他の医療・福祉人材の育成支援、教育カリキュラム開発、研修会の運営及びコンサルタント業務 - コミュニティケア、地域医療、在宅医療に関する情報の提供、教育支援、講演会等の企画運営 - コミュニティケア、健康の保持増進のための調査、研究、支援
拠点	鳥根県雲南市、北海道更別村、愛知県豊田市

代表プロフィール



矢田 明子(やた あきこ)
株式会社CNC 代表取締役

経歴

2014年 島根大学医学部看護学科卒
2014年 島根県雲南市立病院企画係保健師
2015年 島根県総合発展計画策定委員就任、NPO法人おちうぽ 創業
2016年 株式会社 Community Care 創業
2017年 Community Nurse Company 株式会社 創業
2020年 一般社団法人Community Nurse Laboratory 創業
2021年 厚生労働省「重層的支援体制整備事業(参加支援事業)」調査事業 有識者委員
2021年 内閣官庁「地方公共団体における多世代交流を通じて活性化するコミュニティづくりの具
体化に向けた支援に関する調査研究事業」研究委員会

受賞歴

2017年 CCJAチャンピオンオブチェンジ入賞「医療人材による地域コミュニティ作り」
2018年 日経BPウーマンオブサイヤー「超高齢化社会の希望賞」受賞
2018年 公益財団法人日本ユースリーダー協会第9回「ユースリーダー賞」受賞
2018年 WIRED Audi INNOVATION AWARD 受賞
2019年 Business Insider Innovation Award「BEYOND MILLENNIALS 2019」受賞
2019年 第7回DBJ女性新ビジネスプランコンペティション「ソーシャルデザイン賞」受賞
2020年 2019年度シナズン・オブ・ザ・イヤー受賞
2022年 ICCサミット FUKUOKA 2022「ソーシャルグッド・カタバルト」2位入賞
2022年 第10回アジア太平洋高齢者ケア・イノベーションアワード HOME CARE FOR
AGING-IN-PLACE 部門 グランプリを受賞

著書

2019年 氷庫舎「コミュニティナース まちを元気にする“おせっかい”情きの看護師」
2022年 医学書院「地域・在宅看護論 [1] 地域・在宅看護の基礎」第6版第5章執筆

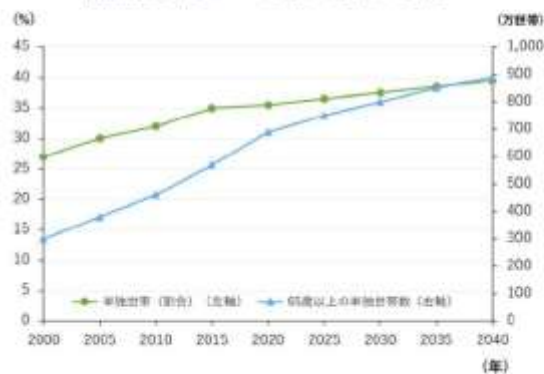
CNC

3

取り組む社会課題と目指す社会

孤立・孤独・分断を解消し、
誰もがお互いを当たり前に関心し合う社会を目指します。

高齢者を中心に一人暮らし世帯が急増



「孤独」は「喫煙」よりも健康に悪影響

寿命に与える影響度



ブリガムヤング大学の研究をもとに作成

「孤独」は「喫煙」に匹敵する
最も健康に悪い習慣

<https://byokosai.net/articles/401896?page=2>

CNC

4

取り組む社会課題と目指す社会

コミュニティナースは、率先して目の前の人を気にかける存在です。
暮らしの身近なところで、生きがいやウェルビーイングを一緒につくります。
コミュニティナースを増やすことで、相互扶助の社会を創り出します。



CNC

©CNC Inc.

5

実践モデル開発事業 - 雲南市における開発事業



1 地域おせっかい会議

まちの人の「強み」や「得意」を活かし合い、まちの人の元気のためにできることを相談・考案するコミュニティを企画運営している。

2 ユース事業

ユース世代の方々の挑戦を応援することで、ユース世代の可能性を広げつつ、周辺の人々によるGood おせっかいを引き出す。

3 地域まるごと子育て縁

自然と地域文化、子どもの主体性と強みを伸ばす雲南独自の子育てコミュニティ。サマースクールや地域イベントなど2022年9月グランドオープン。

CNC

©CNC Inc.

6



地域まるごと子育て縁とは

「地域みんなでこどもを見守り育てていく」

それが未来の子育ての当たり前となり、
子育てによって、関わる人、地域、世界が
豊かな未来を創り出していきます。

「地域まるごと子育て緑」は、その場にいるみんなで子どもを育て、人と地域の緑をつないでいく場所です。室山の身近な自然が遊び場で、四季を通じて思う存分身体を使って遊んだり。地域のお年寄りが地域秘伝のお菓子作りを教えてくれることもあれば、昔話をしてくれたり、孫のようにかわいがってくれることも。その場にいるお友達のお母さんが一緒に遊んでくれたり、手伝ってくれたり。兄弟や卒園した小学生が遊んで見本を見せてくれることも。整ったものがない自然のデコボコと人の多様さが子どもを豊かに育て、可能性を広げていく。

「預かる」だけではない、子どもが育つ場をそこにいる「みんな」で創り上げ、その「みんな」も豊かになるのが「地域まるごと子育て観」です。

子育て縁が実現したいビジョン

子育て縁では、子育てによって「制約」が増える状態から、こどもがいることで「制約から解放され、選択肢が増える」状態へと「進化」させる。



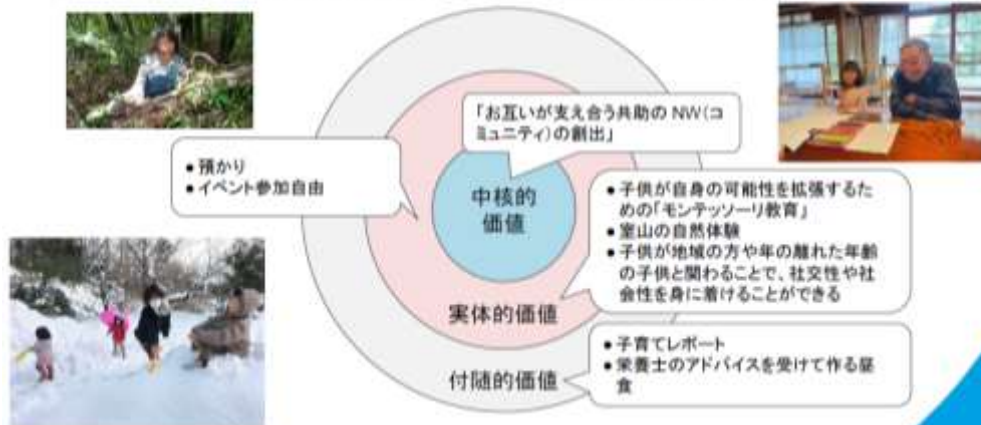
子育て縁の提供価値

地域まるごと子育て縁の提供価値として、同様の事業者には提供できず、CNCだけが提供でき、利用者が望んでいる価値を明確化。



子育て縁の提供価値の整理(プロダクト3層モデル)

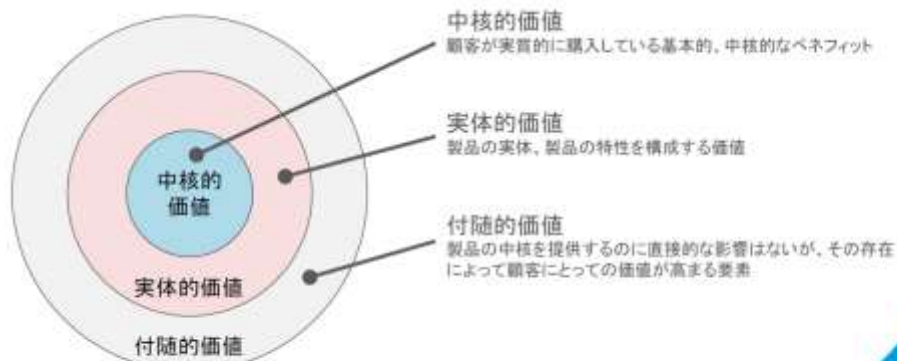
子育て縁における中核的価値と、それ以外の実体的・付随的価値をプロダクト 3層モデルに基づいて整理。本事業では、子育てを起点とした、親同士 / 親と地域住民とのつながりを構築し、助け助けられる共助の NW を構築することを中核的な価値として位置付ける。



©CNC 2016

(参考)プロダクト3層モデル

製品 (product) の価値構造のを3層に分けることで整理するマーケティングフレームワークであり、顧客が実質的に購入している基本的、中核的なベネフィットと、製品の実体、製品の特性を構成する価値、製品の中核を提供するのに直接的な影響はないが、その存在によって顧客にとっての価値が高まる要素の3つによって整理する。



©CNC 2016



14



15

子育て縁における象徴事例

地域の方と子ども達が関わる「接点」を創り出すことで、自然と両者がお互いを気にかかけ、積極的に関わり合う関係性を構築することができる。

経緯	近隣の事業者(農園やパン屋さんなど)と子どもたちが関わる機会を意図的に創出している。 子どもたちに、近隣のパン屋への買い出しを手伝ってもらっている。 また、散歩などにおいて、近隣の事業者の方と会話できる機会を設けている。
起こった変化	こどもが親以外の大人を信頼し、自ら自発的に話しかけにいくようになった。 拾った木の葉について、「食べられるか聞きに行こう!」となったり、花壇に植えられている花について、「花の名前を聞きにいきたい!」となるなど、大人を「友達」と捉え、積極的に話しかけにいくようになった。 周辺の事業者の方々も、子ども達の声をきくことができ、嬉しいと好意的に捉えている。
CNCの関わり方	子どもに大人と関わるよう仕向けるようなことは一切していない。 子どもと大人の接点を創出するだけで、両者が相互に関係性を構築している。

CNC

©CNC Inc.

今後の課題

今年度で休眠預金による助成が終了するため、次年度に向けた事業の運転資金の確保が急務。事業収益のみでは不足しているため、寄付財源の構築に着手している。

- 対象: 未就学児～小学生、その保護者
応援・協力したい近隣住民
- 場所: 食の杜内 瓦葺きのお家
- 内容: 毎週金～日で拠点を開放し、親子の参加プログラムを提供。こどものみ参加可。
- 体制: マネージャー1名
主要スタッフ1名
※保育士資格及びモンテッソーリ国際資格を保有
サブスタッフ1名
その他ボランティア

利用者

- 雲南市周辺の子育て世帯
- 島根県外のワーケーション利用者
- 移住希望者

資金元

- 雲南コミュニティ財団(休眠口座)
- 縁の利用費
 - 預かり: 5,500円
 - 親子参加: 1,000円

CNC

©CNC Inc.

(4) 第2回研究会 振り返りと気づき ～ディスカッション～

第2回研究会における委員ディスカッションの中で以下のような指摘が挙げられた。

※逐語議事録からの抜粋

第2回研究会 振り返りと気づき ～ディスカッション～

・ディスカッションの中で以下のような指摘が挙げられた。※逐語議事録からの抜粋

【柿沼委員】

今言われている保育施設とか保育所、こども園とかの多機能化というよりは、保育とか教育の多機能なのではないかと改めて思いました。

要は今、施設の多機能化と言われるから、施設を多機能にしなければいけないような空気になっていて、それが意味、保育所不足の中で負担を感じているんですけども、保育という言葉がきちんと多機能化されていくと、いろいろな社会資源とつながったり、地域のもつつながっていくというやりやすさが出てくるのではないかなと思うんです。

ですから、今の学校教育もそうですけれども、いろいろな社会資源や地域住民の方が学校に集まるのか、僕は学校から出ていったほうがいいと思っているんですけども、学校にそういう方の力をかりて、部活動も含めて、学校の先生たちの働き方も改革しながら、子どもたちをより深く育てていこうという流れなので、保育施設もそのような形で多機能（化）されていくということがいいのかなとは思っています。

今の時点で取り残されている子どもたちや取り残された家庭で育っている、かなり劣悪な環境で育っている子どもたちのところも多機能という形で、保育事業者や保育士、保育者、また、保育の持つ社会資源でそこにアプローチできると、先進的なものも含めて両方ともいいのかなと思っています。

子どもを本当にどうしようにこの国の国民として育てていくか、人間としてどうあるべきかみたいなものがもう一回話されて、社会全体の人たちが、子どもをみんなでこういう子に育てようという機運になっていくと、子育てのビジョンみたいに書かれていた、社会全体の人たちが子どもを真ん中にして子どもたちを育てていくというものにつながっていくのかなと思っています。

第2回研究会 振り返りと気づき ～ディスカッション～

・ディスカッションの中で以下のような指摘が挙げられた。※逐語議事録からの抜粋

【池本委員】

今日の商店街のお話を伺っていて、海外との比較でいうと、日本は広場がないから行く場所もないし、人が出会ったりする場がないという話があって、それを商店街というところで日本でもつくれるのではないかと。ヨーロッパなどでも、車を入れないで広場にするというのが（ありますが）、商店街でも車をとめてやっているんだなと思いました。そういうまちのつくり、そこに子育ても入ってくるんですけども、子育てというのは、人が交流するとかという空間をもっと重視したほうがいいなと思いました。

海外と比べると、広場には椅子とベンチがあって、ぼうっと眺めていたりするので、行く場所があったり、そこで顔見知りになるとかあるんですけども、日本は座る場所がないというのが結構指摘されます。学校もそうで、イギリスでは学校の中にもいっぱい椅子をつくると言っているけれども、日本は絶対に運動させるために椅子は置かないということになってしまっている。人が出会いやすいような空間をつくらせて、そこにうまく子育ても入れ込むような形が日本でもできるかもと、今日伺っていて思いました。

【奥山委員】

何とかしようと思ったときに厚労省、こども家庭庁予算だけではないということなんですね。URさんの団地の1階店舗物件も、NPOだと今、半額程度で借りられるとか、実はいろいろ情報があるんですけども、当時は私も知らなかったんですね。そういう意味で、市町村の中では子どもや施設整備費等にかかわる補助金とかそういうものがたくさんあるはずなんだけど、出会えていないということを、私もスタートのときに感じたんですね。今日はたまたま、非常に小さな町で、全部行政が調整してくれたとおっしゃったから、これは本当にうらやましいなと。

商店街全体の通路に関しては商店街が所有しているということが結構あるんですね。そうすると、自分たちで車を入れさせないということができる。

駐車場料金が安いというのが問題で、買い物しないで滞在するということがなかなかできないところがあるのですが、豊後高田市では、小学校前の子どもがいたら駐車場も無料にするという自治体があるんですね。そういうふうに全体としてやらなければいけないなということを感じました。

第2回研究会 振り返りと気づき ～ディスカッション～

- ・ディスカッションの中で以下のような指摘が挙げられた。※逐語議事録からの抜粋

【後藤委員】

多機能という話もあったんですけど、選択肢をたくさんつくることが非常に大事なかなと思います。
休眠預金というのはいくら大きな額をもらっているのだと思いますけれども、本当に小規模でも成り立つような仕組みはどうすればできるのか。多分、福祉の予算だけではなかなか難しいと思いますけれども、何かしらできないかなと思いました。

コーディネーター役というか、そういうものをどうやって置いていくのか。コーディネーター専門というのはなかなか置きづらい気もするので、可能であればそれがいいとは思いますが、そういうコーディネーターみたいなものをいろいろな人たちが持ち続ける。専門職でなくても、持ち続けることが大事なかなと思ったところです。

要保護児童という家庭がなかなか見えにくいという話は本当におっしゃるとおりで、保育園まではかなりいろいろなサービスがあるのでいいんだけど、小学校に行くとかだんだん見えてくるという話がある。そういう意味では、先ほどの商店街にしてもどこにしても、小学校卒業後もかかわれるような。一つの法人で何でもまるとやる必要は全くないと思うんですけど、必ず居場所があるような、途切れないような、そういうスペースと人が必要なかなという気がしました。

【鈴木委員】

農のある暮らしという言い方をされましたけれども、やはり第一次産業的な生活文化は素人参加が可能なんです。私もそのくらいのことならできるとか、そういうことだったら私も一緒にやりたいわということが非常に身近にあるので、そういうものを一つのキーワードにして、そこに興味を持つ人と子どもがまざり合う、あるいは高齢者がまざり合う。そういうことが周辺の活性化に、一つの考え方としては大事なかなと思います。

補助金に縛られて、補助金で考えている事業しかやれないとか、それをやらないと補助金がもらえないということになっている。今日の取組も株式会社という発想の、自由度というか、認可を受けた事業所の活動のしづらさとか、そういうところが一つある中で、どうやっていくか。財源問題、補助金を超えた財源ということでは、財源をどうするかということがものすごく課題になっているわけですが、消費する保育、消費する子育てではなくて、何か新しいものをつくり出す子育て・保育というものを考えていく必要がある。そういう意味では、今日のお話はすごくヒントがあったと思って伺いました。

第2回研究会 振り返りと気づき ～ディスカッション～

- ・ディスカッションの中で以下のような指摘が挙げられた。※逐語議事録からの抜粋

【吉田委員】

子ども誰でも、「誰でも」はいいいんですけど、当然、プライオリティがありますし、ともすれば今までの保育所やこども園、幼稚園からこぼれた、まさに未就園児というのは相手にしていなかった世界ですから、モデル事業でたまたまそこにスポットを当てて掘り起こすことができた。これがいずれ全国事業になるんですが、誰でも、という子どもは、ただ均一ではなく、いろいろな事情、要保護・要支援を含めて、例えば発達障害の問題があれば、親側の精神的な問題もあったり、よく悪くもグラデーションがかかっているわけです。

そこを丁寧に把握しながら、今までの制度、仕組みでは大きい網の目からこぼれていた子どもたちや親をもう少し丁寧に地域単位ですくい上げて、掘り起こして、何かそこにアウトリーチを含めて手を差し伸べていくことができると結局、その人たちだけでなく、その波及効果で地域全体の底上げにつながるという印象を持っています。

補助金等がありました。ICTも実は経産省が出していて、保育園では経産省のほうをもらって、厚労省のほうはもらっていないというところも若干ありましたけれども、ほかにも国土交通省であったり、あるいは農水省でも、そっちの絡みで子ども関係の補助金が出たり（している）。非常に複合化しているだけに、こども家庭庁が子ども政策の総合司令塔になるわけですから、一つはさまざまな関係省庁、地方自治体にどう横串を通すのか。

縦割りはあってもやむを得ないと思います。それぞれ機能分化をしているわけですから。大事なことは、そこに横串をどう通すかということと、多分、面的な展開がよりやりやすくなる。先ほどお話が出たように、そのコーディネーター機能というものがこども家庭庁に求められるというし、地域レベルでは、今日はお休みですけど松本さんがよくおっしゃっているような、子ども・子育てのコーディネーターみたいな存在が必要だと。

面ということは、全てに横串を通し、網の目、ネットワーク化をしていくという機能に担う存在が恐らく必要で、個別の事業だけでなく、それを全部有機的につないで、相互補完できたり、相乗効果を生んだり（する）。そういうマネジメントが大事だと思います。そういう視点からもこの報告をまとめられれば、いろいろな方の手がかり、ヒントになるかなという印象を持っています。

2. 第3回研究会

「10年後の子ども・子育て支援の在り方を考える研究会」の第3回研究会概要は以下の通り。

(1) 議事次第等

○ 開催日時：

令和6年2月15日（木） 10:00～12:00

○ 開催場所：こども家庭庁成育局第一会議室

（東京都千代田区霞が関3-2-5 霞が関ビルディング 21階）

○ 研究会委員プロフィールと出席状況：

No.	委員名	所属	出席状況
1	池本 美香	株式会社日本総合研究所	出席
2	奥山 千鶴子	認定NPO法人びーのびーの 理事長	出席
3	柿沼 平太郎	学校法人柿沼学園 理事長	出席（オンライン）
4	柴田 悠	京都大学総合人間学部 准教授	出席（オンライン）
5	鈴木 眞廣	社会福祉法人わこう村 理事長	出席
6	野澤 祥子	東京大学 Cedep 准教授	出席（オンライン）
7	松本 理寿輝	まちの保育園・こども園 代表	出席（オンライン）
8	後藤 真一郎	全国社会福祉協議会・出版部	出席
9	吉田 正幸【座長】	株式会社保育システム研究所 代表	出席

○ 議事次第：

1. 開会

2. 議事

- (1) 第2回研究会での議論の振り返り
- (2) 先駆的取組実施者プレゼン
- (3) ディスカッション
- (4) その他

3. 閉会

（２）先駆的取組実施者プレゼン１（社会福祉法人ハレルヤ福祉会ハレルヤこども園）

社会福祉法人ハレルヤ福祉会ハレルヤこども園より、資料に沿ってプレゼンテーションをご実施いただいた。プレゼンテーションの実施内容は以下のとおり。

<園の概要>

- 園は昭和 54 年に認可を受けて 55 年の 4 月から始めた。（60 名規模でスタートするということで認可を受けたものの、民間に対するアレルギー、またキリスト教への理解不足により当初 18 名しか集まらず、2 才児と 1 才児を募集することでやっと 45 名に達し、始めることができた。）
- 絶えず根底にあるのは、町立ができないことを私たちがやるということ。当時あった町立の三つの幼稚園がこども園にしたけれども潰れた際、「潰すなら私が幼稚園をします」と申し出た。社会福祉法人で幼稚園がつくれる最後の年に幼稚園をつくった。鹿児島県からも最初で最後の事例として応援を受けた。教育と養護というのは言葉では一つではあるものの、職員の意識は伴っていない。それであればと幼保連携型を選んだ。
- 当時はまだ特別保育事業というものはなく、延長保育や日曜保育、病児も障害児もなかったが、実際にはニーズがあり、役場では門前払いでも民間であれば受け入れてもらえるかもしれない、と個人で頼みにくる方々がいた。県の監査をうまくかわしながらそれらの要望を全て受け入れ、制度化された頃には全て導入済という状況だった。
- 設立当初より、教会も園も農園も、絶えず与論の産業にリンクした形でやっていきたいという思いがあり、理事として一緒にやってきたパナウル診療所の前院長先生とも、島おこし、村おこしといった島の発展につながることを念頭に入れ活動してきた。

<園の取組>

- 今現在、様々な保育環境を整備し、どこにもない環境でこども達に生活してもらおう、都会との教育格差をなくそうと保育の多機能化をはかっている。（特別保育事業、子育て支援センター、心理相談、出前保育、プレイパーク等）
- 祖先から受け継いだ土地を活用し、様々な形で四つのゾーンに分けた園庭づくりを行っている。こどもたちの体験と遊び場として、有機農園も併設。一番大切にしているのは、こども未来農園。農業というのはいろんな可能性がある。SDGs、国際的な環境問題等、アグロエコロジーという概念で深めていきたい。
- 国際化を意識し、教会メンバーでギリシャ村を設立。ギリシャの大使やギリシャ関係者の訪問を何度か受け、礼法、お茶等のおもてなしをする等交流してきた。またメグミスクール（ケニア・マサイ）の教員との交流も継続して行っている。
- 与論島は博物館や美術館等の文化に触れる機会は小学校の修学旅行まで全くない。できるだけ本物に触れる体験をしてもらうため、様々な方に寄付頂きながらアートの部屋確立に向け活動している。（縄文焼きモニュメント、写真家和田先生のコレクションルー

ム、日本画家芝康弘先生に、こどもたちと一緒に旧庭園にあったシンボルツリーを描いてもらう等)

- 保育士の十分な獲得が得られないという課題をクリアするため、男子寮、女子寮、職員住宅、さらに診療所も協力事業所として導入。

<地域とのつながり>

- これまで園が取り組んできた特色のある主な活動としては、「こども一人一人を大切に、島のこどもたちとずっとつながっていきたい」という思いから、運動会等様々なイベントに小中学校ぐらいまでの卒園生必ず全員に招待状を出し、地域のこどもたちと合同で活動してきたこと。40年以上たった現在も、何か記念の時には招待状を出している。
- 歌の指導、凧づくり、空手の指導など地域資源（人）との様々な取組もおこなっている。またこどもたちの発案により保護者共同で制作したツリーハウスは、地域の方とのコミュニケーションの場ともなった。

<今後の取組>

- これまでも、ギリシャ村でのピザ窯体験等行ってきたが、今後「ヨロン島まるごと園庭プロジェクト」として、地域の宝である「ひと・もの・こと」を最大限に生かした活動をしていきたい。

なお、プレゼンテーションの際にご説明いただいた資料は以下のとおり（一部抜粋）。

ハレルヤ福祉会の紹介

社会福祉法人ハレルヤ福祉会

理事長 徳永哲秀

Ⅰ. 園の概要

与論島について

- ◆ 所在：鹿児島県最南端
- ◆ 人口：一島一町、5083人
- ◆ 学校：3小学校、1中学校、1高校
- ◆ こども園数：公立認定こども園2園、
私立認定こども園1園（当園）

当園について

- ◆ 設立：昭和55年4月1日
- ◆ 定員：85名、現員91名
- ◆ 職員総数：34名



2. 園の経営

1・ハレルヤ福祉会の運営理念

- (1) 人もし汝に一里ゆくことを強いなば、共に二里ゆけ（マタイ伝5：41）
- (2) 人、全世界を贏（もう）くとも、己が生命（いのち）を損せば、何の益あらん
（マタイ伝16：26）

2・本園の教育・保育理念

- (1) キリスト教的人間観と教育観に即した社会福祉の理念に基づき、自然、伝統文化、世界に目を向けた個性豊かな全人教育。
- (2) 環境を通して行う保育（養護・教育）の実践で「こどもの経験の質と量」の保証。

3. 本園の教育目的 ー幸せな大人への力強いスタートー

神と人々に愛されていることを肌で感じ、自ら考えて行動する力を養い、神への祈りを土台に「信仰・望み・愛」の実践によるレジリエンス（折れない心）を育て養う。

4. 本園のスクールモットー「地の塩なり 世の光なり」 （マタイ伝5：13）

- ㊦・「澆刺」と「すなお」で元気な明るい子。
- ㊧・「礼儀正しく」、「ありがとう」の気持ちを大切にする子。
- ㊨・「ルール」を守り、相手を思いやり我慢のできる子。
- ㊩・「優しさ」と「やる気」をもってチャレンジ。

3. 園の取組み



4. ハレルヤ福祉会の付帯設備（収益事業）

- ▶ あぐんちゃ（男子寮）
- ▶ バナウル（女子寮）
- ▶ 職員住宅
- ▶ もくば館
- ▶ 診療所（協力事業所として賃貸）
- ▶ 宿泊施設（協力事業所として賃貸）



園庭は 4つのゾーンがある

- ▶ ①トラックゾーン（竹馬、一輪車、）
- ▶ ②プレーパーク（遊具、小動物、草むら）
- ▶ ③夢パーク 屋外小プール、芝生と砂場
- ▶ ④ 0, 1, 2歳児専用 安全砂場



5. 協力事業所

- ▶ 教会
- ▶ シャロン農園
- ▶ パナウル診療所
- ▶ ギリシア村



6. 地域に根差した魅力ある園づくりを目指して オンリーワンの活動をしている

(与論島内でのオンリーワンとしてご理解頂きたい)

－ 他(町立幼稚園、保育園)に追随を許さない経営 －



こどもフェスティバル

地域づくりへの貢献

- ▶ 教会の使命として「対象は全町民、全世界」と考える
- ▶ 卒園児も含め家族丸ごと支援する
- ▶ 児童館、相談室（臨床心理士の町立小中学校、保健センターへの派遣）
- ▶ 地域医療との連携

メリーエミリ/与論高校吹奏楽部・日大二校との合同演奏会 IN 杉並公会堂

かりゆしBAND ユンヌ太鼓

東京与論会、与論ファンクラブ（北見けんいち・ちばてつやほか著名漫画家）



7. これまで園が取り組んできた 特色のある主な活動

運動会、卒園生とともに



ようこそ卒園生



20・30・40周年記念、
落成式等への卒園生招待



中三交流会

卒園後に島外へ転校した友達も島に戻ってきます。
タイムカプセルを開き、園児とともにピクニックへでかけます。



8. 国際交流

これまでに交流してきた世界の国々





みんなでマサイハウスを完成させよう！



提携校（メグミスクール）
農業普及活動



9. 子ども達には本物の体験を

劇団ひとみ座公演
沢則行 人形劇



原潤 フ



縄文焼きを園庭(夢広場)に設置



創立30年記念園歌(うたおうHallelujah!)の一節より

♪ ～ とびだせ世界へ 宇宙のかなたへ 夢は広がる はてしなく ～ ♪

和田コレクションルーム



美術品



こども未来農園 有機米 有機野菜



オオゴマダラ園



10. 魅力ある園づくり



ビオトープ園
作り



昆虫教室



天体観測



文字指導





保護者による読み
聞かせ



保護者&外部講師&
ALT 英語遊び



Ⅱ. 地域資源の活用(人)

歌の指導



こども未来農園

凧作り



空手の指導

12. ツリーハウス制作保護者との共同制作



保護者と園スタッフの打ち合わせ
子どもたちの夢を形にする





徐々に完成に近づく

子どもたちも期待がさらにふくらむ



「親子・地域の方とのコミュニケーションの場」
でもあったツリーハウス制作

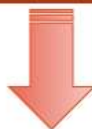
ついに完成！！



13. 保育の社会化



地域の宝「ひと・もの・こと」を
最大限に活用した活動を展開する



ヨロン島まるごと園庭プロジェクト

▶ これまでの活動



サザンクロスセンター
見学

ギリシャ村でピザ窯体験



プリシアリゾートホテル
で海洋生物の見学



▶ これまでの活動

振り返り学習

鍾乳洞探検

絵画鑑賞



▶ ヨロン島まるごと園庭



「ひと・もの・こと」を最大限に活用した活動を展開する

地域の子育て力

地域・社会を繋ぐ役割

地域の活性化



14. 現在の問題

敬老会



夏祭り



（３）先駆的取組実施者プレゼン２（NPO 法人もあなキッズ自然楽校／大磯・もあなこびとのこや）

NPO 法人もあなキッズ自然楽校より、資料に沿ってプレゼンテーションをご実施いただいた。プレゼンテーションの実施内容は以下のとおり。

<企業概要>

- 2009 年から保育事業を始め、認可外 3 歳児 7 人からスタート。現在は六つの保育園がある。（認可外、認可、認証、認可小規模そして企業主導型ということで五つの形態と、放課後児童クラブを運営している。）
- 全くお金がないところからスタートしたため、おおむねの園はビルインの保育園。そのため園庭はないが、地域の自然環境や文化的な環境、地域丸ごと全てを保育に活用するということをやってきた。
- NPO のミッションとして持続可能な社会づくりということを入れ込んでおり、保育事業においてもオーガニックの給食導入、地産の木材を使う等、15 年前からそのような活動を継続してきた。10 年先、またそれ以上先の保育の事業を考えたときに、全国の保育園、こども園が同様のことを考えていく必要があるということを啓蒙している。

<大磯・もあなこびとのこや概要>

- 人口 3 万人の町である大磯町は、海だけでなく大磯丘陵という山がある等、とても自然に恵まれた場所。2015 年にご縁があり、ここであれば横浜以外の場所でやるに値すると考えた。
- 保育所設立前に町長や副町長にプレゼンをおこなった際、当初、大磯には子育てひろばや助産院等がなかったため、我々は単に保育がやりたくて大磯にきたのではなく、大磯のまちが「子育てでこどもたちが豊かに育つ」ということ、また「まちの人たちも含めて全員が豊かに暮らしをする」ということを目的としている。まち全体のことを考えている事業者であるということを文字ではなく、1 枚のビジュアルであらわし提案した。森や港など、地域や自然をフル活用することが大事だろうということで、こういった絵を描いた。
- 地域とのつながり、地域に根差す保育園ということを大事にしてここまでやってきたおかげで、2020 年ぐらいに日本郵政より大磯郵便局（遊休資産）のあいているスペースを使わないかと相談を受け、保育所をそれまでのビルの一角から現在の場所に移転することになった。郵便局の倉庫として使用されていた場所をリノベーションしたため、経費として数百万単位でできた事業。またその際、解体され保存されていた旧三井邸の高級建築部材をまちの遺産として使って欲しいとお声がけいただき、無償で部材提供いただいた。

- 2020 年、ちょうどコロナ禍でもあり、自宅でお仕事をされる方やコワーキング利用者も非常にふえていた時代。アフターコロナの働き方改革ということで、コワーキング、シェアオフィスを使っていくという人たちが多くなったこともあり、別事業者（まちのプレーヤー）に保育園と一緒の建物にコワーキング（スペース）を立ち上げてもらった。子育て中の人が徒歩 10 秒で保育園に預けて隣のコワーキングで仕事ができるとなると、例えば大磯町から丸の内に仕事に行く場合片道約 2 時間かかるところが、その往復 4 時間の時間を削ることができるようになる。その時間を例えば家族の時間とか子育ての時間とか、こどもとたくさん遊ぶ時間に使ってもらえる。大磯は自然等、環境としてはすばらしいものを持っており、そういったことも可能である。私たちはただ保育園をつくるということではなく、保育所がどういうふうにもちと一緒に機能していくかということを、かなり丁寧に考えてきた。

<地域・自然とのかかわり>

- 大磯町には森もあり港がある。また古いまちなので小さな商店街がたくさんある。園庭がない分、園から海まで毎日散歩に出かける。その間まちをお散歩することになるが、新参の保育園であってもこどもたちを媒介して、漁師のおじいちゃん、商店街のおばあちゃん等と非常によいコミュニケーションが生まれるようになっていった。

なお、プレゼンテーションの際にご説明いただいた資料は以下のとおり（一部抜粋）。

子ども・子育ての今後に関する先進的な取り組み事例 ～大磯・もあなこびとのこやの事例～



関山 隆一

NPO法人もあなキッズ自然楽校 理事長
NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟 理事
東京都市大学 人間科学部 児童学科 非常勤講師
田園調布学園大学 人間科学部 心理学科 非常勤講師
墨田区保育アドバイザー

わたしたちの保育園

- ・ 横浜市都筑区
 - ・ もあな保育園(横浜市認証保育園)0歳児～2歳児 定員34名
 - ・ めーぶるキッズ(認可外保育施設)3歳児～5歳児 定員60名
 - ・ めーぶる保育園(認可保育園)0歳児～5歳児 定員58名
 - ・ もあなのいえ(放課後児童クラブ)小学生
- ・ 茅ヶ崎市
 - ・ ちがさき・もあな保育園(企業主導型保育施設)0歳児～5歳児 定員24名
- 大磯町
 - ・ もあな・こびとのこや(認可小規模保育園)0歳児～2歳児 定員12名
- 小田原市
 - ・ おだわら・もあな保育園(認可小規模保育園)0歳児～2歳児 定員9名

(地域の自然や文化環境を活用した保育)
～園庭はありません！～



地域に根差した保育園(大磯編)



大磯町の地域資源



大磯町の地域資源



郵便局の有休資産活用



古き良きものを継承する木育

before



after



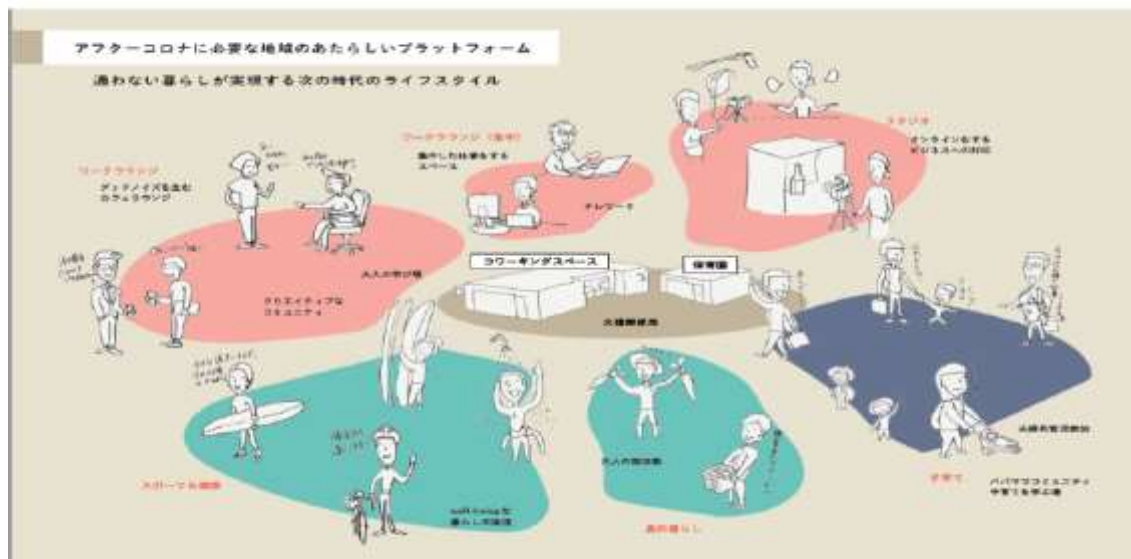
There used to be Post Office

Post-CoWork

WHAT IS POST-COWORK? ABOUT CONTACT



大磯 もあな・こびとのこや



（４）第３回研究会の振り返りと気づき ～ディスカッション～

第３回研究会における委員ディスカッションの中で以下のような指摘が挙げられた。

※逐語議事録からの抜粋

第3回研究会の振り返りと気づき ～ディスカッション～

- ・ ディスカッションの中で以下のような指摘が挙げられた。 ※逐語議事録からの抜粋

【柿沼委員】

やっぱり保育とか教育というのは子どもの権利になるかなんかのことを改めて考えていて。今、保育とか子育てみたいなものが、何となく保育所みたいな施設で行われるものであったり家庭で行われているものであったりみたいなことで、社会の全体が子どもの権利を考えていく、保育を考えていくみたいなことはあまりないような感じがある。なので、保育は保育所だけのものではなくて、やっぱり子どもの命を守って、子どもが健やかに成長して安定した生活をするということを考えていく社会の役割があるんだみたいなことを、10年後には保育という言葉が、社会全体で子どもを育てて命を守っていくという流れになったらいいのかなみたいに思いました。

雇用があるかどうかというのが非常に大切だなとっていて、その地域に雇用があるということが（なければ）、その地域の保育とか教育とか、子どもの生活にかなりかわってくる生産年齢人口の方が根づかないことになってしまいます。やっぱり、子育てや保育を考えたときには雇用があるかどうかということを考えていかないと、結果、大人がいなくなると子どもがいなくなってしまうので、そこが密着なのかなとっていました。

また保育士さんも同様で、特に今の島の話なんかはそうですけども、保育士さんがそこに行く必要、そこで生活する必要、暮らす必要があるかみたいなことによって、保育士不足によって保育が成り立たないということがあると思います。それはうちの園のような関東圏でありながら過疎化しているようなエリアも同様で、保育士さんがそこに生活できるようなもの、そこで生活できるような魅力みたいなもの、やっぱり再度、両方とも考えていかないと（いけない）。

【柴田委員】

背景として働き方の問題というのがありまして、そこが改善しないと結局十分にそういう取組に参加できないとか、参加できる人も例えばお母さんに限定されちゃうとか、そういったようなところがある。

第3回研究会の振り返りと気づき ～ディスカッション～

- ・ ディスカッションの中で以下のような指摘が挙げられた。 ※逐語議事録からの抜粋

【奥山委員】

お２人の発表を聞いていて思いましたのが、地元で育てられたご家族のお子さんのところと、与論でいえば仕事とか環境を求めて転入されてくる方々のお子さんもいらっやっ。多分、もあなキッズさんも同じで、都市近郊部で人口減少ではあるけれども、皆さんのごういった保育に子どもを預けたいというお気持ちで外から転入されてくる方も結構いるんじゃないかなと思います。

子どもの保育を中心としてその家族全体をつなげていったり地域に広がっていきみたいなことが、何か化学反応的なものがあるかなというふうにも思っているんですけども。そういったことはこれから各地できつと必要になってくることだと思うので、ご苦労もある一方で、その期待というか可能性もあるのでは。

【後藤委員】

コワーキングスペースが非常におもしろいなと思って。来週のアリソンでも清朗会さんのカフェの話が出るとは思いますけれども、今回はNPO法人、株式会社とかであれはいろいろ自由度は高いとはいえ、仮に社会福祉法人であっても公益事業とかで会議室の貸し出しみたいなものができるようになっていくので。しかもあんまりそんなに多い利用者数では恐らくないだろうと思いますから、ちよつとしたスペースを保育園の近くにつくってしまえば容易にできるだろうなとっていて。こういうのがどんどん横展開されると非常におもしろいなという印象を受けました。

第3回研究会の振り返りと気づき ～ディスカッション～

- ・ ディスカッションの中で以下のような指摘が挙げられた。 ※逐語議事録からの抜粋

【松本委員】

保育あるいは子どもの環境づくりというものが、まさに地域の文化創造の担い手となっていける可能性を感じながら聞いておりました。まさに、その土地あるいは地域が持つポテンシャル、あるいは魅力の掘り起こしを子どもとともにしながら、子どもの豊かな実体験にもつなげながら、それを地域のコミュニティの充実につなげていращやる、あるいは地域の魅力につなげていращやるというところがある。そういった、いわゆる土地、地域の魅力、ポテンシャルに対しての光の当て方がとても上手でいращやって、そのあたりの巧みさが結構、地域の人をつないだり、子どもたちの場をつくったりしているのかなというように感じました。

我々が意識している顕在的なカリキュラムよりも、子どもたちというのは文化の中で育ち、我々が何を大切にしているかということも敏感になりながら育っているというところがあると思います。そういう点ではやっぱり、地域づくりとか、地域でどういふうに大人も子どもも暮らしているか、その暮らしの提案というところまでがつながっていて、いわゆる豊かさとは何かみたいなことまで考えさせられるような。保育園の中だけで保育しているよりも、子どもの環境を豊かにする秘訣なんじゃないかなということを感じながら聞いていました。

【吉田委員】

（出前保育に関して）施設は動きませんが、アウトリーチをすれば幾らでも面的に広げられるということだと思います。

（森の保育園の実態に関する話を踏まえて）恐らくウェブとかSNSも含めて、これからその分野もDX化で、またもう少しいろんな可能性が見えるような気もいたします。

（必要な人材は子どものときからつくっていくという戦略も必要なので。そういう関係では、弁護士さんとか歯科医師さんとかを準備して、着々と進めております。の発言を受け、）縦軸がかなりはっきり立っているなという印象を受けました。

3. 第4回研究会

「10年後の子ども・子育て支援の在り方を考える研究会」の第4回研究会概要は以下の通り。

(1) 議事次第等

○ 開催日時：

令和6年2月21日（火） 10:00～12:00

○ 開催場所：こども家庭庁支援局第一会議室

（東京都千代田区霞が関3-2-5 霞が関ビルディング 20階）

○ 研究会委員プロフィールと出席状況：

No.	委員名	所属	出席状況
1	池本 美香	株式会社日本総合研究所	出席
2	奥山 千鶴子	認定NPO法人びーのびーの 理事長	出席
3	柿沼 平太郎	学校法人柿沼学園 理事長	出席（オンライン）
4	柴田 悠	京都大学総合人間学部 准教授	出席（オンライン）
5	鈴木 眞廣	社会福祉法人わこう村 理事長	出席
6	野澤 祥子	東京大学 Cedep 准教授	欠席
7	松本 理寿輝	まちの保育園・こども園 代表	出席（オンライン）
8	後藤 真一郎	全国社会福祉協議会・出版部	出席
9	吉田 正幸【座長】	株式会社保育システム研究所 代表	出席（オンライン）

○ 議事次第：

1. 開会

2. 議事

(1) 検討のおさらい

(2) 先駆的取組実施者プレゼン

(3) ディスカッション

(4) その他

3. 閉会

（２）先駆的取組実施者プレゼン１（社会福祉法人愛川舜寿会カミヤト凸凹保育園）

社会福祉法人愛川舜寿会カミヤト凸凹保育園より、資料に沿ってプレゼンテーションをご実施いただいた。プレゼンテーションの実施内容は以下のとおり。

＜カミヤト凸凹保育園の概要＞

- 凸凹保育園は開園５年目のまだ新しい園。園の理念は共生・寛容・自律の３点。共生は多様性を認め合う、寛容は許し、受け入れる、自律は個を尊重する。そして、法人ビジョンは、地域の人とケアを中心としたコミュニティを再構築し、「社会をやさしくする」こと。
- 社会的に高齢化が進む中、過疎化が進む地域にこそこどもの存在が必要であり、散歩でこどもの声が聞こえたら高齢者含め地域の方々も嬉しい、またこどもを広々とした開放的な環境で育てたいという思いのもと、社会変革していく意味も込め、この地に保育園を設立した。
- 同じ建物内に児童発達支援と放課後等デイサービスの入ったカミヤト凸凹文化教室があり、０歳から１８歳までの児童が通っている。
- 日々の保育は年齢別保育の編成ではあるが、実情はどの年齢のこどももどこに行っても過ごしてもよく、１日中好きなところで好きな人と好きな遊びを続けられる場になっている。（年上の子がさりげなく年下の子を気遣い、助けてくれる場面は日常たくさん見られ、自分より年下の子には思わず笑顔があふれる、ついつい触れたいくなる、自然に優しさが育つ等、優しくして喜ばれることで自分自身の存在も醸成していける力が育っていくことにつながっている。）

＜実際の保育現場の様子＞

- 同年齢の中でもちょっと息苦しくなるときは、誰でもある。そのような時に小さい子たちと過ごして、赤ちゃんに慕われ、笑顔に癒やされ元気を取り戻すのは、大人だけではなく、こどもも一緒。１歳児の子が０歳児に食べさせて、寝かしつけている場面、５歳児の女の子はミルクをつくることができたり、寝かしつけもうプロ並みであったり、散歩に行くときなどスタッフの一員のように、職員並みの働きぶり等、このような場面を日常、毎日普通に見られている。
- お散歩は行きたい子が行きたいところに行く散歩。クラスをまたいでいろいろな年齢のこどもたちが一緒に行くことができる。乳児であっても幼児であっても、クラス全員で必ず行くよということではなく、そのときのその子の意思を尊重する。まだこの遊びを続けたいから散歩に行かない、年長だけど０歳や１歳の散歩に一緒に行きたい、なども日常である。その中には文化教室利用のこどもたちも含まれている。そういう意思をあらわすということは各自が個々の意思を決定するということであって、「〇〇ちゃんが行くから行く」など、いい意味で人に影響されないことでもある。今の自分の気持ちに忠実に生きて

いるとも言える。

- 同じ法人内の違う事業所で就労支援お仕事をされている方に、週に3日ほど園にお掃除に来てもらっている。お掃除をしながらこどもたちとつながって、一緒にお掃除したり、一緒に給食食べようよと誘ったりという関係性が生まれている。就労支援で来ている方たちのため、ほかで就労するのが少々難しい方たちではあるが、こどもたちのおかげでごくほぐれてきていると感じている。こどもたちのコミュニケーション能力も上がっている。

<やりたいことを実現できる環境>

- 年中の4歳と5歳の女の子たちがお祭りのときに着る浴衣を自分で縫いたいという発想があり、その女の子たちと一緒に生地を選びに行き、無事に完成し、お祭りの日に着れたということがあった。(わからないところは大人も少し手伝ったりはしたが、あっという間に自分たちですごく上手に縫えていてびっくりした。保護者の方々も、家で針を持たせたことがない、お母さんが実は自分も全く不器用でこういうことはやったことがない、などとてもびっくりしていた。)
- 「家族でぼうさいの丘公園というところに行ったんだけど、とてもいいところだったから、みんなで行かない？」と年中の男の子が提案してくれ、それを遠足で実現するということがあった。

<地域とのつながり>

- ハロウィンの際、地域の方々にこちらからお菓子を先に持って行って(大人が)、これをこどもたちに配ってもらえますかとお願いしたところ、すごく派手な衣装を着たり、ウェルカムボードをつくってくれる等、地域の方が非常に協力的に参加してくれた。また、お隣に1年前にできた高齢者施設の方にもご協力をお願いしたところ、利用されているおじいちゃん、おばあちゃんたちがすごく喜んでくれ、こどもたちに折り紙でプレゼントをつくってくれるなど、とてもいい連携ができた。暖かくなったら一緒にお散歩に行きましょうねというお誘いもしている。
- 稲刈りを見たり、お米を収穫して、それでおにぎりをつくったりすることもしている。自分のおじいちゃん、おばあちゃんではない近所の方とこうやって語り合える場はすごく貴重。また園の目の前の畑もお借りし、そこでサツマイモ掘りをしているが、普段は保育園の中では同じ年齢のこどもたちとはなかなかスムーズにかかわれない男の子2人が、いい笑顔で自然に触れ合えたり、畑の方と仲よく語り合えたりしている。

なお、プレゼンテーションの際にご説明いただいた資料は以下のとおり（一部抜粋）。



みんないっしょ

2024.2.21

社会福祉法人 愛川舜寿会

カミヤト凸凹保育園

瀬山さと子



理念

共生・寛容・自律

2019年創設

定員90名

スタッフ30名

カミヤト文化教室

(児童発達支援・放課後等デイサービス)が同じ建物にあり、

0歳から18歳の児童が通う。

定員 一日10名

スタッフ 6名

年齢差のある関わり





やりたいことをやりたいときに







地域の方とのつながり







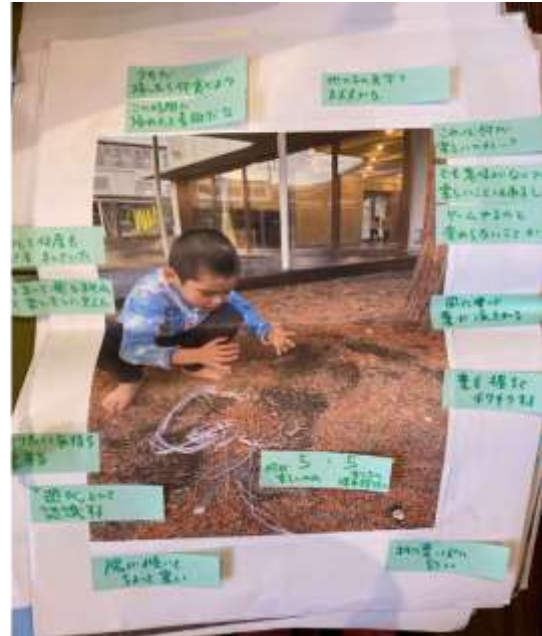
いろいろな人とのつながり





園内のつながり





Profile		MY BEST 3		Question	
	名前	1		わたしの宝物	宝物 ハマっていること
	誕生日	2		最近ハマっていること	
	星座	3			
	出身				
血液型					
Favorite テレビ 本・マンガ 動物 キャラクター 芸能人 スポーツ 色 食べ物 場所 音楽 アプリ 映画		休日は何をしている？ 子どもの頃の将来の夢は？ 今一番欲しいものは？		好きな給食のメニューは？ 子どもの頃、どんな子どもだった？	
FREE		Question?			





その子の「凸」に注目し、
「凹」をみんなで埋め合う



(3) 先駆的取組実施者プレゼン2 (社会福祉法人清朗会 セセラギ保育園/子育て支援 café FOYER)

社会福祉法人清朗会 セセラギ保育園/子育て支援 café FOYER より、資料に沿ってプレゼンテーションをご実施いただいた。プレゼンテーションの実施内容は以下のとおり。

<セセラギ保育園の方針>

- こどもを本当に尊重して、保護者に対しても、本当にこどものやりたいことをやりましょう、お散歩も好きなところに好きなように行きましょうという方針。
- こどもの環境として、教育も保育も社会も、不登校も不適切保育も、逆に自然保育や主体性保育がトレンドであったりするのは、現在の、資本主義的な社会が結構限界にきていることが理由だと考えている。現状、元気な子、話が聞ける子、勉強ができる子等をこどもに求めている感が非常に強く、こういったこども像にすごく疑問を感じている。こどもに求めるのではなく、社会や地域、我々がそこをちゃんと担って考えていかなければならない。「尊重されている」、「愛されていると」感じることができる中でこどもを育み、大人もこどもも元気に過ごせる場所、話を聞いてくれる場所、自分をちゃんと大切に生きられる場所を作ろうと考えている。
- こどもまんなか社会になれるには、うちだけがやるのではなく、社会や地域全体で取り組まなければ実現しない。すごく新しいことをせずとも、幼稚園も保育園も今すでに存在しているし、こどもと、こどもにちゃんと愛を持ってる先生もいる。ただ概念みたいなものをもう一回ちゃんと再構築する必要がある。シンプルに、「こどもと関わること」、「こどもと何かをすること」、「こどもがいる環境で過ごすこと」、「常にこどもがいる環境で日常の営みを行うこと」。現状分断してしまっているこの4つのことをやればよい。あらゆる場所、企業、まち、全てのものがこどもというのをどれだけ理解して尊重できるかであり、新しい何かをつくる必要はないと考えている。

<大切にしていること>

- 「いま、したい!!」という気持ちを大切にしている。
- 「相手の気持ちわかるかな？」を大切にしている。
- 「自分がしたいこと、相手がしたいこと、どっちが大事なの？」を考える。

<地域とのつながり、今後について>

- 小学校との連携は課題がたくさん。保護者の方、園見学の方からも、小学校に上がったからの不安の声をたくさん聞く。今後、小学校に対してもうちができることは手を出していこうと考えている。

- 2023 年より、誰もが集える居場所を目指し、園に隣接する場所に子育て支援 cafeFOYER（ホワイエ）を設置。清瀬市内のホールをお借りして上映会を実施する等の活動をしている。これにより、地域の色々な方、埋もれている方とも繋がりができ、たくさんの方の事を学ばせてもらっている。またこれまでこどもだけの場所となっていた保育園が、地域の場所の 1 つになる、すばらしい可能性を秘めている。
- ホワイエを使った活動として、今年度から誰でもどうぞということで、夕方の時間の解放を行っている。届け出は独自の公益事業のような形でやっているため補助金はいただいているが、逆に言うとフットワークは軽くいろんなことを同時にできる。
- ホワイエにほぼ毎日来ている不登校の 2 年生の子は、虫が本当に大好きなため標本づくりをしたり、焼き芋を焼いたり、園の子たちとお散歩行ったり給食食べたり自由にしてもらっている。こういったこどもたちや環境に対して今後どういうことができるかを考えている。（小中学生も視野に入れている。）
- 来年度から職員を増員したため、うちの卒園児にホワイエでやっているようなプロジェクト型保育のような体験、体感ができる機会を作っていきたい。例えば今日はちょっと小学校じゃなくてうちの活動をメインでやりたいという時期があったらそれをやる、といったことが実現するのが夢。それがゆくゆく小学校の活動的にもみなされるようになっていけばいいなと考えている。

なお、プレゼンテーションの際にご説明いただいた資料は以下のとおり（一部抜粋）。

社会福祉法人 清朗会 セせらぎ保育園/子育て支援caféホワイエ



まずはじめに

これも、あれも、「カタチ」は確かに必要だが
本当に必要なことは
「なぜ、それが必要なのか？」という概念、理念、イムズなどの部分

当園の実例も、地域、人、環境などがあり、そこに「今」という、時も合わせり
実現しているものであると考える

それを右へ習えではなく
どのように、あらゆる地域で
「子ども真ん中社会」を実現することができるのか？

近代資本主義から見る現代社会の限界的違和感

● 近代資本主義

近代（現代をも含む）に成立した新しい資本主義
簿記を土台として営まれる合理的な産業経営的資本主義
その上に築かれていく利潤追求の営み

● 資本主義の精神

労働者であっても広く見られる、規則を守りできるだけ
経営利潤が多くなるように（自分の利益にならないにか
かわらず）進んで働く、心理的様態やその行動様式

● 近代資本主義の精神

近代資本主義は産業資本主義であり、合理的産業経営を
営んでいくには、経営者だけでなく多くの労働者の側に、
規則を守りできるだけ経営利潤が多くなるように進んで
働く、そういった行動様式が必要
それが「資本主義の精神」と呼ばれる心理的様態、行動
様式となって現れる精神性である

参照文献：マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

誰もがいま
この、近代資本主義に
「限界的違和感」
を持ち始めているのではないか？

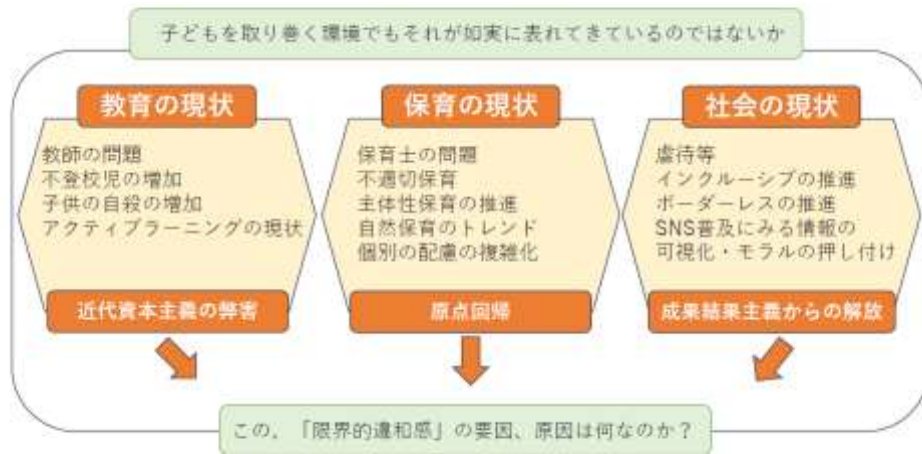
資本主義の精神にも通ずる、ある種、利益追求、成果
結果、また優劣、善悪、のような相対的な価値観、
思想などに疲弊しているようにも取れる

「今の世の中は」このままでは・・・
何かが違おうと気づき始めている

今の若い世代には・・・
「世の中のために何かしたい、どうしたら戦争を
終わらせられるか、資源の有限性の問題を解決したい」
など、ある種、資本主義の精神ではない部分で世の中
を生きようとしている者もいる

ここから見えてくるものは何か？

こども環境（保育・教育業界）における現代社会の限界的違和感



限界的違和感の正体、「存在（魂）」

●「違和感の正体は何か？」

それは、近代化がもたらした「存在（魂）」の喪失への嘆きではないか
 近代化と共に、壊され、無くされ、必要価値がないとされてきた「存在（魂）」の喪失感

子ども、子育て、人間観、死生観など
 子どもを取り巻く環境にも
 あらゆるものに「存在（魂）」
 は存在する

●「存在（魂）」とは何か？」

例えば・・・
 近代化の歴史とは比べることが出来ない「大いなる存在＝魂が宿るもの、こと」
 言葉にする必要のない、脈々と受け継がれているもの
 例えば・・・
 「自由」とは近代社会の生んだ幻想と考えることもできるかもしれないが、だから本当は人間に「自由」などないということにはならない
 「自由」「人権」等は、我々個々人の認識の在り方に応じて否定されるようなものではなく、現に個々人の「自由」を前提にして社会生活が営まれている
 自由、人権、文化、伝統、美など、意識、概念、主義など、確固とした、ある程度の正当性をもってこの社会にあるものである

本来、脈々と受け継がれ、人々の拠り所となったり soul、ism だったり
 ある時代では経験という名のもとに、無意識でそれ自体が存在出来た事象
 国や地域、そこに合わせて行ってきた営み
 文化形成→人間形成を担ってきたもの
 そこにいる子どもたちも皆、自ずと、「らしさ」を備えていた
 それは「無個性」ではなく、identity とでもいうべき「存在（魂）」のようなものでもある

置き換えれば「普遍性」普遍的な存在

存在（魂）と普遍性の定義



「新しい」という概念の定義



ルール、モラルではない、存在（魂）から構築する

●「ルール」と「モラル」

「ルール＝法」であり、「モラル＝経済。近代資本主義からくる道徳感、正義感」であり、どちらも「かたち」が存在するものである。
現代社会において、これらが果たす部分が大きい。これが現代の違和感の根底の一つでもある。これに照らし合わせると、やはり教育・保育の部分でも今現在は、大半が「ルール」「モラル」という「かたち」に捉われている。

こども



子ども家庭庁の子どもの定義
誰もが「子ども」になりうる

●「かたち」に捉われない「かたち」

存在（魂）を、存在させるということ
「感じるもの、こと」それらが「存在する」と定義する
「かたち」がないことも「感じること」で存在するという世界の構築
社会的にみると、近代的資本主義から次のステップへ

誰もが皆「子ども」であった
そして「今」も誰もが皆「子ども」でありうる
「子ども」が、知識や知恵を身に付け、あたかも武装したかのような姿、それが「大人」である
もし、大人が「子ども」のまま
生かれる社会があるならば・・・
大人は大人になることを選ぶだろうか

そこで、その世界で既に、常に、生きている存在がいる

存在（魂）という普遍性を存在させる環境を構築する

「子どもとは？」

Q1、「子ども」とは・・・
何歳から何歳まで？
学生？義務教育？働き始めたら？

この議論がそもそも不毛です

Q2、「子ども真ん中って『誰』を真ん中？」

「子ども」とは・・・
一人で生きる力がないなどと定義した場合
誰でも子ども・・・であるかもしれない

Q3、「子ども真ん中」の真ん中はどんな場所？

「尊重されている」
「愛されている」
「信じられている」

この場所は・・・
「こども」だけに必要？

いつでもどこでも
大人も、一人で生きていく力がない
状態や状況になりうる（病気、怪我など）

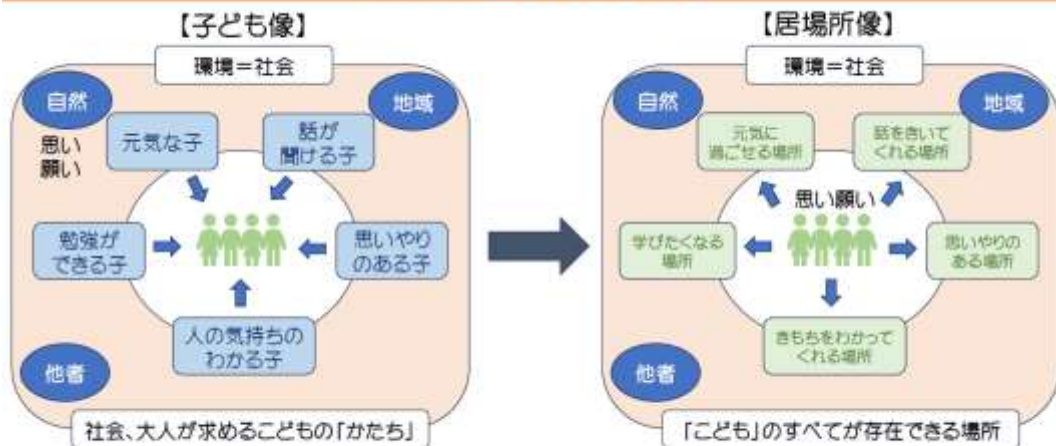
今の現代社会でこの場所が必要だと
一般的に肯定され、実現している場所

子どもの居場所
とくに乳・幼児（保育園、幼稚園など）

「子どもの居場所」の在り方、コンセプトを
「こどもの 地域の 社会の 真ん中に」
Borderless、Inclusive・・・

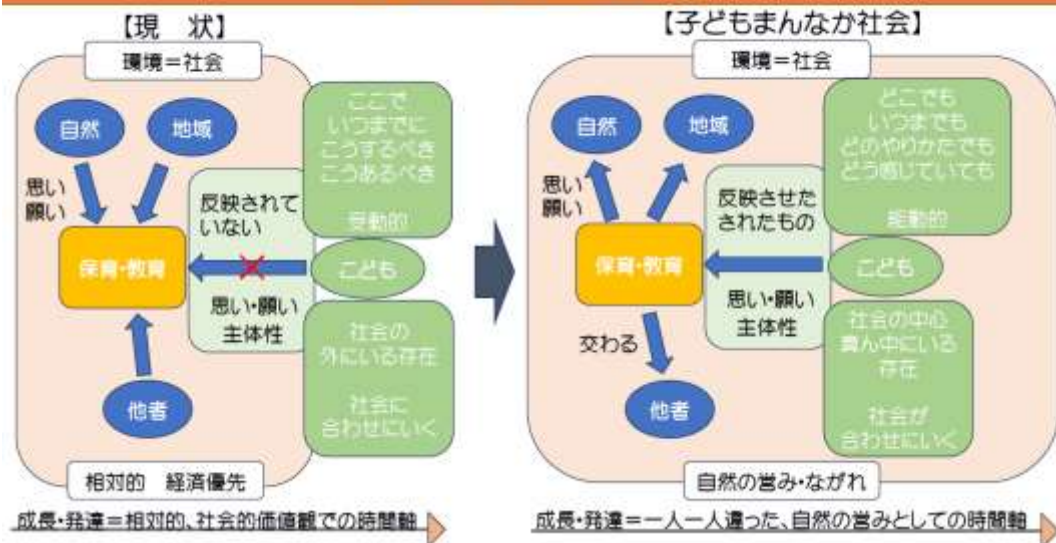
必要としているすべての人の居場所

子ども像から居場所像へ



子どもに「かたち」を求めるのではなく、「すべての子ども」の「すべてが存在できる」
 そんな「居場所」を作ること、それが子どもを真ん中にする「はじめの一步」です

子ども真ん中社会イメージ



「子ども真ん中社会」の本質

● 「子ども真ん中社会」の本質

「子ども」を「真ん中」と定義した場合
その環境（主体的、魂の発露が可能な環境）を構築した場合
そこは・・・
人間性、地域性、国民性、あらゆる存在（魂）が存在している環境である
「子ども」が「子ども」として存在出来る環境である

「その環境となりえるのはどこか？」
今現在、子どもが、乳幼児が存在している場所

保育所、幼稚園など

今、すでに「存在（魂）」が存在している場所
リソースの活用

リソースの活用のプロセスにおいて
受け身・受動的に捉えると、近代資本主義的なリソースの活用となり、存在（魂）が存在している環境とはなりにくい「主体性」であること

● 相対性ではないリソースの活用

今あるものと比べての相対性でのリソースの活用ではない
そのアプローチではなく、「新しいもの、自由なもの」は存在している
という定義の元の、「今」の構築の中でのリソースの活用である
アップデートではなく、存在（魂）は「今、ここにあるもの」として
今あるもの、ことを、変える、進む、改めるのではなく、視座、視点を変える、増やす、といった概念

**存在（魂）を存在させるキーパーソン
子ども**

経済優先、成果結果、優劣、善悪ではない
新たなシステム、新たな環境ではない
「今」を見つめなおすことから
「今」を感じることは始める



近代資本主義から道徳的資本主義へ

真の子ども真ん中という定義

● 社会全体が子どもと共に過ごす重要性

社会が、大人が、子どもと共に過ごす、関わる、感性に触れることで、感覚、概念、主体、あらゆる「存在（魂）」を「普遍性」を、思い出す、取り戻すという感覚 誰もが「存在（魂）」を感じる「子ども」だった

**すべての人が「子ども」と生きることを共にする
場所の創出**

現状でもっとも可能性が高い環境＝保育所、幼稚園など

新しく何かを始めるのではなく・・・
保育・教育のカリキュラム、社会のシステムに段階的に組み込む
「子ども」を「存在（魂）」を分断しないということ

- 1 子どもと関わること
- 2 子どもと何かを作ること
- 3 子どもがいる環境で過ごすこと
- 4 常に子どもがいる環境で、日常の営みを行うこと

社会の根幹、源泉・原点を、経済優先から子ども優先へ

● 真の子ども真ん中

新しい環境を作るのではなく
新しいルール・モラルを作るのではなく
今ある資源で、概念を、感覚を「感じる」
この世界のこの社会の
概念を、「存在（魂）」を、普遍性を
どれだけ「共有」できるか
そこが、「子ども」が真ん中にあるべき世界

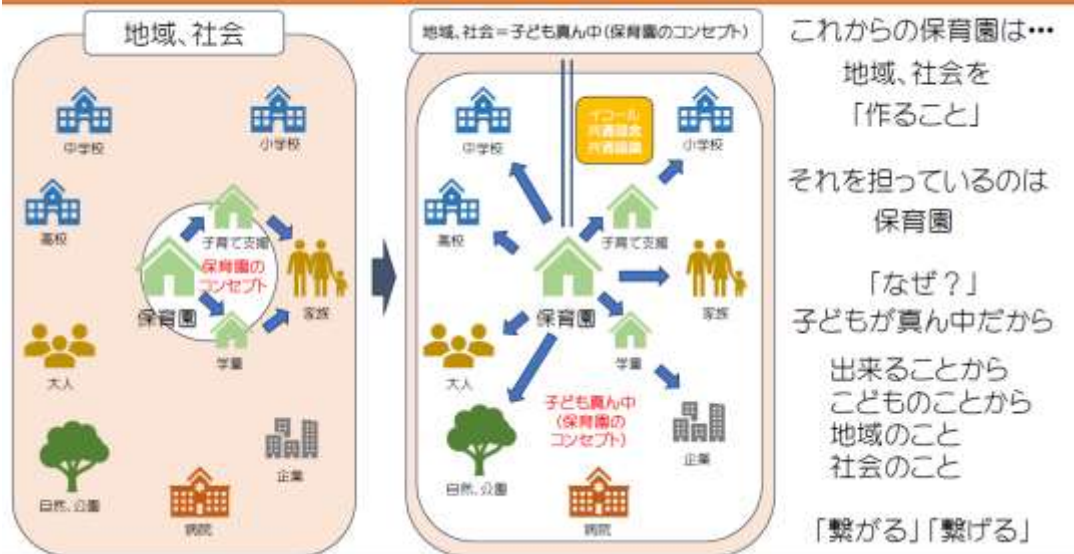


「ここまで」があって、はじめて
保育園の未来予想図をたてることができる

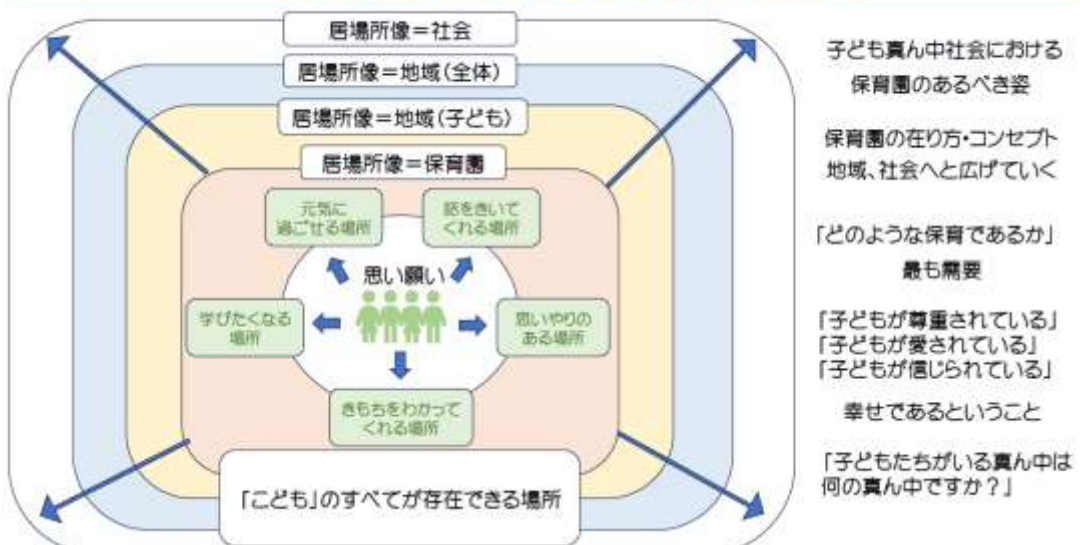
ここまでの世界観があつての「子どもの存在の定義」
「子どもの居場所の定義」「保育園の定義」の順に構築をすれば、今の保育園の在り方とは全く違う
「保育園のかたち」が見えてくる
保育園の現状を変える政策を考えるより、現状を変えることなく、「子ども真ん中」を実現できる
「かたち」を模索することの方が現実的である

道徳的資本主義に基づいて創り上げる
主体性保育の先の、未来の保育園の「かたち」

新しい保育園の「かたち」



「子ども」の居場所から「ひと」の居場所



卒園しても、「こどもまんなか保育園」

「私のこと、覚えてる？」

「卒園してからのこと知らないから、よかったら話していかない？」

卒園した子どもたちがいじめられたり、学校へ行けなくなっていたり、死にたいほど悩んでいた、お腹を空かしていたり、毎日同じ服を着ていたり、家に帰るのが億劫になったりしていることを知ったら…
「園においで」って声をかけたくありませんか

優しくしてくれた人、幼い頃の自分を覚えていてくれている人、いつでも自分の話をゆっくり聞いてくれた人、そんな人がある場所に、まるで温かい家に帰るように気楽に行くことが出来たら…

こども基本法の条文に書かれた

「すべてのこどもが幸福な生活を送ることができる社会」

日本が未だそのような社会に程遠いことを、今の現実が突き付けています

100%に近い子どもたちに母園(卒園した園)があります
そして、そこには笑顔で迎えてくれる子どもたちもいます
かつての自分がそうであったように…



せせらぎ保育園の大切にしていること

(2) 保育の目標

- ア 保育所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場所である。このため、保育所の保育は、子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために、次の目標を目指して行われなければならない。
- ア（ア）十分な養護の行き届いた環境の下に、くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を満たし、生命の保持及び情緒の安定を図ること。

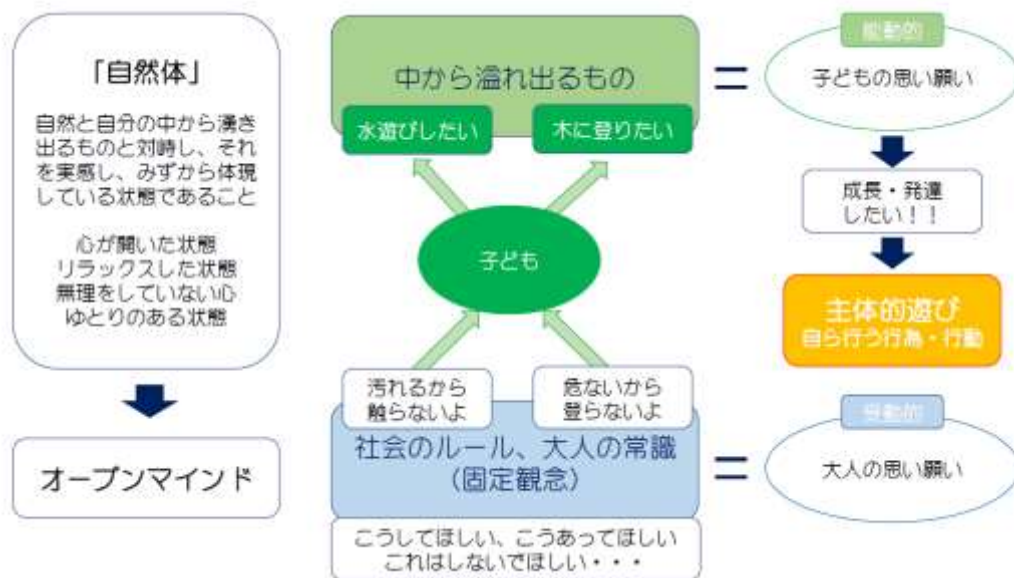
(3) 保育の方法

- ア 一人一人の子どもの状況や家庭及び地域社会での生活実態を把握するとともに、子どもの安心感と信頼感をもって活動できるよう、子どもの主体としての思いや願いを受け止めること。
- イ 子どもの生活リズムを大切にし、健康、安全で情緒の安定した生活が出来る環境や、自己を十分に発揮できる環境を整えること。
- ウ 子どもの発達について理解し、一人一人の発達過程に応じて保育すること。その際、子どもの個人差に十分配慮すること。
- オ 子どもが自発的・意欲的に関われるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること。特に、乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること。

(4) 保育の環境

- ア 子ども自らが環境に関わり、自発的に活動し、様々な経験を積んでいくことができるよう配慮すること。
- エ 子どもが人と関わる力を育てていくため、子ども自らが園師の子どもや大人と関わっていくことができる環境を整えること。

「僕が私が、したいことはダメなの？」



「僕が私が、したいことはダメなの？」

ゆまるのおもちゃをお風呂に…
エピソード

大人の固定観念、エゴとぶつかる
それでも良い

それでも良いから、ぶつかっても、子どもの思い通りにできなくても
それでも良いから

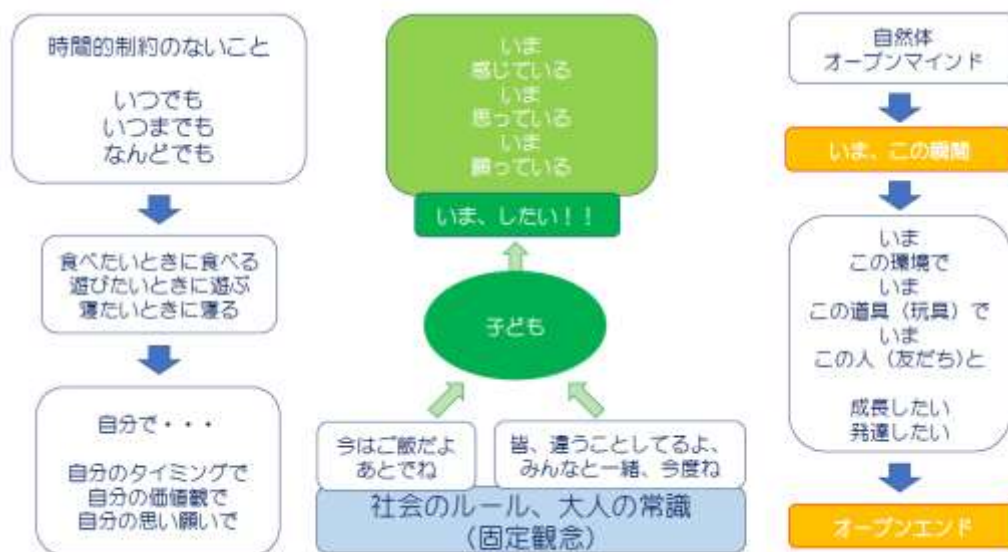
大切なことは、そうだということに、そういう思いだということに、そういう願いだということに
気づいてあげること、わかろうとし続けている存在であること
そういう在り方でいることが、子どもにとって、社会がそうあるべき

それが子どもたちが感じる本当の意味での、安心、自由、安らぎ、豊かさ、そういった環境、社会だということ

満たすとか、満たされる
とは、ここを、これをする

保育、子育てのほぼ9割は、これをどうするか
一人一人の子どもたちとここをどうコミュニケーションしていくか

「いま、したい！！」



大人のイメージの仕方、子どものイメージの仕方の違い

大人はゴールを描いてイメージし、逆算し今を描く
子どもは今と目の前のもの、今までの経験や体感を材料にイメージを構築する

実体験の重要性

保育者の主体性が悪いのではなく、大人がしてあげたい、大人がしてほしい
悪いのではなく、イメージの構築の仕方、導き方

時間の捉え方、ゴールがある、形がある
そうするとどうしても保育者の主体性
というものが、保育者の固定観念の変化してします

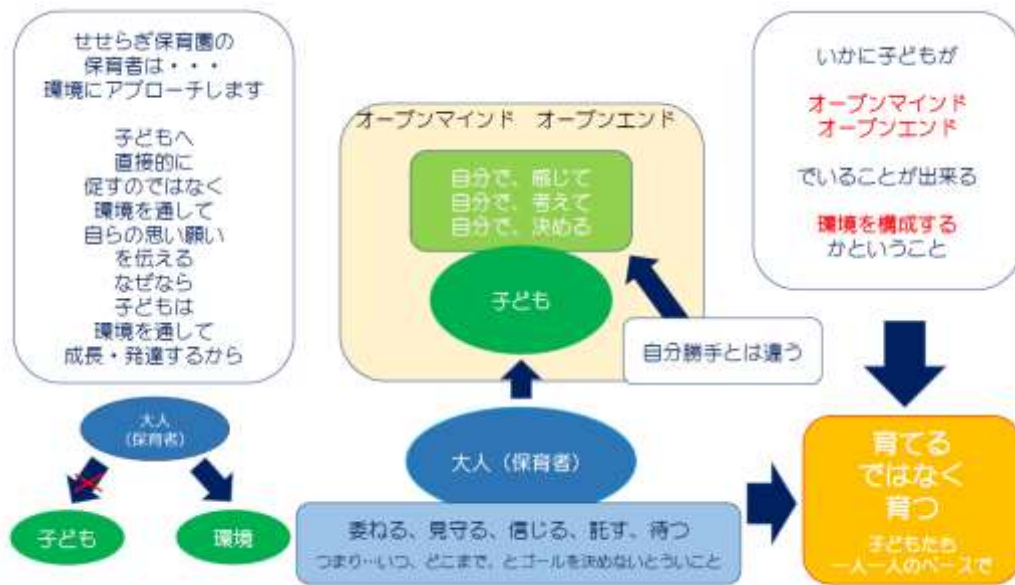
子どもの今を尊重する

大人も同じく、分けるのではなく、そこに存在するすべての今を尊重する

例えば親子で料理をしているとき
美味しいものを作ろう、失敗しないようにしよう、ではなく、ただ純粋にその時間を楽しむ
そのあり方がゴールを作るのではない
今からイメージを作っているあり方

料理やお掃除、お仕事など、大人が今と向き合っている姿を真似するのは
個を尊重する、一人一人の成長発達に合わせる

「イヤイヤ！！これってわがままなの？」



「イヤイヤ！！これってわがままなの？」

【子ども観、人間観、場所作りの在り方】

保育、子育てとは

子どものある種エゴのような思い願い

ここをどうやって、受け止めるか共にするか

その創意工夫が子育て、保育 大人の腕の見せどころ

素晴らしいこと、良いことをすることでなく、それは大人の感じる良いこと、素晴らしいことだから

それではない

それは画一的で、一方向的なもの

それではなく、子どもたち一人一人にあるものだから、十人十色、出方、タイミングもそれぞれ

それは、突発的で、でも、当たり前なこと、ごくごく自然の流れだったりする

感じたままに、環境に対して、スゴく素直に反応しているだけのこと

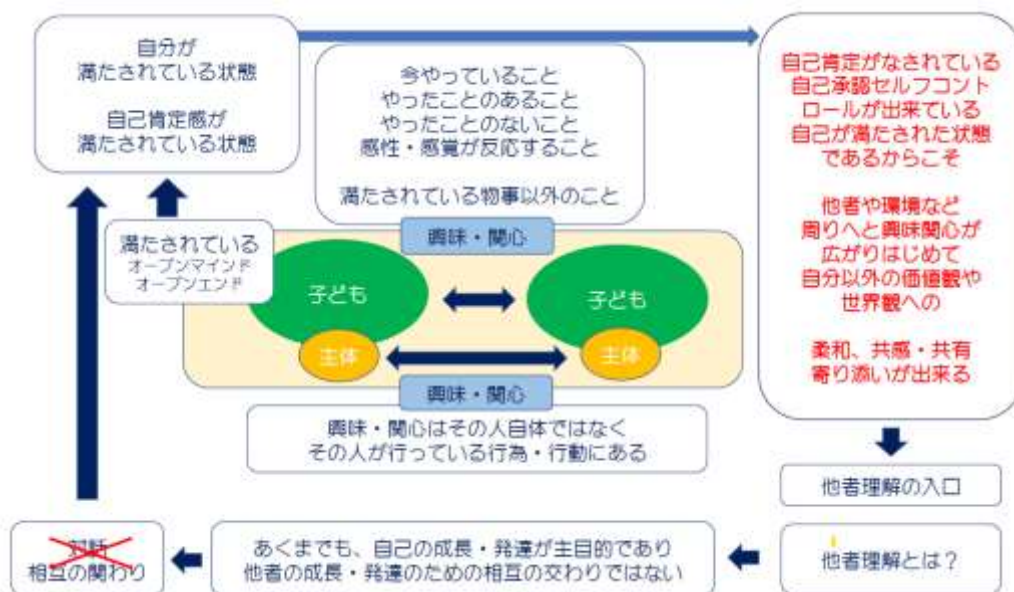
それを否定したり、肯定されていないと、子どもは戸惑い、イヤイヤとなる

これはワガママではない

イヤではなく、こうしたいだけ

ダメと言われるから、ダメというエネルギーを感じるから、イヤだとなる

「相手の気持ちわかるかな？」



「相手の気持ちわかるかな？」

本来、すべての感情感覚は間違っていない、そこに子ども大人の線を引くことが固定観念を生む
こうしてほしい、こうがよい、執着を生む

それは、大人の思い、執着が間違っているという話ではなく、でも、大人の意図してない思いを持っている
子どもも間違っているわけではない
すべてそこに存在している、そういう社会

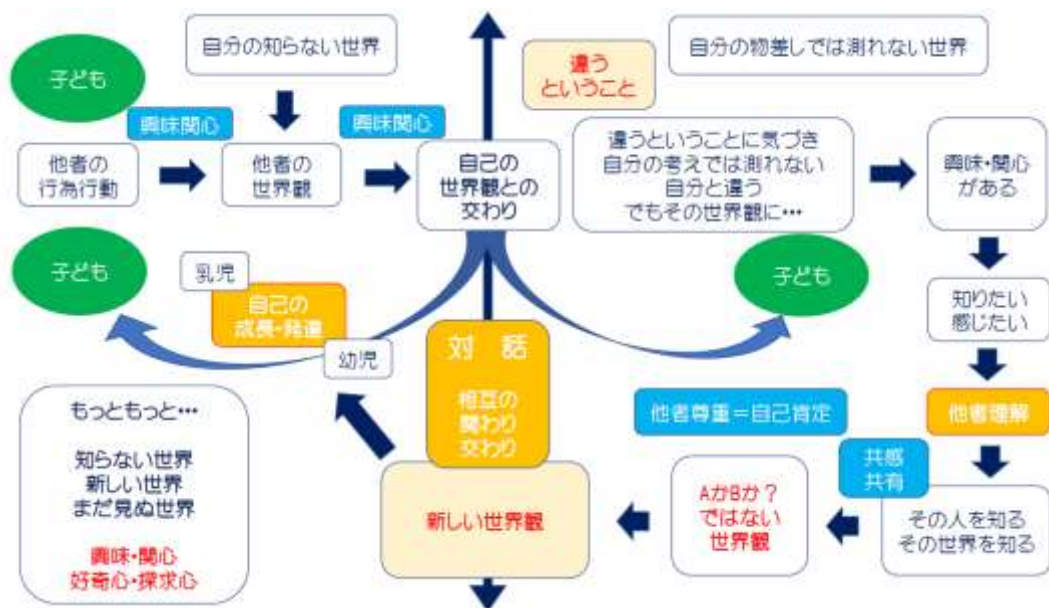
本来それが自然の法則、肯定も否定もしない、そこに存在しているということ

でも、現代社会は、真逆である
成果結果、答えを求める社会
それを必然的に、無意識かもしれない、子どもたちにできてしまっている
そういう流れにすぐなってしまう、

なぜ？
ジャッジ、評価、結果、成果、それらが関係しているから

子どもにもそれを持ってくると・・・子どもにも、答えを持ってくる
どうやっても答えがないといけないときもある
その通り
でも、本来の自分という存在は、何も答えなんてない存在である

「自分がしたいこと、相手がしたいこと
どっちが大事なの？」



「自分がしたいこと、相手がしたいことどっちが大事なの？」

少しゆとりをもって、余裕をもって、
自分の思い通り、自分の想像外、予想外、これらの結果、事象、を感じてみること
そこから始める

そうかもしれない、そうなんだ、そういう世界観もあるのか
なんでできない、それじゃない、そうじゃない、そこじゃない、これは、そのあとでよい

まずはじめは、余白、まっしろ、まっさら、そこにお互いの感情感覚を広げるイメージ

先にやっているから、自分は出来るから、自分は出来ないから、自分は知っているから、あなたは知らないから、私
だけやっている、あの人はやっていない、先に生まれているから、あなたは幼いから
そうではない

後先損得でもない
自然、大きな流れ、大きなまとていえば、みんな同じ
対して違いはない

大きな自然の一部、一員です
意識の話、だから時間はかからない、労力も必要ない、拘束もしない
自分の意識の問題
一人一人の、意識の問題

「本当の自分って？」



〈保育所の多機能型への現状と課題、ホワイエ運営に伴う実践から見てくる今後の見通しや展望〉

【なぜ、保育園が保育以外の福祉（多機能型）へのプラットフォームが鈍いのか？】

長年、保育園＝保育を行う場所であり、保育以外は×という。行政指導の積み重ねによる固定観念が根強く残っているものと思われる。現在の、多機能型、地域への還元などは、ある程度今までの行政指導と真逆の印象を与え、混乱している法人も多いのではないと思われる。

【行政や法人内部として、どのような思考、アプローチをすれば、これからの社会に適した保育所となり得るのか？】

植崎発想で言うと、保育園という看板を下ろす。保育園という概念をなくすこと。やはり、社会福祉法人の性質、今までの保育制度上、行政からの指導の下、保育園運営を行っているという感覚が強い。できるならば、行政から上記のような「保育園＝保育ではない、保育園の看板を下ろさせる」ような、号令があることで、少しでも意識が変わるのではないと思われる。そのうえで、「保育園＝すべての子どものための施設」のような、「子ども真ん中社会に」おける、新たなコンセプトを明確に定めることが重要であると考え。

【なぜ、ホワイエ（子育て支援カフェ）が多機能型の動きが出来るのか？またそういった思考に至るのか？】

多機能型である一番の理由は、「事業登録をしていない＝事業を認定していない」からであると考えられる。保育事業、子育て支援事業、収益事業、障害者支援事業など、定めることにより、それ以外の業態での活動が難しく、自ずとBorderlessやInclusiveといった概念から離れていく。つまり、社会や行政がこれからの保育所に求める多機能型からも離れることとなる。事業を定めないことにより、柔軟かつ純粋に「子ども」を真ん中において事業理念、事業計画、さらには事業実施も行うことが可能となる。もう一つは、「独自事業」であるため行政が関わっていないこと（補助金なし）も大きな要因として挙げられる。そうすることで「地域が求める事業」にもダイレクトに直結しやすく、レスポンスも含め、企画立案から実施の速度感も含め、あらゆるジャンルのニーズにも対応しやすい。そういう観点から、「縛り（許認可等）が少ないこと」などにより、法人が意図することなく「地域と繋がる」ことが自然に行われる場所となり、必然的に多機能型になり得るのではないかと考えられる。

【リソースの重要性】

現在の社会の状況から保育業界での新たな課題は「待機児童」でなく「空き定員」問題であると考え。その観点から、法人の課題として挙げられるのが、収入減少、人材活用、事業安定が大きな課題となる。施設、人材においてコスト削減を行うことも重要ではあるが根本的問題解決ではない、また増収、増益のための新たな事業展開を行うことも同じであると考え。重要なことは、「今ある資源を柔軟かつ有効に活用すること」であると考え。

【今ある保育所という施設の有用性】

今ある資源を活用するという観点において、「子ども真ん中」社会における最も有効かつ重要な資源は「保育所」であることは明白な事実である。上記でお伝えした通り、「保育園＝保育を行う場所」から「保育園＝すべての子どものための施設」という提言を行政が行うこと。それにより、保育所における施設（場所）、人材（人）、蓄積財産（思想、理念としてChildren Firstを積み重ねてきた、積み重ねている、子ども真ん中を根拠としている存在であるということ）を最大限に生かすことが出来るようになる。行政が難しいのであれば、民間に委託してでもこのような事業（プロジェクト）を進めるべきであると考えます。

【リソース活用における新たな法人運営のかたち】

①施設の有効活用

施設を保育園以外の事業において活用することにより、法人における「宣伝広告効果」が見込まれる。

保育以外の事業が多岐に渡ればわたるほど、多方面への宣伝効果が期待できると考える。

「子育て＝生活」であり、その営みの多くは地域が基盤である。それら地域の生活に直結する様々な資源（人、施設、産業など）と繋がる事は法人においても、有用な事業であると考えます。

そのような地域との「つながり」から、今後新たな事業展開や収益事業などへと発展する可能性があると考える。

また、相乗効果として、現状の保育園運営においても宣伝効果となり「定員充足＝収入の安定」へと繋がる。

②人材の有効活用

現状の多くの保育所では、専門職としての雇用「保育士＝保育」「調理員＝調理」「栄養士＝栄養管理」というような業務分担を明確化した勤務形態「子どものための施設」という、総合的な施設では、あらたな形として「すべての職員＝子どもに関わる業務」というような概念で柔軟かつ臨機応変に業務分担を担う必要性があると考える。

今後、空き定員による不定期的な人材余剰職員（定員充足までの雇用期間中の業務、誰でも通園制度などにみる不確定児童への対応）をどのように有効活用するか。

この問題に肯定的なアプローチを見出すことが、新たな人材活用において最も重要であると考えます。

実例として、現状のホワイエ（子育て支援カフェ）ではホワイエ職員は、ホワイエ専任ではなく、有給、研修などによる職員の横断、感染症などによる有事の際の対応など多岐にわたる。

また、保育園利用者、地域利用者などの要望により、夕方、土日の営業（毎日、毎週ではない）を行っている、それにより新たな業務、時間帯としての雇用の創出がされている。今後営業日時が増えることにより、さらなる雇用の創出が見込まれる。

また、本年度新たな事業として、朝夕の補食の提供も検討しており、それに伴う保育所開園時間外での調理員などの雇用の創出も見込まれる。

保育園側からも柔軟に園内保育以外の業務に関わることで、人材育成の観点としても、これからの時代に求められる人材＝「子ども支援＝家庭支援」という概念を体感する機会となり、保護者対応などへの学びへと繋がり、多機能型の人材を育成すると共に専門性の向上にも繋がると思われる。あらたな施設で、新たな人材を雇用するのではなく、あくまでも今ある資源を活用し、「新たな、子ども・地域への事業を行う」ということが、現在行っている事業の安定、そして今後保育所が生き残っていくための「新たなカタチ」であると考えます。

【新たな居場所の創設】

これからの社会問題の一つは、間違いなく「子どもの居場所」である。

昨今では、多様な価値観や正統主義の教育の限界、これからの時代を担う思考（AI/AGIにみる人間の持つ可能性）などから、子どもたちが画一的教育へ明らかに違和感を感じているように思われる。

主体的教育へ移行している中、目を追うごとに子どもたちは自分たちの置かれている現状に違和感を感じるのは当然と考える。

教育現場の様々な問題点や教師の負担増に伴う限界などから見て、今まさに「子どもの居場所」としても改革が必要であると考えます。

「新たな居場所」として「保育園＝子どもの居場所」と定義することで「すべての子どもに対してChildren Firstの場所」を提供することが出来る。

それは、これまで保育所が「子どもを第一に考えている日常を積み重ねている」という大きな財産があるからであり、その概念を「在園児」から「地域の子ども」さらには「社会の子ども」へと広げるということである。

そういった取り組みを率先して行うことは「不登校児」や「未成年者」という「子ども」に対して、地域や行政が責任をもって対応しているということとなりうると考える。

その根拠にあるものこそ「子ども尊重」であると考えます。

【あらたな保育園の「カタチ」を、職員へどのように周知、アプローチするべきか？アプローチの方向性】

職員も法人や経営層と同じく、保育園＝保育という固定概念が強い傾向にある。

保育士＝保育を行うことが業務である、と考える傾向であると考えます。

業務の認識を変えるのではなく、「子ども」という概念を「自園の子ども」→「卒園児も含めた地域の子ども」→「社会の子ども」と広げていく感覚を、日々の保育の中で実感できる保育業務を取り入れることが重要であると考えます。

それは、新たに業務を増やすことよりも「リソースの活用」という観点からも、「日々の保育を通して、地域や地域の子どもたちと繋がる、繋げる保育」を行うことが必要である。

そうすることで、職員はそれがどのような業務であっても「子どもの最善の利益」「Children First」であり「新たな居場所」を創生しているという認識と共に、あらたな保育園の「カタチ」を実感することに繋がると考える。

【あらたな保育園の「カタチ」を、地域・利用者等へ、どのように周知、アプローチするべきか？アプローチの方向性】

まずは、上記で述べたように行政が明確なビジョンを掲げることであると考える。

子ども庁のそれも明確ではあるが、「実際にどのように実践していくのか」という部分が不明確であり、直接子どもに関わり生活しているものにとって「何も変わっていない」と感じるのではないかと。

明確なビジョンと共に、「どこで、誰が、どのように」子ども真ん中社会を実現するのか。

それは、日々の営み＝生活の中で「どのようなことが変わるのか？」それを実感する日々を積み重ねることではなく実現しないと考えている。

実践としては、ホワイエを通して、地域に開かれたイベント（上映会等）を実施することや、貸しキッチンなどを通して地域の異業種と繋がるなど、地域と保育園という場所を繋げる。また、日々の保育活動をホワイエと共にすることで、園利用者、地域の利用者への信頼感・安心化の向上などに繋がると考える。



地址：福建省厦门市思明区
电话：0592-2222222

[illegible]

103

● 40 岁以后，应每年检查一次。

子どもから大人まで、誰もが楽しめる。魅力の多い観光地であるが、国産自動車はまだまだ少なく、買取りもなかなか高値がつかない。したがって国産車や中古車、お宝車などの販売が盛んである。また、車文化の盛んなドイツ・ヨーロッパも訪ねる。

[illegible][illegible]

また、本誌の心が通じることにちなみ、今の時代では読者の読意と心を通じあえるため、ぜひ本誌の読者の読意と心を通じあえる。本誌の読意と心を通じあえる。

音楽もてびたつたの、音楽でふるふと息を吐く。空は遠くまでとどろいて、空の奥に響く。エリザベス・シュミット「音楽の心」が、その心で響く。

[illegible]

「僕は、この本を完成させることが、僕にとっての最大の目標だ。だから、僕は、この本を完成させるまで、絶対に休まない。絶対に。」

子ども達や先生達について、保護者に説明する時、あまりに冗長でいい加減な、悪い影響のように思われる、悪口や陰謀論や平然と悪口を言ってきたり学級活動の場から退席してけずけようとする生徒が居る。

そのため、保護者自身にその責任が生じ、保護者が正しい知識と対応を講じ、それが明確な形で子どもに伝達していくことは望まれている。

手紙も水にもTOX以上して、子ども理解や発達過程、どう理解を促していくかを早急機会も授けていきたい。また、動植物の種とは保護者同士が繋がれるような仲間も作れたらいい。

やりたいことをとごころのしもうら

「ありてえってなんなんこら」
 ありてえは、だれでもあそびたいことをあそびます。
 みんながやりたいことをあそびます。
 みんながなまそびたいことをあそびます。
 ひとりでも、おともだちといっしょでもだいじよう。
 まはようあそびあそびあそび

safe flapper (カフスワイプス)
 セーフな遊び場になり
 も、090 3642-1616
 営業時間：月、火、金 10:00~16:00
 土、日 10:00~18:00

詳しくはサイトでお読みください。



(4) 第4回研究会 振り返りと気づき ～ディスカッション～

第4回研究会における委員ディスカッションの中で以下のような指摘が挙げられた。

※逐語議事録からの抜粋

第4回研究会 振り返りと気づき ～ディスカッション～

・ディスカッションの中で以下のような指摘が挙げられた。 ※逐語議事録からの抜粋

【鈴木委員】

(鈴木委員質問) 世間というのがなかなか大変で、例えばうちの園のことというと、うちの園を選んでくれる人がいる一方で選んでくれない人がいて、その選んでくれない人というのは、あそこに行くに面倒くさいよ。いろいろかわりが多様にあって、あんなところに行ったら大変だ。そういう世間というのが一方であって、実はその一方にある世間のほうがなかなか手ごわいというか、そういうところがあるんですね。

(菅原氏回答) ちょっとずつ保護者理解のことをやっていこうという意味でいえば、社会とか保護者に対して、こっちが「こんなことやってるよ」だけではなくて、やっぱり対話は必要なかな。なので、僕はFOYER、園の隣にある事業所をそういう場所にしたいというのがあって、本当に地域とつながるときに、「うちはこうです」と言うよりも、どんなことをしたいですか、どんなものを持っていますかというのをもらいながら、まぜながらではないけど、というのが答えかな。

今の社会というのが非常に専門というか、いろいろ多岐にわたっていて、保育というの何かそういう専門の分野なんだというか、専門の人が担う仕事なんだというふうに世間から思われていて、そこに自分が立ち入るすきがないというか。立ち入っちゃいけないんじゃないかと、任せているほうが安心だというような価値観が世間一般の中には割とあって、そこをどう切り崩していくというのが課題だなと思っていて。今日お2人の話を伺って、何かそういう切り崩し方というのはもっといろいろ考えなきゃいけないなと思いました。

【柴田委員】

(柴田委員コメント) 就活、経済界からの理解と、あと保育現場からの改革というものの両挟みで学校教育が改革されていくと、学校教育でも実はそういった非認知能力が重要だし、将来的にも時代の流れ的にもどんどん重要になっているんだというところから、保育を起爆剤としながら学校教育全般を見直していくといいますが、改善していく。より主体性を重視した、個々の特性を重視した教育を実現していくという流れになっていけばいいなと思いながら聞いていました。

(吉田委員コメント) ありがとうございます。確かにこども基本法もできていますし、こどもの育ちのビジョンというものが省庁を超えて今できていて、これがいかに浸透して本当に有効に機能するかというのが問われている。それに対する一つの回答というわけではありませんが、何かサジェスチョンをいただいたような気はしています。

第4回研究会 振り返りと気づき ～ディスカッション～

・ディスカッションの中で以下のような指摘が挙げられた。 ※逐語議事録からの抜粋

【松本委員】

例えば今、我々がこの研究会で検討している中でまさに地域とともにということがあるときに、これが実に学びのアプローチにまでつながっているんじゃないかというところの理解をもう少し深められるんじゃないかなと思ったんです。つまり、それぞれの子もたちが興味と社会の本物を結びつける。それはただ子どもたちが新しい興味に出会うとか、・・・にただそれだけでつながるということではなくて、そもそも学びのアプローチとしていわゆる社会的実践共同体への参加みたいなことがあって、それがあることによって子どもたちが豊かに育ち、豊かに学ぶ。正統的周辺参加みたいな議論もありますけど、そういったまさに子どもたちが共同体へ参加することが、学びとか、あるいは豊かな育ちのアプローチにつながっているんだということを改めて我々は認識する必要があるかなと、お2人の話を聞いていて感じました。

そうやって子どもたちが地域に参加することによって地域のテンションとか熱量をちょっと上げるといって、そのようなことにもつながっていったりしながら、地域のウェルビーイングにもすぐつながっていくんだなということを感じたところでもあります。ウェルビーイングというのはよくつながりと自己決定みたいなことと言われたりしますが、そのつながりをいかにつくっていくかということも、まさに省庁を超えて領域横断的にやっていく必要があって。そういう中ではある種、保育の領域、子育ての領域が旗振り役となって地域のウェルビーイングを推進していくことが先ほどの子どもたちの共同体への参加にもよりつながっていくという、その相関もまた見えたようなところを感じました。

そもそも保育の多機能化に加えて保育の多義化というんですかね、もう少し社会基盤としての保育ということをイメージできるような、そんな問いかけがあってもいいのではないかなと思いながら聞いておりました。

第4回研究会 振り返りと気づき ～ディスカッション～

- ・ディスカッションの中で以下のような指摘が挙げられた。※逐語議事録からの抜粋

【柿沼委員】

幼稚園や保育園で行う保育というのはどういったことがいい保育なのかって、最近は自分でもよく考えることがあって。そうすると、例えば困っている人がいたら助けられるとか、何かコミュニケーションがとれるとか。もちろんしゃべれない子もいるので、そういった子の気持ちもわかるようになる。一緒に何かやって楽しんで遊べるようになるみたいな、いい保育と言われるものの定義が10年後ぐらいにできると。そうすると、何となく先進的なとか、先ほど来ずっと言っているような勉強だったり小学校の準備だったりというものの社会全体の認識が10年後ぐらいに変わっていくと、子どもも生きやすくなったり、また保育者もすごく過ごしやす社会になっていくのかなと思っています。

（柿沼委員コメント）いま子どもが生き生きと生活していると、それは正解なのかなみたいな。なので、何となく保育園とか幼稚園、こども園だけじゃなくて、社会が子どもたちにとって生きやすかったり、または保護者も生活しやすかったりというような、社会全体がそういう個々の幸せみたいなものを追っていくと人に優しくなるのかなと。そうすると、保育とか教育みたいなものの定義が社会全体で変わっていくかなと。

（吉田委員コメント）いま柿沼委員がおっしゃった保育。これは多分、保育そのものを、明記という意味じゃなくて、もっと本質的なところで保育を取り直す時代が来てるんだろうなと思います。学校教育法でも「幼稚園は幼児を保育し」という言葉を使っています。一方、児童福祉法でも保育という言葉がありますが、学校教育法でいう保育と児童福祉法でいう保育は実はかなり本質的に違うものである。しかし一方で、最近のこども誰でも通園制度に象徴される未就園児の保育と、これはどちらの法律も規定できない新しいものになっているので。逆に言えば、むしろそういう実情の中から保育というものを見詰め直して、ちょっとチャレンジingにもう一回構築すべきではないかなと。特に今日のような先駆的な実践を通して、保育というものを問い直すということが必要なんじゃないかなという印象を受けました。

第4回研究会 振り返りと気づき ～ディスカッション～

- ・ディスカッションの中で以下のような指摘が挙げられた。※逐語議事録からの抜粋

【奥山委員】

（奥山委員質問）支援センターの入り口を保護者に向けてもう少し丁寧にやっていくことで、就園にすぐつながって、保護者同士の関係も深まるかなと思うんですけど、そのあたりどうでしょうか。

（瀬山氏回答）地域で、まだ保育園に入っていない方たちを対象に、それでもコロナが終わったというところで、じゃあ園庭開放しようと言いつたんですけども、どういう方向でやるかというのは職員もいろんな意見が出たので、じゃあもうちょっと時間をかけて話し合ってからスタートしようとなって、園庭開放と子育て支援センターのことを両方でいま進めているところなんです。

（菅原氏回答）まだ子どもを産み育む前だとしても、やっぱり保育園って敷居が高いんだと思うんです。保育園に遊びに行こうって絶対（ならない）。先ほど委員の方も言ってた、保育園というより保育みたいなものが社会全体ならば、保育園じゃなくて保育を定義というか、保育をコンセプトにしたカフェですみたいなのが本来のものなんですけど、やっぱり保育園併設みたいな。

4. 第5回研究会

「10年後の子ども・子育て支援の在り方を考える研究会」の第5回研究会概要は以下の通り。

(1) 議事次第等

○ 開催日時：

令和6年3月18日（月） 10:00～12:00

○ 開催場所：こども家庭庁成育局第一会議室

（東京都千代田区霞が関3-2-5 霞が関ビルディング 21階）

○ 研究会委員プロフィールと出席状況：

No.	委員名	所属	出席状況
1	池本 美香	株式会社日本総合研究所	出席
2	奥山 千鶴子	認定NPO法人びーのびーの 理事長	出席
3	柿沼 平太郎	学校法人柿沼学園 理事長	出席（オンライン）
4	柴田 悠	京都大学総合人間学部 准教授	出席（オンライン）
5	鈴木 眞廣	社会福祉法人わこう村 理事長	出席
6	野澤 祥子	東京大学 Cedep 准教授	出席（オンライン）
7	松本 理寿輝	まちの保育園・こども園 代表	出席（オンライン）
8	後藤 真一郎	全国社会福祉協議会・出版部	出席
9	吉田 正幸【座長】	株式会社保育システム研究所 代表	出席

○ 議事次第：

1. 開会

2. 議事

（1）前回までの振り返り ※事務局説明

（2）ディスカッション

3. 閉会

(2) 第5回研究会 ディスカッション

第5回研究会における委員ディスカッションの中で以下のような指摘が挙げられた。

※逐語議事録からの抜粋

- 事務局提示資料は良くまとまっている。ベースとして取り組みを進めるべき事項の中に、職員の処遇・配置改善にも言及していただきたい。前回の事例で充実した取り組みを行っている園に、質問をしたところ、配置を実現している背景に東京都当の補助金を活用しているという回答があった。また、「働き方」についても重要。地域全体の働き方改善、もベースの事項として追加いただきたい。
- 実態が伴わなければ改善できないという危機感がある。私は 10 年後という言葉に魅力を感じている。来年、ではなく 10 年かけてコツコツ積み上げていけば実現できる、点に重要性を感じる。
- 事例に、こどもが少なく、高齢者が多く、駅からも遠い地域にあえて保育園をつくったとの話があった。思い切って高齢者の予算を使ってもよいのではないかと感じた。10 年後というキーワードも重要でありつつ、今すぐにやらなければならないことでもある。これを首長にどう伝えていくかを考える必要がある。こども計画もさることながら、地域福祉計画がある。変えるまでは至らないとしても、こどもの力、保育園の力を意識してもらうことが良いのではないか。
- 地域の中にさまざまな機能を持つ人がいて、有機的なつながりを作っていく、という。鳥の目で地域を見て、保育園、地域子育て支援が果たす機能は地域によって異なると感じた。
- これからは保護者が選べるといいなと思う。移動できる環境になってきて、定住と移住があり、良い意味での活性化、こどもにもよい影響を与え、地域の活性化にもつながる。地域づくりの目線の書き方、生業ができるような小さなことでもよいという形、地域に根差しているものにさらに IT かなどを重ねるイメージで文言を検討いただきたい。
- コミュニティを支える人は、高齢者だけでは十分でない。あらゆる人たちのかかわりを作ることが重要。過去にお話ししたが週休 3 日制が重要。
- 地域側とこども視点が分かれてしまっているように見えるので、循環しているように見えるようにしたいという欲が湧いた。実践、実証、哲学、様々な面での対話があった。こどもの興味に寄り添ってゆったりと過ごすことが、「スローコミュニティ」みたいなことがあってもよいのではないか。
- こども・保育者・保護者の「こども」がいなくなる、という事を強く主張しなければならない。哲学という部分では、「スロー」が重要で、また「インクルージョン」、「ダイバーシティ」が重要なのではないか。多様な価値が共存することが新たな価値を生み出していく、という事を積極的に打ち出していけるとよいと思う。
- 図表の中で「学び」についてのボックスでは、0 歳～15 歳まで、できればライフサイクルを可視化し、その中での乳幼児期を設定、その中でも乳幼児期の学びは体系的に整理することが難しい。ライフサイクルは体系的に可視化しつつ、乳幼児期そのものの難しさ、こどもの価値が可視化できるとよい。

- 様々な人が混じる、という事は危険と隣り合わせになることでもある。例えば性犯罪など。そういったこどもの安全をマネジメントしつつ、育ちの豊かさをどう確保していくのか。
- これまでは女性の就業のために行われていたものが、スロー、インクルーシブ、処遇改善なども含めこどものための保育になることを強調できればよい。
- 象徴としての10年後（目先でもなく、すぐく先でもない）、リアルな近未来の現実、備えられる時間があるという意味での10年がある。各市町村が見直しするときに参考になるようなものにしておくことができれば意味があり、地域の在り方に影響を与えられればと思う。
- 保育の定義が重要。もとにもどる、というイメージを持っている。今は「施設の保育」が保育という感じになってしまっているが、こどものもつ権利なのではないかとおもう。「保育」は「保育園のもの」という風に見えてしまうが、命を守られて、きちんと情緒が守られるようなものであるとよい。
- 社会の意識を変えるという話だが、保育を外に見せるという事を積極的に行う、という事を意識していく必要があるのでは。
- 質を高めるには費用が掛かり、できないと自分のせいになってしまうという現状は本当によくない。加配をしたりするためには園の自助努力になってしまう。たまたま自治体独自の補助制度があるところはラッキー。そういった地域でないところは補助制度がなく自助努力になってしまう。どの地域にうまれても保障されるようにしなければならない。
- 誰でも通園制度もそうだが、動かしながら改善点を探っていく。こどもの権利として確保されたことは大きい。これを受ける自治体や園がこれをどう理解するかが重要。地域、社会の保育力が問われていく。地域社会の保育力が高く、学習の機会を大人たちが保障する、など。地域社会には、こどもに係りたいと思っている人は多くいる、有資格者でないから遠慮している、できる人ができることをやる、地域社会の保育力、を目指していくのがよいのではないか。
- まちづくり、エリアマネジメントという点に似ついても研究を進めていくことができれば良いと思う。
- 保育士が少なく、研修できない、学ぶ機会がない、との声も聞く。学びあえる仕組みを作ることも重要かと思う。

第5章 事例集及びシナジー整理資料の作成

第4章に記載した研究会でのヒアリング及びディスカッションを踏まえ10年後という中長期的な視点での示唆を抽出・整理することが本調査研究の主眼ではあるが、各先駆的は取組にはすぐにでも他の事業者等の取組の参考となる要素が多くみられたため、本章では各取組の事例集及び各取組において保育と地域づくりを掛け合わせることで創出されているシナジーについて整理した。

1. 事例集

ヒアリング内容をもとに作成した事例集は以下の通り。(50音順)

事例 01

大磯・もあなこびとのこや (NPO法人もあなキッズ自然楽校)

法人・事業概要



法人名 園名	大磯・もあなこびとのこや (NPO法人もあなキッズ自然楽校)
所在地	神奈川県大磯町
特徴	#自然や文化を活用 #ありたいまちのデザイン

Point

NPO法人もあなキッズ自然楽校では、地域と連携しながらあるべきまちの機能を描いたうえで、コワーキングスペースの隣接等の地域との連携を深めながらあるべきに近づいている。

地域丸ごと全てを保育に活用。自然体験活動を重視し、「森のようちえん型」の保育園、学童保育の運営を通し、こどもたちの生きる力を育む。郵便局の遊休資産を用い、地元の古材等を活用した園舎で、街の財産を継承。保育園横のコワーキングスペースとともに、ローカルエリアの新しいライフスタイルを発信する拠点として新しい保育モデルのあり方を発信している。



法人概要・取組年表

- 2007年** NPO法人もあなキッズ自然楽校 設立
- 2015年** 大磯・もあなこびとのこや 設立
- 2021年** 大磯郵便局の遊休資産を活用した園舎に移転。

認可小規模保育園 0歳児～2歳児 定員12名

横浜市にて認可保育園、認可外保育所、横浜認証保育園、放課後児童クラブを運営。茅ヶ崎市で企業主導型保育所、小田原市で認可小規模保育所を運営。



背景・使っているリソース

地域の既存施設をまるごと有効活用。外を歩き回る中で形成された地域交流の輪を活かす。

小規模認可保育所開設時に、保育所ができることでの地域効果（単に保育所というだけでなく、地域に根差した行政との連携施設をめざしていること）について、ビジョンをマップ化し町に説明、開園に至った。

小規模保育園のため、園庭はないが豊かな大磯の自然（海、山が近い）、地域の歴史や文化、産業に触れることを日々実践。外を歩き回る中で形成された地域交流の輪をいかし、お寺訪問、乗船体験、餅つきなど、地域ぐるみでの子育て支援が実現している。

保育の体制面については苦勞しているところはなく、人材は量・質ともに十分確保できている。理念に共感した質の高い方を採用できている。パートタイムについては、ローカル採用しており、年配で地域をよく知る方に来ていただき、我々の知らないことを逆に教えていただくなど、1人1人がうまく機能している。

地域との関わり

遊休資産を活用した園舎、コワーキングスペース併設の設計により、地域活性に貢献。

遊休資産となっていた大磯郵便局一部の使用を提案され、設立当初の小さな雑居ビルから現在の場所に移転した。建物をリノベーションするにあたっては「古きよきものを継承する木育」の観点から、極力税金を使わず、かつ地域活性にも貢献するため、地元木材やリノベーションの部材を使用。

開園当初から同じビルの2階にいた株式会社co.labo（シェアオフィス、NPO法人「西湘をあそぶ会」、コミュニティ農園の運営など、まちのプレイヤーの1人）とも連携し、同建物内でコワーキングスペース

（「Post-CoWork」）を運営してもらい、保育園の隣に働く場がある環境を整備した。デンマークで学んだヒュッゲをヒントに、働き方、ライフスタイル全般の意識改革をしていきたいと考えている。コワーキングスペースの併設による時間の有効活用だけでなく、例えばPost-CoWorkでは、利用する人々の間で農園の共同運営やスポーツ活動、ビール作りなど、ここを起点とした様々な新しい地域コミュニティ、地域づくりの事業が生まれつつあり、この場所が地域の活性化につながっている。

取組による変化

子どもたちとの日々のふれあいにより、町が元気に。卒園児や保護者の自発性も促進。

子どもたちとの日々のふれあいにより、高齢化が進んだ大磯町が元気になり、高齢者の笑顔につながったことが1番の大きな成果。

横浜では学童も運営しており、保育園のシステムを超えて子どもの成長を一貫して見守っている。卒園生では既に大学生になった子どももいるが、環境保護団体を自ら立ち上げ活動している子もいる。保護者との関係も良好で、OB・OGの保護者の中にはその後パートで働いている方、自分たちでNPO

を立ち上げ地域活動している方々などもある。一般的な保護者のための活動（お遊戯会など）を一切しないことにより、保護者の自発性を誘導している。あくまで、場・環境を提供するというスタンスでいる。10年後、どの保育園も質の高い、「選ばれる保育所」になっている仕組みづくりが必要。そのために我々は小さくてもいいから、その土地、ローカルの良さを活かした実践を継続しモデルケースを作っていきたい。

事例 02

カミヤト凸凹保育園 (社会福祉法人愛川舜寿会)

法人・事業概要



法人名 園名	カミヤト凸凹保育園 (社会福祉法人愛川舜寿会)
所在地	神奈川県 厚木市
特徴	#インクルーシブ保育 #地域に根差した保育園

Point

社会福祉法人愛川舜寿会では、高齢者施設・就労支援事業・インクルーシブ等様々な「人」と繋がる機会を設けつつ、そこに子ども達や職員自身が主体的にかかわっていく仕組みを構築。

凸凹保育園のコンセプトは「誰もが持つ『凸』に注目し、誰もが持つ『凹』をみんなで埋め合う」というもの。カミヤト凸凹保育園には、同じ園舎内に障害児通所支援事業「カミヤト凸凹文化教室」があり、重要な人格形成期において、0歳から18歳までの子どもたちが存在を認め合い、共に遊び、相互に響き合う保育環境であることを大切に考えている。

どの年齢の子どももどこに行ってもよく、1日中好きなところで好きな人と好きな遊びを続けられる場となっている。園の建物の中で、障害児通所支援事業の子どもたちと保育園の子どもたちが一緒に散歩や活動をし、一緒に給食も食べて、一緒にお昼寝をして、生き生きと過ごしている。



法人概要・取組年表

1992年 社会福祉法人愛川舜寿会設立

2019年 カミヤト凸凹保育園 設立

カミヤト凸凹保育園 定員90名

カミヤト凸凹文化教室 定員10名/日



背景・使っているリソース

開園当初からインクルーシブ保育。子ども及び職員の自主性を尊重し、発揮できる環境を整備

運営法人は、愛川町にて30年以上、特別養護老人ホームを運営してきた。市とやり取りし保育所を設立することになった際、地域に根差した保育園を目指し、広々とした開放的な環境で子どもを育てたいと思った。過疎化が進む地域にこそ、子どもの存在が必要ではないか、散歩で子どもの声が聞こえたら高齢者含め地域の方々も嬉しいと思い、一番高齢化が高い地域を選んだ。高齢化や少子化などをミクロな視点で解決していくのではなく、マクロ的に越境して考え、社会変革していく意味もある。

開園当初から障害児を受け入れてきた。園での

活動は全ての子どもと一緒に活動。園は部屋全てが繋がっており、隣のクラスで何をやっているのか気配で伝わるような作りとなっている。全園児、どの保育室に行っても良い。

職員の自主性も重んじており、自ら動くスタッフに育ち、声を上げやすい風通しの良い風土が育っている。



地域との関わり

就労支援事業所の方や地域の高齢者との交流

園の周辺はもともと原っぱで、少し行くと歴史的な地域が広がっているため、地域の方と交流して助けてもらおうというのが当初からのコンセプトである。壁や敷居がない開放的な園は、外から見ても何をしているところなのか分かりやすく、何もなくても地元の方との触れ合いは増える。それだけでなく、できるだけ地域の方との交流が積極的に行われるようしかけもたくさん作ってきた。自然と地域との交流の輪が広がりが関係性が深まっていく。

例えば、地域の工務店に子どもたちが遊んで座れ

るベンチの制作等を依頼し、地域の人でも散歩途中に利用できる。夏祭りに老人ホームの高齢者を招待したり、ハロウィンに近所の家をまわったり、田植え等を地域の人と実施したりしている。地域で盛んな養豚場に遊びに行ったり、神社とも交流が深く境内で遊ばせてもらっている。

法人が運営する地域共生文化拠点から就労支援の利用者に週3回、園の掃除に来てもらっており、子どもたちは様々な大人とも触れ合うことで自然と高いコミュニケーション能力を身に着けている。

取組による変化

保育園と児童発達支援の子どもたちが一緒に過ごし自発性の育成、保護者にも好影響

自由度が高いことは、自発性を育てることにもつながっている。

保育園のこどもたちと児童発達支援の子どもたちが一緒に過ごし仲良しになることで、双方の保護者も非常に仲良く交流しており、一緒に過ごすことの意味を感じている。入園当初は切実感があつた保護者の方が、こどもの明るい成長、その他の親とのかか

わりによりみえる表情が明るくなり、ここで子どもが育ってよかったと感じて頂けているのを見ると、更に繋げる・広げていく意味を感じている。

事例 03

基山モール商店街、ちびはる保育園基山園

法人・事業概要



法人名 園名	基山モール商店街、 ちびはる保育園基山園
所在地	佐賀県三養基郡基山町
特徴	# 商店街の活性化 # 地域に根差した保育園

Point

商店街の中にある保育園。エリアとして保育機能を担うことで様々なシナジーを創出。

商店街側の「持続可能なまちづくり」構想と、町側の商店街の空き店舗を活用し保育園を設置する構想から、商店街の中に保育園が移転してきた。

商店街の歩行者天国「グリーンロード」の一部が、子どもたちの遊ぶ場所として利用されている。子どもたちを商店街の人々が見守り、支えるとともに商店街と保護者との新たな交流も生まれている。商店街に活気が出て、商店街の空き店舗減少にもつながっている。



法人概要・取組年表

2016年 ちびはる保育園基山園 モール内に移転

3歳児～認可外保育所	合計定員39名
0～2歳児小規模保育施設	

ちびはる保育園運営法人は、保育所事業のみ実施。基山モール商店街は、昭和56年設立の駅徒歩1分の好立地の駅前商店街。毎年7月に「きのくに祭り」が盛大に行われ、子どもたちが多く参加。



背景・使っているリソース

存続の危機意識からまちづくりに注力してきた商店街に立地し、地域が子どもを見守る環境にある。

基山モールはJR基山駅前の再開発等により昭和57年に整備された商店街。近年シャッター街となり、危機感を覚え、「補助金に頼らない、持続可能なまちづくり」を考えはじめた。

ちびはる保育園が開園する1年ほど前、交流の拠点となる「街中公民館」を商店街の中に設置しサークル活動の場や無料休憩所として開放した他、小学生向けの将棋教室や地域住民の写真展の会場として使用するなど買い物をするだけでなく地域住民が集い交流する場として動きはじめた。

同じころ、町のこども課が中心となって、商店街の

空き店舗を活用し保育園を設置する構想で、元々他の場所にあったちびはる保育園が2016年に移転してきた。その際、経済産業省の補助金を活用した。小さい町のため、役場の動きもスムーズで早かった。

このような背景があり、基山モール商店街の中に保育園を設置する際には、商店街がとてもウエルカムに迎えてくれた。

地域との関わり

商店街の中の道が、園児の遊び場。日常の中で商店街と保育園が交流。

保育園で商店街の手書きmapを作成（ちびはる限定お得マップ）、ちびはる特製カレンダー（子どもたちがクレヨンで描いた絵がプリントされている）を作成し、商店街への配布を行った。商店街からはそのお返しとして買い物特典カードをプレゼントするなど、ちびはる保育園を起点とした積極的な交流が行われている。

商店街の歩行者専用道路（グリーンロード）をイベント開催場所として使用することで交流の場となっている。ちびはる保育園のこどもたちがチョークで自由

にお絵描きできる道のキャンパスにもなっており、日中は子どもが自由にお絵描きを楽しみ、歩行するお客さんは、日々変化するかわいい絵を見ながら通路を歩く。みんなにとって楽しい空間となっている。商店街が寂しくならないように、子どもたちの声も響かせてほしいし、道路にもいっぱいチョークでお絵描きしてほしいというふうに、商店街のほうから言っていた。保育園としても、独自開催のイベントだけでなく商店街イベントに参加することができるのはメリットになっている。

取組による変化

保護者や卒園生と商店街の交流にもなり、地域コミュニティの活性化につながっている

こどもたちを商店街の人々が見守り、支えるとともに商店街と保護者との新たな交流も生まれている。商店街に、精神的な面でプラスになっている。

夏祭りの際、こども用の山車をちびはる保育園の園児にもかついでもらうことで、地域文化の継承に参加・地域との交流を図っている。夏祭りの山車の参加人数を見ると、基山商店街モールの参加者数が

軍を抜いて多く（他地域の倍以上）、こういった地域交流の取組の成果と感じている。

商店街としても、10年前まで10店舗ほどあった空店舗が、現在は2店舗のみの空きになり、病院、高齢者・障害者施設、塾、ダンス教室など、多世代が集まる商店街になっている。商店街そのものに常に人が集まっている状況を作る・持続させることが重要と考えている。

事例 04

認定こども園こどもむら (学校法人 柿沼学園)

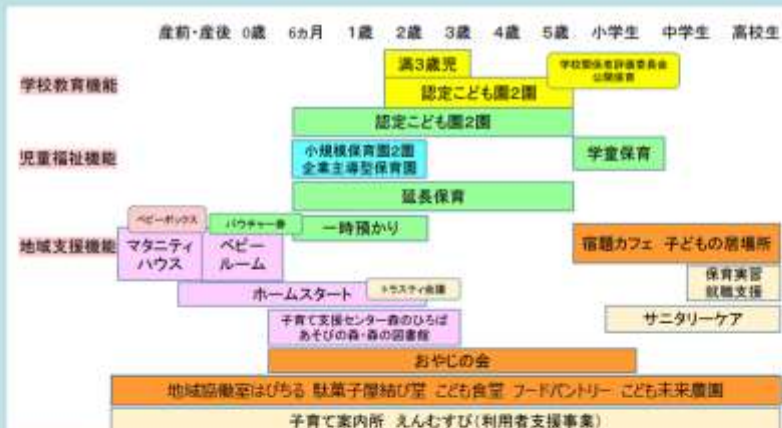
法人・事業概要



法人名 園名	認定こども園 こどもむら (学校法人)
所在地	埼玉県 久喜市
特徴	#「むら」ごとづくりだす # 妊娠期からの支援

Point

認定こども園の運営の他に、以下の通り地域のこども、子育て家庭に係る多様な事業を展開。園名の「こどもむら」が示す通り、必要なコト・モノがそろった「むら」のような地域を創りだすことを目指している。



取組年表

1975年4月	学校法人柿沼学園／栗橋さくら幼稚園設立認可
2012年4月	認定こども園こどもむら設立 認定さくらのもり保育園 設置認可
2012年7月	子育て支援センター「森のひろば」設置
2017年4月	こどもむら学童クラブ en-college 設立
2019年9月	こどもむら寺子屋はぴちる 開設
2020年6月	学習支援事業 開始
2020年8月	産前産後ケア事業開始
2023年4月	養育支援訪問事業、子育て世帯訪問支援事業開始

背景・使っているリソース

地域の行政、企業との連携によりサポートを充実

1975年から久喜市（当時は栗橋町）に幼稚園を運営。その後、認定こども園への移行、新園の設置などを経て約450名の規模（5施設合計）で保育施設を運営し、同じ地域で他の事業も行っている。

市の人口が減る中で、「こどもを生み育てやすい環境を整えれば、大規模開発等に頼らなくてもこどもの数が増えるかもしれない」という仮説を立て、園を置いている伊坂地区に限定して、こどもと家庭に必要な機能の一つずつ揃えてきた結果が今の姿である。まずは自主事業で取り掛かり、その後公的な補助金や制度を積極的に活用し、自治体と連携し、受託事業の形をとったりすることで、様々な機能の

展開を実現した。

連携の例の一つがベビーボックス配布である。数年前、産後の大変な忙しい時期に受けられる自ら支援を探し、自ら支援を受けに行くことはハードルが高いのではないかと考えたことから、妊産婦へのベビーボックス配布（新生児期に必要なケア用品のセット）を、産前から支援につながってもらうための工夫として企画。企業からの協賛を得てボックスの中身の充実も実現した。また、案内の配布は保健センターで母子手帳の配布時に行ってもらうことで公的な要素を含ませた。それにより、多くの妊産婦に届けられることができるようになっている。

地域との関わり

あらゆる年齢層の地域住民の接点が生まれる居場所へ

事業全体を通じて、こどもと家庭を見守り、支える「地域づくり」を重視している。例えば、就園期間以外にもこどもや家庭とつながるものとしてカフェ、駄菓子屋、子育て案内所、フードパントリー、農園などを運営しているが、これらの場所は自然と様々な子育ての段階、年齢層の人々の居場所となり、そこで地域住民のコミュニケーションが生まれている。そしてこうした居場所は、支援が必要なこどもや家庭を把握し、地域の支援につなげていく入口としても機能するようになりつつある。

また、施設での生活や保育期間に限らず地域の人々との接点を持つようになることが当たり前になってきた結果、今では在園児に限らず保護者や、近隣の住民の方々がこども園の活動にボランティア参加してくれたり、自治会と連携して地域のイベントを運営してくるようになっている。

園運営とその他事業、地域の活動は別々のものではなく、一体となって子どもを産み育てやすい地域をつくり出すものとして存在するようになっている。

取組による変化

地域のこどもの数に変化

地域の子育てサポートのニーズに目を向け、新しい取り組みを一つ始めると、そこからまた新しく地域のニーズを把握することができ、次の事業につながっていくというサイクルができることが実践を通じた学びと言える。

また、保育だけでなく、相談事業や食に係る事業（農業、子ども食堂、カフェ等）、学習サポートなど様々な分野をカバーすることで、法人内はもちろん、

地域に住む様々な専門性やバックグラウンドを持つ人たちに関与、活躍してもらえるようになったこともよい変化として顕在化している。

「我々の取り組みだけの効果とは断言できませんが、伊坂地区ではこどもの数が増加している傾向があります。こどもを生み育てやすい地域として魅力を感じていただけるのであればうれしい限りです。」法人理事長の柿沼氏は語っている。

事例 05

せせらぎ保育園/子育て支援café FOYER (社会福祉法人清朗会)

法人・事業概要



法人名
園名 せせらぎ保育園
(社会福祉法人清朗会)

所在地 東京都清瀬市

特徴

こどもがいても、いなくても立ち寄れる
場所 # 小学生の居場所 # 子どもと
大人のやりたいが叶う場所 # やりたいと
やりたいが繋がる場所

Point

東京都の市部にある認可保育所。こどもの主体性を尊重する保育を実現するため、保育環境づくりにも工夫を凝らしている（一斉保育ではなく自分のやりたい遊びをやりたいときにやる、食事、睡眠も個のペースを優先できるよう、人員配置を工夫する）。異年齢保育、周囲の豊かな自然環境を活用した保育などにも取り組む。

さらに、「こども主体」「こども真ん中」な地域社会を創っていくための取り組みとして、2019年、園に隣接する土地に「子育て支援café ホワイエ」を設置。親子がゆっくり一息つける場所、として運営を開始。、2023年からは「誰もが集えるFOYER（居場所）」を目指し、年齢制限を撤廃。未就学児親子だけでなく、小学生や、育児未経験の学生もふらっと立ち寄り、居場所を得られる空間を目指している。



法人概要・取組年表

2014年 法人設立、せせらぎ保育園設置

2019年 子育て支援café FOYER 設置

せせらぎ保育園 定員名125名

子育て支援café FOYER 月～金オープン、通常
16時まで、火曜・木曜
は18時まで

Café FOYERは小学生が利用しやすいよう、オープン時間を延長（現在は火曜/木曜）、今後



背景・使っているリソース

「こども中心」を実現できる保育ノウハウを生かした居場所づくり

せせらぎ保育園では保育所の運営方針として、「十分な養護の行き届いた環境の下に、くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を満たし、生命の保持及び情緒の安定を図る」ことを重視してきた。

この考え方を在園児だけでなく、卒園児、卒園児だけでなく地域のこども、地域のこどもにも適用した結果が「誰もが集えるFOYER（居場所）」である。当初は主に未就園児の親子向けの支援センターとしてスタートし、現在では親子向けの支援（遊び場、お散歩会など）と、夕方以降の小学生の居場所、両方の機能を果たしている。Café FOYERの運営にあたっては、保育所という場

所、保育士等の人材はもちろんこと、「こどもファースト」の活動のノウハウを蓄積してきたことが最も大きなカギとなっている。当園では開園当初より、一斉保育ではなく「こどもがしたいときにしたいことをできる環境を整える」、ことを重視しており、遊びの時間、午睡の時間、食事の時間などを可能な限り希望に合わせているほか、形式通りの運動会や発表会は廃止し、子どもたちが発案し、企画したイベントを行っている。

こどもがやりたいことを主張し、実行できる環境づくりを行ってきたノウハウが、こども中心の居場所づくりにも生きていけると言える。

地域との関わり

こどもや、保護者だけでなく必要としている人すべての居場所に

子育て支援を行うにあたり、当初は将来的には入園を検討している親子に、安心できる居場所を提供し、当園の良さを分かってもらいたいという考えもあった。しかし、子育て支援をつづけていく中で、居場所が必要なのは、未就園児だけではないという考えに至り、年齢制限を撤廃した結果、小学生も含め様々な年齢層の人々が交流する場になりつつある。

従来、こどもがいない若い層や、こどもが巣立った

層にとって、保育所は接点を持ちづらい場所だが、「ふらっと寄れる場所」、「誰でも参加できるイベントがある場所」を園の隣に置くことで、当園がどんな場所なのか、こどもを真ん中にした居場所とはどんな場所なのか、が地域の人にも理解されやすくなっている。実際に、アトリエデーや映画上映会などのイベントには、多くの地域住民が訪れ、園とFOYER、地域の交流が活発になりつつあると言える。

取組による変化

「保育業務」を担う人から、「こども真ん中社会」を支える人という自己認識へ

様々な年齢層の人々が集まり、地域の人たちとの交流が増えたことにより、地域の子どもたちや家庭がどんなサポートを必要としているのかを把握しやすくなりつつある。

また、従来から職員は「子ども主体の保育」に取り組んできたが、子育て支援を実践することにより、「すべてのこどもを真ん中に置いた居場所としての保育

所や子育て支援のあり方」について、保育所運営業務の域を超えて考えるようになり、その役割を自分たちが担うという誇りを持つことにもつながっている。

こうした取り組みに共感する若者が保育所での就業を希望してくれることも増えており、より多様な人材の確保、活躍にもつながっている。

事例 06

地域まるごと子育て縁 (株式会社CNC)

法人・事業概要

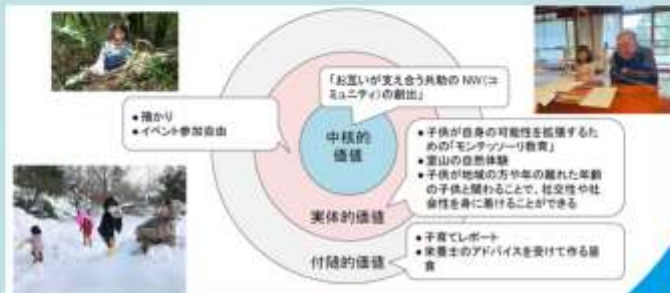


法人名 園名	地域まるごと子育て縁 (株式会社CNC)
所在地	島根県雲南市
特徴	#共助 #地域コミュニティ活性化 #地域まるごと子育て

Point

地域まるごと子育て縁では、地域みんなで子どもを見守り育てていくことを目指した仕組みづくりを実施。食の杜という、自然とともに生きることを大切にしている事業者が集まっている複合施設内に立地し、多世代の地域交流の拠点として室内あそび、地域の方々との触れ合いによる体験・イベント・キャンプなどを行っている事業である。

今までの子育ては公助や自助で賄っているモデルだったが、共助にも広げ、助け合いながら子どもを育てていくという新しい子育ての形に挑戦。そのような在り方が未来の子育ての当たり前となり、子育てによって、豊かな未来をつくり出していきたいと考えている。



法人概要・取組年表

2017年 Community Nurse Company 株式会社
(現 株式会社CNC) 設立

2022年 地域まるごと子育て縁 運営開始

定員5名。毎週金～日で拠点を開放し、プログラム提供。

法人としては、誰もが誰かの元気を応援し合う「コミュニティナーシング」の社会実装を目指し、雲南市をはじめ全国各地で展開中。「コミュニティナーシング」とは、目の前の人の健康を気遣うような声かけや、おせっかいによる相互扶助の促進など、関わり方や実践の在り方のことを指し、パートナー企業や自治体とともに持続可能なモデル開発に取り組んでいる。



背景・使っているリソース

有事の際に必要な地域の中で相互に助け合えるつながりを提供。

実施内容は、①杜のクラス：未就学対象、②その他シーズンキャンプの開催（3才以上対象）、③コーヒー会・懇親会（杜のクラスに来た子どもの親御さんに集ってもらい、親同士のネットワークを形成してもらいしかけ）を中心としつつ、それらを通して地域住民が接点を持つきっかけを提供し、関係構築を促している。

活動エリアとしては、杜のクラスについては、雲南市内の古民家を使用し未就学児向けで行っている。

サマーキャンプについては対象年齢層が上がるため、お隣の出雲市、県外（広島県）等地域外の方に

も参加いただいている。

子どもが1人で遊びに来るという、いわゆる一般的な一時預かりもしているし、親子で遊びに来ることができるようなイベントの企画・運営もしている。人員体制として、企画と現場を行き来してはいるが、5名（企画3名、現場2名）で運営している。現場2名のうち1名は保育士資格を持つスタッフ、もう1名は会社の正規社員が入替わりで対応している。

地域との関わり

地域住民と子育て家庭が直接つながっているという状態を目指す。

月1のイベントに、地域の方に講師として来てもらっている。（例：家にこもりがちだった80代のおじいちゃんに、子どもたちに竹水鉄砲の作り方を教えてもらおうようお願いしたところ非常に喜んでくれた。家に引きこもりがちなお老人に外に出てもらい、同時に子どもの親も含め、地域の方と顔見知りになるきっかけを作っている。一度顔見知りになるとその後も関係が続く、お互いがお互いを気に掛けるような共助のネットワークになっていく。）

別の例としては、子育て縁で、夏にサマーキャン

プを開催。子育て縁の近くにあるブルーベリー農園を営むおばあちゃんのところに行った。初対面だったが非常に仲良くなった。子どもにとって、身近にブルーベリー園があったことへの驚き、また楽しい時間を過ごしたということをごどもが家に帰って家族に伝え、その後親御さんと子どもだけでブルーベリー農園を訪れた、ということがあった（子ども・ごどもの親×地域・おばあちゃんとの関係形成に繋がった）。このように子育て縁という事業を必ずしも介さなくとも、地域住民が直接つながっているという状況を我々は目指している。

取組による変化

子育て縁は現状利用者の利用料、または事業の理念に共感していただいた方からの寄付金で運営している。

地域の人と人との繋がりのきっかけを提供することで、地域住民が独自の繋がりを形成し、自然と子育てに関して地域からの理解、地域としての協力体制の構築ができていく。子育て縁は現状利用者の利用料、または寄付・自治体からの事業委託費（取組によって異なる）で運営している。相互扶助、共助という観点は捉え方を変えたとおせっかいの循環が地域で回っているという状態。子育て縁の事業も、

人の思いが循環している状態で運営していきたい。おせっかいの思いから地域住民が寄付をもらい、その寄付金で事業を成り立たせたいと考えている。そのため、寄付事業が財源としてマッチしていきと考えており、ファンディングも強化していきたい。Aさんのお金と一緒に思いもセットでBさんにまわされていくという循環を目指している。

事例 07

ハレルヤこども園 (社会福祉法人ハレルヤ福祉会)

法人・事業概要



法人名 園名	ハレルヤこども園 (社会福祉法人ハレルヤ福祉会)
所在地	鹿児島県大島郡与論町茶花2002-1
特徴	#ヨロン島まるごと園庭 #島の発展とリンク

Point

与論島にあるこども園。キリスト教的人間観と教育観に即した社会福祉の理念に基づき、自然、伝統文化、世界に目を向けた個性豊かな全人教育を特徴とする。与論島という魅力的な地域性や島の環境を活かしながら島の発展に寄与することや町では行き届かないことを意識した取り組みを実施。地域に根差した魅力あるオンリーワンの園づくりを目指している。教会の使命として「対象は全町民、全世界」と考え、在園児や卒園児のみならず、支援の必要な家庭にも寄り添っている。児童館、学童クラブ、心理相談室の併設、地域医療との連携等、地域づくりに貢献している。



法人概要・取組年表

1980年 ハレルヤこども園 設立

認定こども園 定員80名、現員91名

子育て支援センター、児童館、学童クラブ、心理相談室等を併設。

協力事業所として、教会、有機農園、診療所があり、地域医療とも連携している。



背景・使っているリソース

「ほんもの」重視、子どもにとって必要なことはなんでも実施。

ニーズありき・制度ありきではない、こどもの育ちの環境として地域に必要なものを取り入れるというスタンスで長年取り組んできた。「地域にとってあった方がいいもの」は先だって取り入れるよう動いてきた。基本的なスタンスとして、本土との教育格差がないよう努めてきた。国や自治体の制度ができる前から必要なものは取り入れる。そのようなことを継続した結果、行政からの支援が伴ってきた。様々な新規事業に関して行政からの要請も度々あり、よい協力関係が築かれている。

子どもにとっての育ちを意識し、「ほんもの」を重視している。保育の質を上げるために、必要と思われる

保育環境を整えている。子ども達が日常で「ほんもの」に触れることができるように、コレクションルームやアトリエ、キッズファームを備えている。国の制度が整備される前から必要に応じて子どもの預りを実施してきた（延長保育・休日保育・お泊り保育・病児保育・障害児保育）。それに伴い、ハレルヤこども園への入園を希望する家庭も増えていった。

地域との関わり

児童館、相談対応、農業体験、診療所など、保育のみにとらわれない事業を展開。

もともと教会が母体で、教会の使命として「対象は全住民」と考えており、家庭をまるごとケアすることは当然のことと考えてきた。

児童館、相談対応（相談室ノア）、農業体験など、保育のみにとらわれない事業を展開している。付帯施設ということで、男子寮、女子寮、職員住宅、診療所も導入している。地域医療とも連携し、医療面から必要な勉強会も継続的に行っている。現在は発達支援と放課後デイ、及び就労継続支援事業所の開設準備を行っている。

代々の土地にて農業法人を設立。園児たちと農業の真似事から始まり、現在は本格的な農園、食育を確立しようと取り組んでいる。（あらゆる保育業界の制度を網羅した後、こども教育の本質を考えるようになった結果、農業体験を重要コンテンツとして取り組みはじめた。）

国際交流にも注力している。ケニアのマサイ族教員をはじめ世界各地の方々との国際交流の実績を重ねている。

取組による変化

卒園児・家族との強いつながり。町や島視点でみた取り組みの一部として保育機能を提供。

子どもの成長にとって、地域コミュニティとの接点は必要不可欠である。その為、OB・OG他、地域の社協、老人福祉施設等との、地域交流が盛んに行われている。卒園後も運動会等に多くのOBやOGが参加している。

昆虫教室や天体観測を担っている講師は島外から移住されてきた方であり、保護者でもある。職員や地域の家族同士のつながりも深い。島全体が旅人や移住者を快く迎える雰囲気がある。

設立当時、保育園としての役割のみならず雇用先としての役割も担ってきた。地域がまだ貧しかった時代、子どもの大学進学は経済的に厳しい状況にあった。子どもの教育のため、今本当に島に必要な保育園（当時）をつくって、そこで就労してもらいたいという思いからの設立であった。今後の構想として、「ヨロン島まるごと園庭プロジェクト」にて、さらに保育の質をより高めていきたい。

事例 08

地域子育て支援拠点事業 (認定NPO法人びーのびーの)

法人・事業概要



法人名 施設名	認定NPO法人びーのびーの 港北区地域子育て支援拠点どろっぶ
所在地	神奈川県横浜市
特徴	#多機能型支援、#地域人材育成 #出産前の夫婦へのアプローチ

Point

認定NPOびーのびーのは、横浜市港北区で地域支援を行う団体。運営する拠点のひとつ港北区地域子育て支援拠点どろっぶは、一戸建ての専用施設で、1日約50～70組の親子の利用がある。ファミリー・サポート・センター事業（1か月約1,000件）や、利用者支援事業（相談件数1か月約40件）、一時預かり事業（1日3組）を実施する多機能型支援の場となっている。また、休日の両親教室を地域会場も含めて年間約60回開催するなど、妊娠期からの切れ目ない支援にも力を入れている。

支援活動にあたっては、こどもにとって良質な環境の実現のために、親の子育て肯定感を高めるアプローチや、妊娠期から専門職や地域人材のサポートを気軽に誰もが活用できる体制の構築などを重視し、取り組んでいる。このアプローチによって、地域で子育てをする実感を得られる場となっている。

利用者支援事業や、ファミリー・サポート・センター事業により小学校まで支援の幅がひろがり、学童期・思春期まで見通せる場となっている。



法人概要・取組年表

2000年	NPO法人びーのびーの設立、おやこの広場びーのびーのを自主運営
2002年	「親と子のつどいの広場事業 おやこの広場びーのびーの」受託
2006年	「港北区地域子育て支援拠点どろっぶ」開所
2010年	ファミリー・サポート・センター事業事務局業務開始（どろっぶ内）
2016年	利用者支援事業事業開始（どろっぶ内）
2016年	「港北区地域子育て支援拠点サテライト」開所
2021年	一時預かり事業開始（どろっぶ・どろっぶサテライト内）

背景・使っているリソース

現代の子育て家庭に必要な子育て支援の在り方を追求

認定NPO法人びーのびーでは、妊娠期からの切れ目ないプログラムを提供している。

現代は共働きの夫婦が多く、そのライフスタイルに合ったサポートが必要であること、またこどもにとって良質な環境を生むためには男性の参加しやすさ、子育て肯定感の充足が重要であることを前提とし、各プログラムを設計している。一例として、夜間や休日、オンラインでも受講できる両親学級を地域会場も含め年間約60回実施、産前の育児体験、情報交換

の場の確保などを行っている。さらに港北区と協働で産前産後のサポートの状況やサービスの利用状況などを4カ月児健診時に毎年調査を行い、事業実施のための基礎データとしている。

また、両親教室、一時預かり事業、ファミリー・サポート・センター事業については、ネットで申し込みが可能となっており、利用者のアクセシビリティを高めている。

地域との関わり

企業との連携、地域人材の活用に期待

子育てを男女ともに担い、ウェルビーイングが保障される社会を実現するためには、働き方の改善が重要と考え、産休・育休のありかた、多様な就業・生活スタイルの補償について企業に知識普及、啓発していく取組を行っている。

子育てについては、産前産後のヘルパー導入に国庫補助がなく、横浜市独自の産前産後ヘルパー派遣事業に登録して活動している。今後は子育て支援を提供する専門職や、地域の支援人材（ファミリー・サポート・センター事業の提供会員、ヘルパー、ボランティア等）の確保を進めていく必要があると考

えられる。そこで、学生や地域ボランティアを幅広く募集し、乳幼児にかかわる募集と育成を行っている。ボランティア募集のリーフレット「Doors」は、ボランティアの多様な受け入れの入り口として発行している。

また、夏休みに地域や学校と連携して行うボランティア活動の推進事業「ボラリーグ」、大学生や若者支援団体と連携して行うインターン受け入れ、プロボノ企業との協働、医学部や看護学科、保育学科等大学の実習などの受け入れを通じて、未来の専門職に門戸を開いている。

取組による変化

こどもが自発的に遊び・育ちあう環境が地域に

就園前の乳幼児期に、地域子育て支援拠点等の交流の場において、自然かつ自発的な遊び、育ち合いが保障され、親以外の大人とのかかわりが持てることで、自分の存在が社会から祝福されていると感じられること、体感できる環境を提供していくことが重要だと考えている。

見学者が驚くのは、どの子がどの親の子どもかわか

ない状況で、親も子ども笑顔で過ごしている様子である。そこには親でなくても、親子の交流の場の中で、地域の中で、子どもたちが多様な他者とのかわりの中で育っていく姿がある。

一時預かり事業やファミリー・サポート・センター事業による預かりが、通いながれた交流の場で実施されることで、親も子ども安心して利用できるメリットもある。

まちの保育園/まちのこども園 (ナチュラルスマイルジャパン株式会社)

法人・事業概要



法人名 園名	まちの保育園/まちのこども園 (ナチュラルスマイルジャパン株式会社)
所在地	東京都
特徴	# まちのウェルビーイング拠点 # コミュニティコーディネーター

Point

都心部で6つの保育施設を運営。「まちぐるみでの保育」、「地域のウェルビーイング拠点になれる保育施設」を重視している。地域に開かれた場とするため、全園、施設に隣接した場所で、カフェや、地域の集会などに使えるスペースを運営している。

さらに特筆すべき事項として、こどもの興味・関心に寄り添いながら、地域とこども・保護者・保育者の橋渡しする役割を担う「コミュニティ・コーディネーター」を配置していることが挙げられる。地域の子育て世代や、その周りの人々につながりを作っていくことで、地域のリソース（人材、空き店舗、空き地など）を生かしたこどもの居場所づくり、ひいてはあらゆる年代の人が居場所を持ち、活躍できる地域づくりが実現している。



法人概要・取組年表

2011年	まちの保育園 小竹向原 開園
2012年	まちの保育園 六本木 開園
2014年	まちの保育園 吉祥寺 開園
2017年	まちのこども園代々木上原、 まちのこども園代々木公園 開園
2023年	まちの保育園 南青山 開園



背景・使っているリソース

園と地域をつなぐコミュニティコーディネーターが活躍

保護者だけでなく、地域住民の参画を得て、こどもの育ち、学びのための環境を作りだしている。

また、当園では、地域とこども・保護者・保育者の橋渡しする役割を担う人材であるコミュニティコーディネーターという役職を置いている。コミュニティコーディネーターを中心として、園と地域、それぞれの人と人をつなぐことで、地域の子育て世代や地域の人々に「共育で」のコミュニティが形成される。

こうしたコミュニティの活動により、例えば「みちあそび（道路や空き地を遊び場として一時的に活用する）」、閉店した店舗をこどもの居場所として活用す

るようなプロジェクトが生まれ、園の関係者だけでなく、地域の方々が参加している。

保育施設や学校には「こどもや子育て世代が集う」という性質ある。その性質を生かし、地域の人と人をつなぎ、そこで生み出される活動によってこどもの育つ環境の充実につながるという好循環が生まれている。

地域との関わり

こどもだけでなく、地域のすべての人のウェルビーイングに

現代において、子育て世代と地域の高齢世代、単身世帯等の間の交流は希薄化しがちである。高齢者等は町内会・自治会がつながっており、子育て世代は保育施設等や学校がつながっている傾向にある。

保育所等が中心になり、両者をつなげていくことにより、すべての世代を巻き込んだ交流が起き、高齢世代の孤立の解消、地域における役割を持つことによる充実、子育て世代にとっては子育てを見守り、応援してくれる地域の関係者の確保につながってい

る。

当園には、退職後の高齢者が保育施設にボランティア活動に来てくれている方がいる。ご本人にとってリタイア後の生きがいにつながっており、園としては子どもたちを見守る重要な支援者を得る形になっており、関係者すべてのウェルビーイングの実現につながっていると言える。

取組による変化

地域における「支援者」が続々登場

保育施設を地域に開くことを重視し、保護者だけでなく、地域に開いていった結果、当園の周りには、こどもをはじめとした誰もがウェルビーイングを感じられる地域づくりの関係者、支援者、が増加している。例えば、地域交流が進んだ結果、これまであまり接点のなかった地域の小学校の校長先生も、当園の取組みに賛同し、関与してくれるようになり、幼保小の接続や連携もスムーズになりつつある。

また、地域のことを自分事としてとらえ、活動する人が増加した結果、今後は、子育ての領域だけでなく、地域の課題解決やまちづくりへの取り組みも活発になり、まちの魅力向上にもつながっていくことが期待される。

事例 10

和光保育園 (社会福祉法人わこう村)

法人・事業概要



法人名
園名 和光保育園
(社会福祉法人わこう村)

所在地 千葉県 富津市

特徴 # 専門家で閉じない保育
地域の人々を巻き込む

Point

和光保育園は「こどもと大人と保育者が、育ち合う・共育て・共育ちの共同体＝わこう村子コミュニティ」と称して、日々の保育に保護者や地域の人々を積極的に巻き込むスタイルで活動している。

こどもが生活者の一人として生命を輝かして生きることを大事にして、「ゆったりな時間とたっぷりの経験をこどもたちに」、「出会い、ふれあい、育ち合いの広場を大人たちに」を基本理念としている。その活動は、「母さんの会」「おやじの会」メンバーによる支援や、地域の人々の協力によって支えられている。こどもたちは豊かな生活体験を得、大人は役目を持ち、必要とされる充実感を感じられる、双方にとって幸せなコミュニティが創りだされている。



法人概要・取組年表

1957年	和光保育園開園、認可取得	保育園	定員 90名
1995年	おやじの会 が自主結成される		
1999年	学齢期の障害児土曜保育開始		
1999年	地域子育て支援センター開設		

背景・使っているリソース

保護者の力、地域の人、自然、なんでもリソースに

「保育園・幼稚園・こども園のスタッフはこども好きで世話好きなお人好しが集まるある種偏った人柄同士の集団」だと気付いた。保育についての専門知識はあるものの、自分たちにはできないことも多くあるのではないかと考えたときに、それをカバーしてくれる存在として浮かんだのは保護者、地域の人であった。

こうした気づきから、わこう村では、保育を開いて積極的に保護者や地域の人々を園の活動に巻き

込むようになっていく。伝統行事に知識ある人、特技がある人、昔ながらの道具（例えば養蚕の道具、臼や杵）を持っている人、こどもの活動をサポートしたいと思ってくれる人すべての方々に支えられて日々の活動がなりたち、参加する大人たちにとっても、自己実現の場となっている。

また、自然に恵まれた立地にあることから、近隣の里山・里海、近所の人々の畑なども、日ごろから活動のフィールドになっている。

地域との関わり

豊かな生活体験を実現するために汗をかき、知恵を貸してくれる地域の方々

当園では、保育の概念枠を崩したこどもと大人で営む「暮らし」を、重視しており、行事においても地域の人々の出番がある。柏餅を作るときは近所の家庭から柏葉を分けてもらい、お礼に柏餅をプレゼントする、蚕の餌にする桑の葉をもらう、正月飾りは近所の高齢者に来てもらって子どもたちも真似てつくる、など、地域の方たちの力が、こどもたちの豊かな生活体験の実現に自然と、かつ大きく関係している。

この他にもおやじの会の力により実現している環境づくりは多彩。特に代表的なものとしてあげられるのは毎年恒例夏のプール設置、熱中症対策としてのネット張り、虫取りをする裏山の草刈り、などである。

こうした行事は、それぞれの参加者が道具を持ち寄って、こどものために行ってくれている。

ログハウスの図書館、陶芸窯、コーヒーカウンターと子ども服のリユースショップを併設した大人のサロン「わいがや亭」（現在子育て支援センター「もうひとつのお家」の拠点としても利用）、富士見やぐらなどの設備も、「おやじの会（保護者に限らない）」による手作りであり、こどもと大人で「こんなことがしたい」を叶えてきた。

こどもの周辺で大人も参加・参画しながら、「里山手仕事民主主義」で混ざり合い、繋がり合い創り出す「村づくり」を現在進行形で取り組んでいる。

取組による変化

地域の様々な人と、頼り、頼られる関係に

保育を施設や専門家集団で閉じるのではなく、保護者や地域の人にも積極的に出番をお願いすることになったことで、保護者、保護者OBだけでなく、地域の高齢者、他の福祉施設（障害者施設等）の利用者など多様な人々と関わり、日々の活動を共有すること、が日常になった。また、地域の人々が参加し、助けていただくだけでなく、参加者の自己実現の場としても活動の幅が広がっている。

保護者や地域の方々の間でも、「私でも何かでき

そう」、「関わりたい」、「役割を持ててうれしい」と感じてもらえる雰囲気を作り出されつつあると感じている。

孤立が進みつつある現在において、こどもがかすがいとなり、多様な人々の居場所や役割、活躍する出番を作り出していくことに、子どもだけでなく大人たちにとっても顔が見えて幸せが実感できる「場」があることの重要性が増していくと考えられる。そういった地域コミュニティのつながりの核となる「保育」や「子育て支援」の在り方を模索し続けたいと考えている。

2. シナジー整理資料

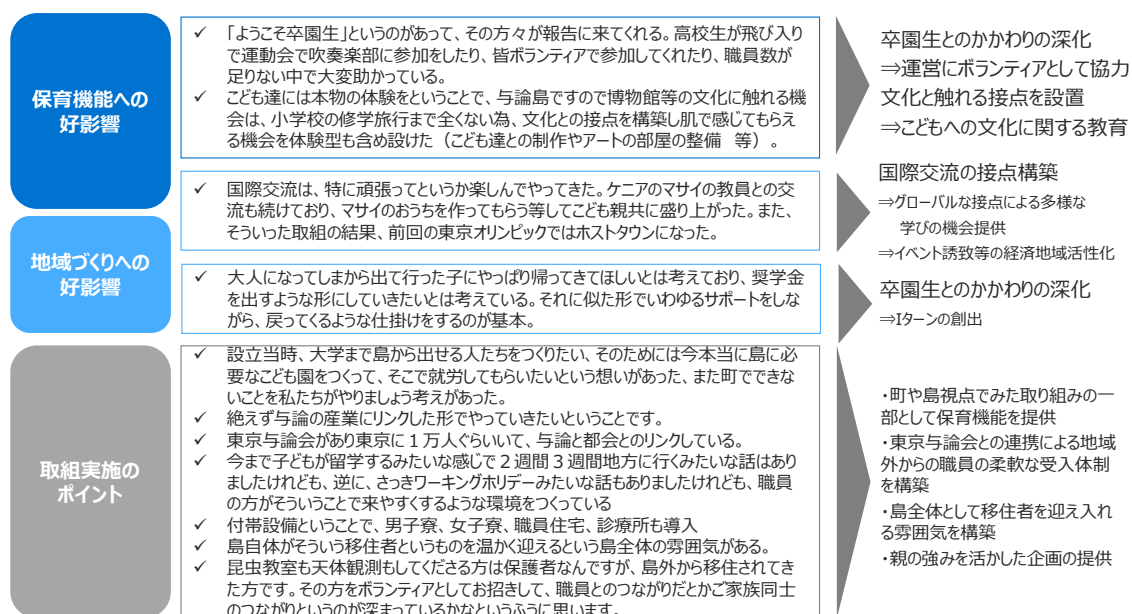
各委員会での議論を踏まえた、保育機能と地域づくりのシナジー/好循環形成に向けた仮説は以下のように整理できる。

(1) 第2回研究会の議論を踏まえたシナジー

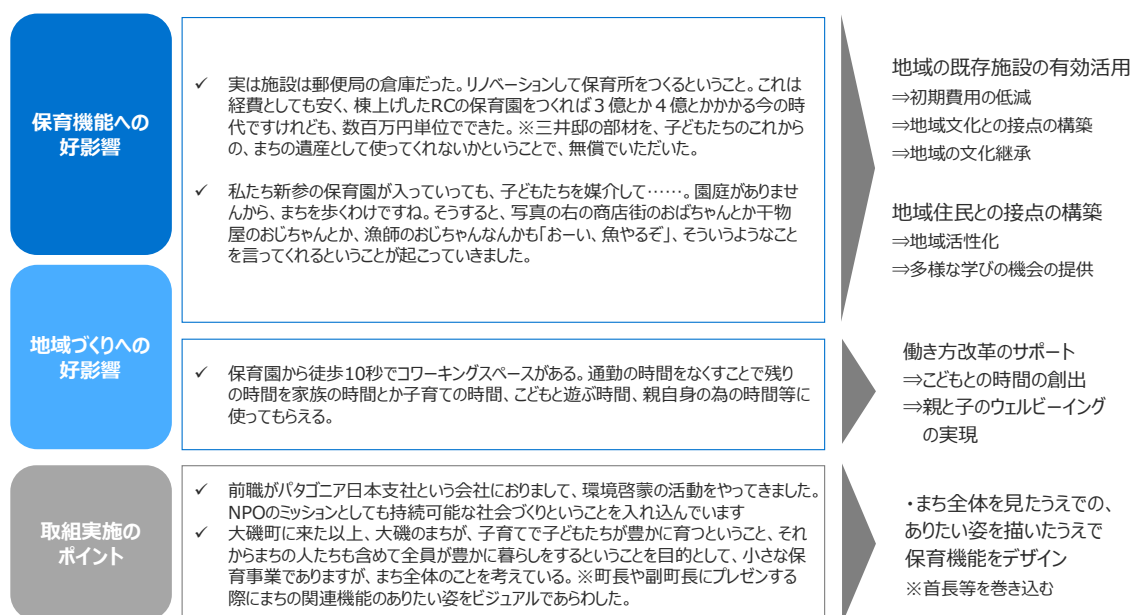
第2回研究会の振り返りと気づきとしては、ちびはる保育園では、商店街の中に立地し、エリアとして保育機能を担うことで様々なシナジーを創出されている。

保育機能への 好影響	✓ 商店街だと、人が入ってくるということに対してウエルカムな部分が多分あると思うので、その辺が。にぎわいというものをうさいと感ずるか、ウエルカムなのか、そこが大きく違ったのかなと感ずる。 ✓ 保育園・幼稚園の保護者駐車場と玄関までの距離が遠いところもありますけれども、そんなこともないので、送迎が楽だということはある ✓ とにかく迎えてくれる。通行人の方々も温かく話しかけてくれる。子どもたちもそんな中で、地域の中で育っているという感覚。それが一番かなと思います。	周辺業務が生じづらい環境 ⇒保育に専念できる環境 エリアでのこどもを見守る環境 ⇒子育て世代の負担軽減
地域づくりへの 好影響	✓ フェンスの中の園庭で遊んでいる。もちろん、保育する側からすると安全で遊ばせやすいんですけども、あくまでもその中で遊んでいるというだけで、ほかのひととの交流は当然ないわけですね。ところが商店街では、容易にご想像がつくと思いますし、先ほどもお話ししましたとおり、通りがかりの人が本当に話しかけてくれるところがある。 ✓ 夏祭りの山車の参加人数を見てみると、基山モール商店街の参加数が群を抜いている。 ✓ 商店街としても、10年前まで空き店舗が10店舗ありましたけれども、今では空き店舗は2店舗ということで、増えてきている。そして、今年もまた1店舗ふえるということで、好循環となっているのではないかと感ずっている。 ✓ 商店街の中で、いろいろなお店があって保護者の方もそこでお買い物をする。	様々な人との接点構築 ⇒発達への好影響 ⇒地域コミュニティの活性化 (多世代交流含む) 事業者の増加 エリア消費の増加 ⇒エリア経済の活性化
取組実施の ポイント	✓ 基山町自体、小さな町で、役場自体も「部署が違うからわかりません」みたいな感じが全然なくて、横断的に役場のほうが頑張っていた。 ✓ とにかく町長と。それから基山町全体が、とにかく少子化を防いで、なるべく若い世代に入ってきてもらおうということ動いていた。 ✓ そこ(商店街)は車は一切入れないので、時間帯によって車が通るとかということではないです。歩行者のみという感じですね。そこ(商店街)に来るまでには当然、車で来る方が多くて、商店街専用駐車場というのが結構あります。	様々な観点から子育て 機能の価値の見直し・ 部署横断の必要性

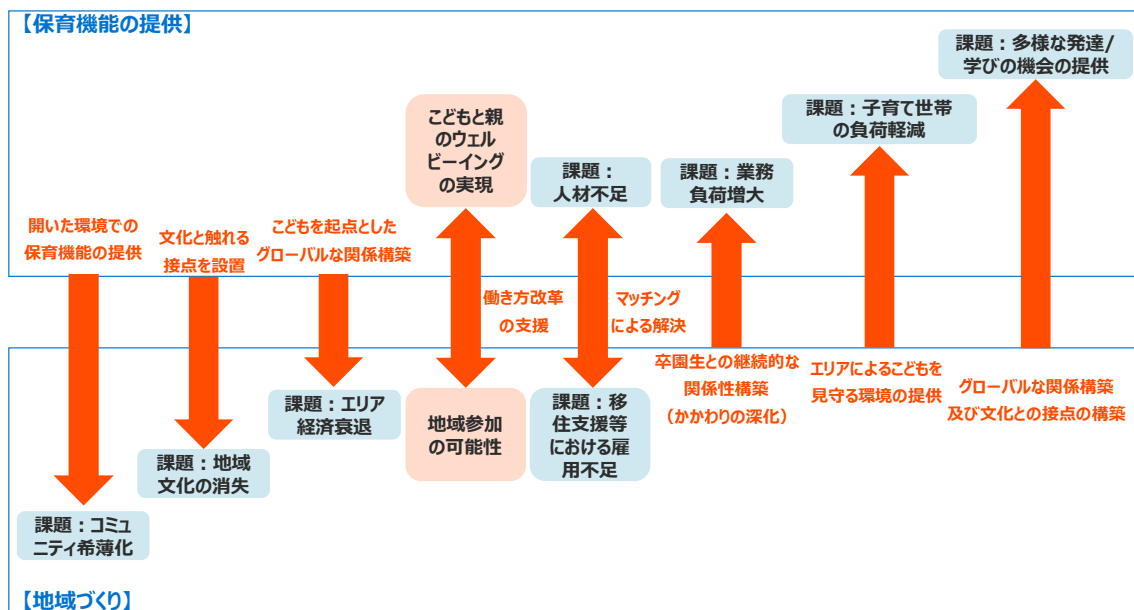
株式会社 CNC では、山間地に立地しつつ、地域コミュニティの活性化に資する繋がり
の創出にコアを置きつつ、子育て世代に特化した取り組みを実施している。



NPO 法人もあなキッズ自然楽校では、地域と連携しながらあるべきまちの機能を描いたうえで、コワーキングスペースの隣接等の地域との連携を深めながらあるべきに近づいている。

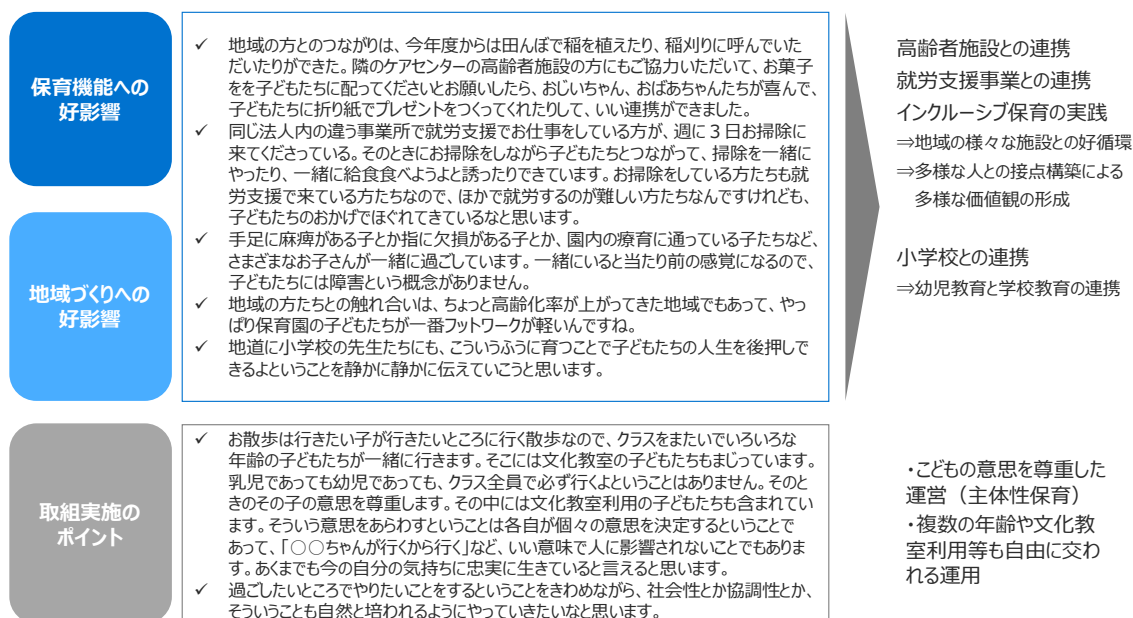


以上、第3回研究会での議論を踏まえ以下のようなシナジー/好循環が抽出できる。



（３）第４回研究会の議論を踏まえたシナジー

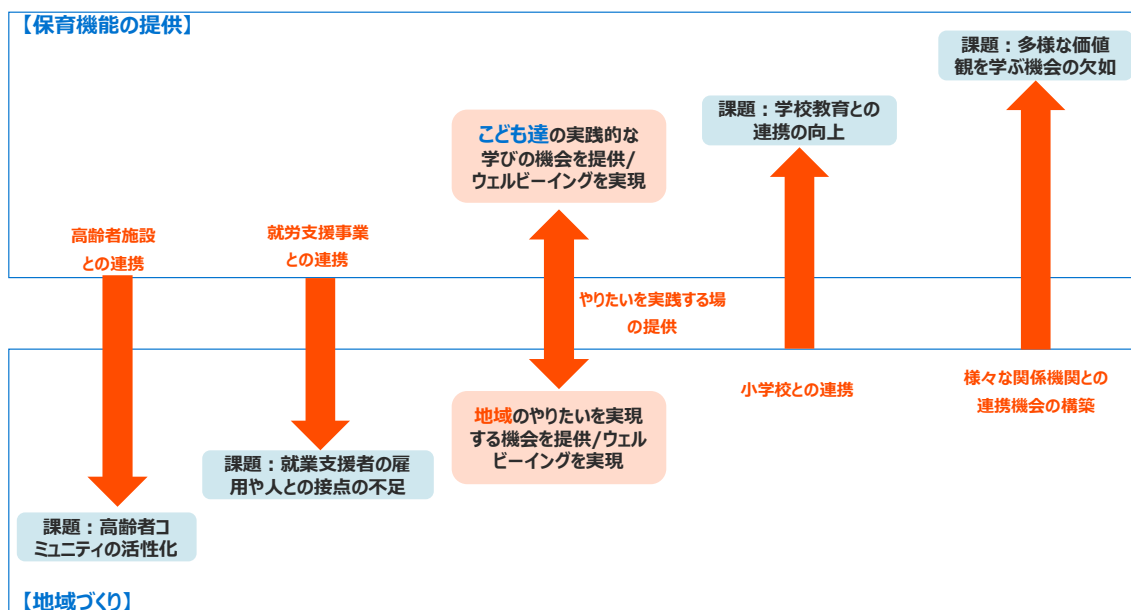
第４回研究会の振り返りと気づきとしては、社会福祉法人愛川舜寿会では、高齢者施設・就労支援事業・インクルーシブ等様々な「人」と繋がる機会を設けつつ、そこにこども達や職員自身が主体的にかかわっていく仕組みを構築している。



社会福祉法人清朗会では、主体性を大切にした保育を実践しつつ、その考え方を地域の幅広い方々にも展開できるよう併設のカフェを運営している。

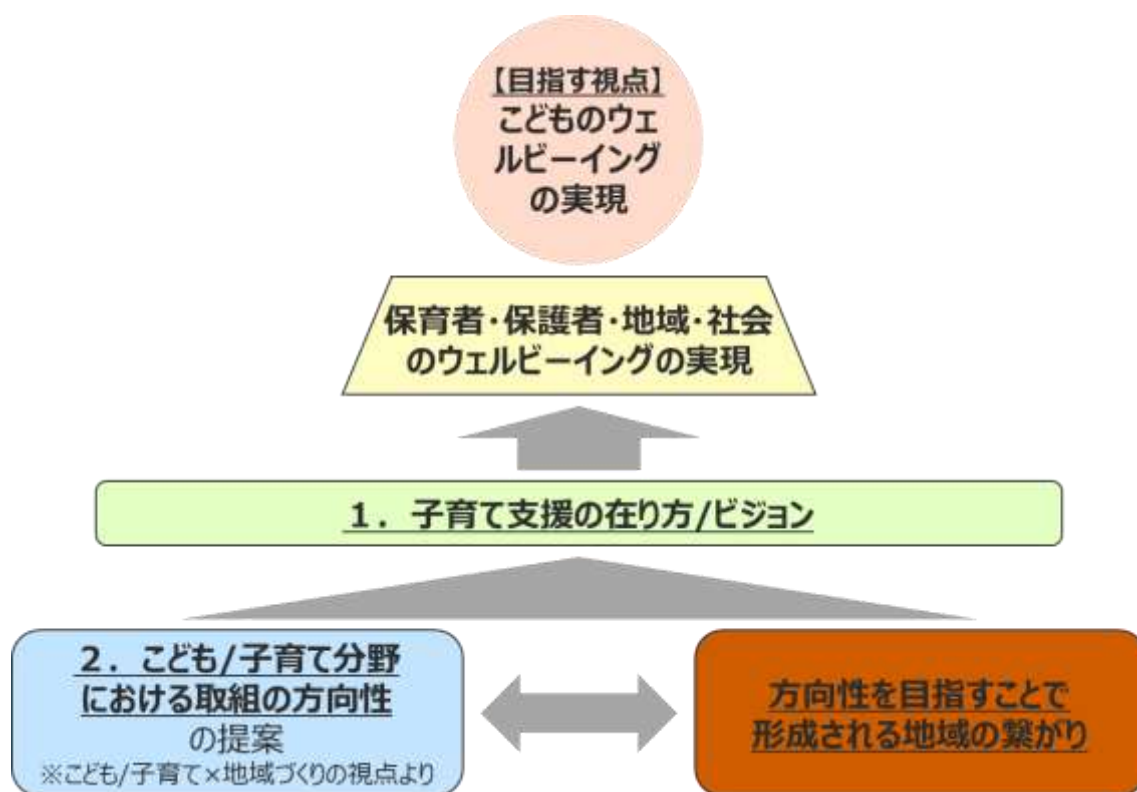
保育機能への 好影響	✓ 「やりたいことをとんたのしもう」ということで、FOYERというのをつくりました。ちょうど2019年ぐらいですね。できて数カ月でコロナになって、基本的コンセプトは最初は地域の人にも開放しているような拠点にしようと思ったらコロナになってあらゆる人間がなくなり、もはや開店休業みたいな状態になり、何もできなくなってさあどうしようということだったんですが、模索しながらやり続けて、今年の4月にやっと明けて。でもその中に、いろんなことをやらせていただく中で、やっぱり根本として大切にしていることは居場所というのが僕の中での定義で、先ほど言った、子どもだけじゃなくて、いろんな人の居場所としてのをすぐつくりたいというのがあってやり続けていました。	やりたいを実践する場の提供 ⇒主体性保育を実現し、こどもにのびのびできる環境を提供 ⇒地域の様々な人達のやりたいを実現・ウェルビーイングの実現
地域づくりへの 好影響	✓ 「標本作り」なんかも。これはうちにほぼ毎日来ている不登校の2年生の子なんですけど、虫が本当に大好きなので標本づくりをずっとやり、標本をつくりたり焼き芋を焼いたり、この間もずっと焼き火をしながらいろいろ。凸凹さんじゃないですけど、この子もうちの子たちとお散歩行ったり給食食べたり、本当にその辺はもう自由にいいよ、その子が来たいように来たらいいというのを根本に置いています。この子から見えてきて、いろんな子がいるし、そういう子どもたちや環境に対してどういうことができるかなということで、ここをとかくうちの園とまざっていこうということで、今うちの在園児もよくいろんな活動をこっちの子たちとしています。	
取組実施の ポイント	✓ 子どもに求めるんじゃないくて、社会とか地域とか僕らがそこをちゃんと担って考えていかなくちゃいけないというのはすごく感じています。 ✓ 子どもをどんな真ん中に置きたいですかと、どんな真ん中として育みたいですかという、やっぱり尊重されている、愛されている。こども家庭庁の定義も、子どもって18歳ですか、20歳ですかと曖昧にしてくれたのはそういうところにあると思うので。別に30歳でも40歳でも50歳でも60歳でも、こう愛されたいし尊重されたいし信じてほしいと思えば、それはその場所には必要なんじゃないというのが僕の根底にある。 ✓ FOYERは補助金なしでやっているんです。届け出は独自の公益事業みたいな形でやらせていただいているので、フットワーク軽く柔軟に事業を実施できている	・こどもが安心し、のびのびとやりたいことに向き合える環境を提供 ・保育の対象のみではなく、職員や保護者や地域の人々の視点も意識した取り組みを実践 ・補助金を活用せず柔軟な事業運営を実現

以上、第4回研究会での議論を踏まえ以下のようなシナジー/好循環が抽出できる。



第6章 研究会における示唆のまとめ

前章までに記載した研究会での議論を踏まえ、本章では総じて目指す視点と検討から抽出されたビジョン、施策の方向性等について整理する。まず、総じて目指す視点は「こどものウェルビーイングの実現」と捉えつつ、「保育者・保護者・地域・社会」が「こども」のウェルビーイングを支えていく形を実現することが重要であり、そこを実現するにあたり「保育者・保護者・地域・社会のウェルビーイングの実現」が求められる。このような社会を目指す視点として整理した。その目指す視点を実現するにあたって必要となる子育て支援の在り方/ビジョンを R4 年度の検討を踏まえつつ再整理し、さらにはより地域づくりにフォーカスした今年度の検討から抽出した「こども/子育て分野の取組の方向性」の提案と「方向性を目指すことで形成される地域の繋がり」を以降に記載する。



1. 子育て支援の在り方/ビジョン

R4年度の検討と今年度の検討を踏まえ整理したこども・子育て支援の在り方/ビジョンは以下の通り（青文字部分が今年度検討から追加で抽出整理された部分）。保育/教育等のこどもの育ち・学びと子育てを支援する取組だけではなく、働き方等の異分野との関係や家庭や親と子の関係、文化的な側面も含めた地域との関係に関するビジョンを整理した。今年度の検討では、地域とこども・子育てとの関わりを深める変革（過去は身近にあった関係性に戻す部分については「回帰」と捉える必要性もある）によりこども・子育て及び地域活性化等の観点から好循環が生じ、地域全体としてのウェルビーイング（幸せ）を実現していくことを中心としたビジョンを追記した。

	取り巻く社会環境	こども・子育て支援の在り方/ビジョン
① 子育ての捉え方/こどもの時間	こどもと触れ合う豊かさ、土日の過ごし方も含め、家庭・地域での過ごし方の変化 ※労働時間の改革と子育て時間の確保	「親が子育てをする」から「地域で子育てをする」への回帰・変革 - 親と子の関係性の再考、親の学び・支え合いの観念の導入 - 家庭を支援し、親と子それぞれのウェルビーイングを実現するという観念の導入 - 子育ての「普通」化（今は子育てがとても難しく、特別なものになっている） - こどもの声を社会リソースに変換/皆で学び合う姿勢の形成
② 働き方/経済環境	- 現状におけるリモートワークの進展、さらに今後におけるICTやAIの活用が進んだ社会の考慮 - 経済的な不安の高まり	- こどもも含めた皆の幸せな生活のための働き方へ - 非正規雇用など経済的な安定性の低い家庭でも安心して子育てができる環境へ
③ 保育等の形	- 多様な働き方を支えるためにこれまで延長保育や病児保育などのサービスの充実・今後の更なる拡充 - 新しい保育の定義	- 保護者が働くための保育からこどもも含めた皆の幸せのための保育へ - 子育ての孤立化予防 - 家庭、地域、保育所等・事業者・専門職の関係の最適化 - ライフステージを通じたこども・子育てとの関わりの変革 - こどもの誕生や成長を喜ぶ地域づくり - 保護者の地域活動への巻き込み/競争から共創への価値観の変革 - 新しい保育者像・保護者像の形成 - 指導の考え方/文化/価値観の見直し - こども/保護者/保育者が保育所等を選ぶことのできる環境の構築
④ その他	- 障害への理解の変化 - 困難な状況にあるこどもの増加 - 地域コミュニティの希薄化、過疎化	- 予防型社会の実現 - インクルーシブな観念の導入 - こどもを中心とした地域の活性化 - 点から面で支える社会

2. こども/子育て分野における取組の方向性への提案

「こどもや保育者・保護者・地域・社会のウェルビーイングの実現」や前述のビジョンを実現するにあたり、地域づくり×保育機能の視点から今後検討がなされていくべき10個の方向性を抽出した。

方向性①育ちの保障及び機会の提供/保育の質の確保

幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョンが示されている等、既にその必要性が認識されている方向性ではあるが、その中でこういった育ちや機会が保障されるべきか/保育の質が確保されるべきかを定義したうえでその提供に当たり地域との接点を強化することは様々な育ちを促す手法としてとらえられることが想定される。

方向性②こども・保育者の主体性を尊重できる環境の提供

こどもや保育者の主体性の尊重にあたり、多様な機会を提供できる環境の構築が重要となる。施設のみで閉じた検討ではなく、地域としてこういった環境が提供できるかを検討することによりその可能性を広げることが重要となる。

方向性③インクルーシブな環境の提供

方向性①に関連するが、インクルーシブな環境は保育所等の施設内やこども達の中の話ではなく、より広いインクルーシブな環境との接点を持つことがこども達の様々な育ちや子供達はもちろんのこと地域住民のウェルビーイングの実現につながることを期待される。

方向性④地域におけるソーシャルワーク機能の実装

児童虐待件数の増加が目まぐるしいなか、妊産婦や子育て世帯が孤独化・孤立化しないような社会づくりの重要性が高まっている。そういった中、こども誰でも通園制度が導入されることもあり、保育所等にはソーシャルワーク機能の実装と充実がより一層求められるようになると予想される。また、保育所等の中におけるソーシャルワーク機能だけではなく、保育所等が保健センターや児童発達支援センターなどの関係機関と連携したり、地域とつながることで地域全体としてその機能を担えるような体制づくりが重要な視点となる。

方向性⑤産前の妊婦や卒園後のこどもとの継続的な関係構築

卒園後のこどもとの継続的な関係構築は、こどもへの居場所の提供はもちろんのことこどもが園の運営をサポートしてくれるケース、一度地域を出たこどもが様々な機会に地域に戻ってくる起点の形成となりうるということが研究会におけるヒアリング等から明らかとなった。在園中、卒園後、入園前、加えて産前の妊婦との関係構築が実現すれば、今

般の児童福祉法改正において意識されている産前産後の繋がりのある支援の提供を超えたこども・子育て支援の在り方の在り方検討に繋がる。また、学校における部活動等を通して卒園生に限らず地域の学生に保育と接する機会を提供することも未来の父母の育ちの観点から重要な取り組みとなる。

方向性⑥安心安全な環境の提供

地域との接点を増やすことは多くのメリットがあることを示してきたが、他方で地域に出ることや様々な人と接点を持つことは特にこども達にとって事件・事故に巻き込まれる可能性を高める側面がある。地域との接点を設ける際には前提として地域の実情に応じた安心安全な環境構築を意識した検討が行われる必要がある。

方向性⑦保護者の働き方改革への寄与/保護者の地域参画

基本的な事項ではあるがこどもと保護者との時間の確保は愛着形成等の観点から重要であり、その時間の確保は共働きが促進されるに従い難しくなっている。そのため、働き方の柔軟化、業務効率化による労働時間の削減について、地域として積極的な検討を進められることはこども・子育ての観点からも重要となっている。研究会のヒアリングで見られたコワーキングスペースを併設するような取組等は具体的な取り組みであり、今後こういった取り組みが広がり地域ごとで様々な創意工夫がなされることが期待される。また、地域の保護者が持つスキル・専門性を活かした保育や子育て支援への関与はこども達への学びの機会提供につながることから、家庭内のこどもと保護者の時間確保とは別途、保護者が地域の保育や子育て支援に関わる時間を取ることも地域全体のウェルビーイングの最大化の視点からは重要となる。

方向性⑧高齢者支援/就業支援/商業/教育等との連携強化

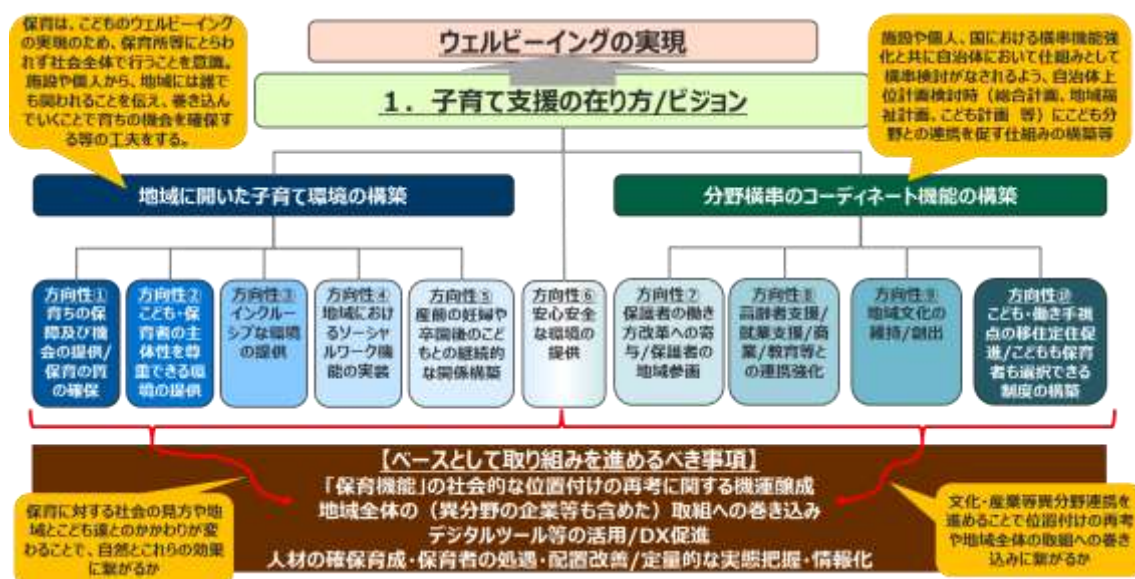
研究会で実施した先駆的な取り組みへのヒアリングで高齢者支援/就業支援/商業/教育（学校）等の分野との連携にはシナジーが生じることが明らかとなった。今後はこういったシナジーが意識され全国的にこれらの連携強化に向けた検討が進むことが期待される。

方向性⑨地域文化の維持/創出

地域文化の継承・維持には世代間の橋渡しが必要不可欠であり、こども達が地域文化を学ぶことは重要である。他方で、文化はあたりまえのものとして日常的に溶け込んでいるものであり、近代化・画一化が進むなかで、地域ごとの違いが意識しづらくなっている。こども達が地域と触れ合うことを通して地域での暮らしを体感し、将来の地域の暮らしを作っていく人材となっていくことが期待される。

方向性⑩子ども・働き手視点の移住定住促進/子どもも保育者も選択できる制度の構築

人口減少等の背景から、特に地方部においては子育て世帯のIUJターンや移住定住促進施策の重要性が高まってきている。これらを進めるにあたり、こどもの権利が守られる環境・より良い育ちの環境が提供されるか、保護者の雇用が確保されるかは重要な視点となる。それと併せて、こどもの保育環境が柔軟に選択できる仕組みが構築できるかも大きな論点となる。他方で保育者の確保が難しい地域も存在する中、保育者の移住促進や保育者も働き方を自由に選べるような環境の構築が求められる。

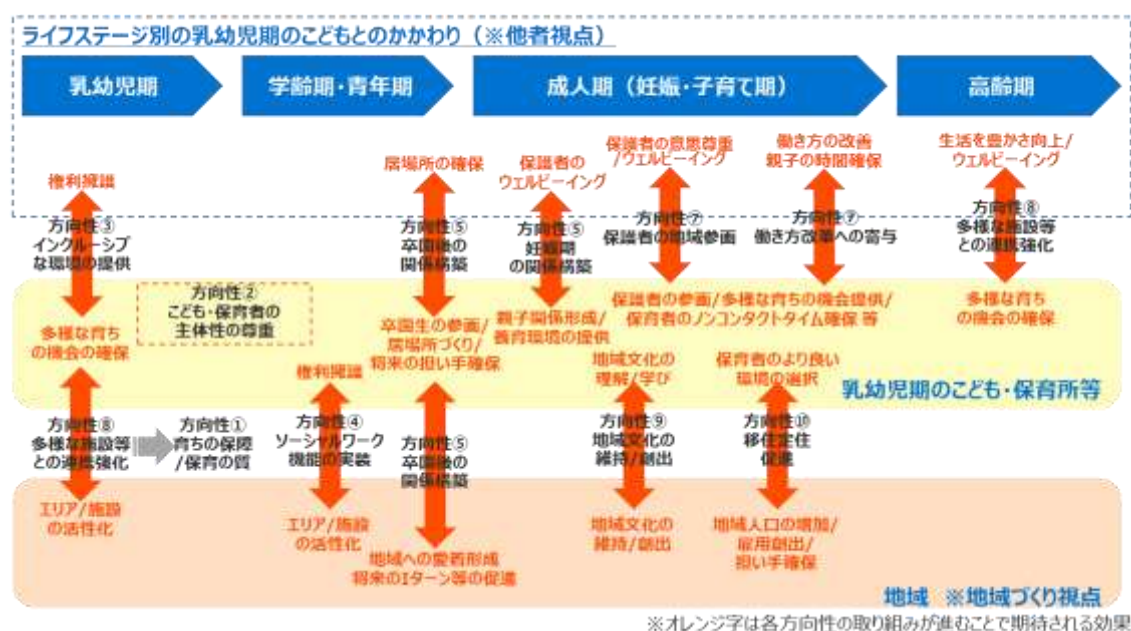


これらの方向性を進めるにあたっては保育関連事業者・自治体・地域それぞれが協力しながら検討を進める必要がある。具体的には、子ども・子育ての分野においては関連する事業者・施設・担当者が専門性を持ちつつも、知見のない地域住民でも参加できることを発信していきながら地域に開いた子育てに取り組んでいくことが重要となる。一方で、子ども・子育て分野と異分野との連携に関しては、子ども・子育て分野の事業者・施設・担当者が意識・実践していくことはもちろんのこと国における横串機能強化と共に自治体において仕組みとして横串検討がなされるよう、自治体上位計画検討プロセス（総合計画、地域福祉計画、子ども計画 等）において子ども・子育て分野と異分野との連携を促す仕組みの構築等も重要となる（研究会でヒアリングした取り組み事例からは自治体が異分野との連携機能を担っている事例がみられたが、この機能を「仕組化」することで多くの地域で実践できるよう働きかける必要があると考える）。

また、これらの方向性での検討が進むことにより、実態としてこどもの存在や保育所等が地域づくりにおいて担う機能に変化が生じるため、「保育機能」の社会的な位置付け代わることが期待され、位置付けの再考に向けた機運醸成の動きとの相乗効果が期待される。異分野との連携に関しても、子ども・子育て分野とのシナジーが明確化されることで

他分野の事業者等が分野横断での取り組みを推進するインセンティブを感じやすくなることが期待され、地域全体の（異分野の企業等も含めた）取組への巻き込みが促進すると考えられる。

次に、これらの方向性を地域との繋がり観点から整理した結果を以下に示す。抽出した方向性を目指すことで様々な地域の繋がりが形成され、多くのメリット・シナジーが見込まれる。これらの点を意識しながら、具体的な実現は地域の実情や地域住民の暮らしを踏まえ適宜カスタマイズしながら取組を具体化する必要がある。



3. 今後の地域における検討や社会全体への期待

「こども誰でも通園制度」をはじめとしたさらなる子育て支援策の充実が図られることで、地域の保育力がこども達に与える影響、地域づくりに与える影響が今後大きくなることが予想される。それに伴い、各地域でより良い保育×地域づくりを実践していく必要が生じる。その検討の際には以下の3点を意識した検討がなされ、社会全体としての機運醸成にもつながっていくことを期待する。

（1）こどもを温かく迎える地域、こどもにより活性化する地域の再生

保育関連施策を含むこども・子育て分野と地域づくりとの関係性が深まっていく中、こども・子育て分野に閉じず地域住民全体のウェルビーイング実現にどのようにこどもが関わられるかという視点での検討が必要となる。これによりこどもと地域との繋がりを増やすことを考えることになるが、これは新規性や取組の難易度が高いものではなく、様々な地域で身近に実践されているものであり、コミュニティの希薄化・孤立化、過疎化が原因で少なくなっているに過ぎない点を意識し、意図的に地域の人や環境を活かす等地域に合わせた創意工夫がなされることが期待される。この際、多様なステークホルダーの参画と協働、官民

連携の推進が重要となる。

(2) 将来も踏まえたウェルビーイングを意識した考え方の導入

こども・子育ての分野は短期的や分野内に閉じた考えに陥ると機会費用や限界費用等の経済的側面への意識が強くなり、特に将来的な効用の高まり（幸福度向上/ウェルビーイング）は意識しづらくなってしまいます。他方で、これまでの検討で整理した通り、地域づくりとの関係を深めていくことは将来的な効果はもちろん短期的な幸福度向上/ウェルビーイングも見込まれる。そのため、こどもを中心としながら地域視点に立ち経済だけでなく、全体の幸福度を最大化するにはどうすべきかという視点を意識した検討が行われることが重要と考える。

また、その検討においてこどもを中心とし、こどもの育ちにとって良い環境を提供すること等が地域全体のウェルビーイングの実現はもちろんのこと移住促進等にもつながることが期待され地域における好循環の形成に資する点は留意が必要である。

(3) こどもの育ち（こどもの育つ環境）を意識し、働き方、暮らし方の選択を応援する地域づくりの検討

上記の検討をする中で、個人の価値観が多様化してきている点には留意が必要である。また、地域ごとに過去からその地域で暮らす人、子育てのタイミングで移住してきた人、地域コミュニティへの参加が苦手な人、テレワークが多い人、こども・家庭が困難な状況にある人等、価値観だけでなく置かれた背景・状況も様々であり前述の（1）及び（2）を意識した検討を行うには、こどもの育ちはもちろん地域の人々の暮らしを意識した検討が重要となる。また、その検討の中で地域ごとの暮らしを整理し、地域における暮らしの魅力を発信していくことで地域全体をより豊かにすることが期待される。